
アクセサリー

藤戸志乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクセサリー

【NNコード】

N2856T

【作者名】

藤戸志乃

【あらすじ】

キスは挨拶、セックスは遊び……。

そんな男の行動一つに、泣いて浮かれて、バカみたい。

実咲は付き合っている彼の浮気を見てしまった。

もう別れるしかない、そう覚悟を決めるが、雅貴を好きな気持ちが実咲の決心を揺るがせる。

こんな男に振り回されたくない。

別れを切り出した実咲に、雅貴の返した反応は、意外な物だった。

キスはあいさつ、SEXは遊び。
そんなこと、分かつていたのに。

でもそんな男の行動一つに、浮かれて泣いて……バカみたい。

実咲はあふれてきた涙を無造作にぐいっと拭つた。

「ほんと、バカ……」

涙で震える声で呟いた。

分かつっていたのに、そんな人だつて。
でも、それでも信じたかつた、自分だけは特別だと。
嫌なことから全部目をそらして、耳をふさいで、考えないようにして。

そこまでバカなふりをして自分の手の中にある幸せを手に入れただのに、それさえもさせてもられない。

バカみたい。

涙をこらえようとして、喉がこらえきれないくらい痛みを増した。
泣きたくなんかないのに、涙があふれ、喉の痛みに耐えかねてしまくりが上がる。

悲しくて、辛くて、惨めで。

それでも、たまらなく好きな気持ちが変わらずあつて、そんな自分がたまらなく嫌で。

後から後から涙が込み上げてくる。こらえようとするほど、激しく押し寄せてくる。

自分と付き合っているはずの雅貴が、彼好みの美人と抱き合つてキスを交わしている。最近、彼の周りで見かけていたきれいな人。実咲は凝視していたその場面から目を背け、また来た道を逃げるよう駆け戻った。

目に焼き付いたその映像から逃げたくて、頭から消してしまったくて。

けれど、いいかげんに終わりなんだと思い知らされて、それが嘘であつてほしくて。

……全部から、逃げ出したかった。

絶対に後ろは振り向かない。

見たくもない。キスをしている一人の姿なんか。

キスの後、雅貴は彼女の腰を抱き寄せ、きっとそのまま恋人のように寄り添つて歩くだろう。そして当たり前のようすにホテルまで誘うのだ。そう、実咲にするのと同じように。

だから見なくても簡単に想像がついた。

いま実咲と付き合っているからといって、そんな言葉だけの関係に意味なんてないのだから。雅貴にとつて付き合つていようがいまいが、セックスさえできれば実咲もキスをしていた彼女も同じなのだろう。

そして自分がだけは特別だと自分自身に思い込ませてのこのことについて行つた実咲のように、彼女も誘われるまにについて行くのだろう。

雅貴、セックス好きだよね。

実咲は心の中で皮肉に咳く。自嘲めいた笑みが口端に浮かんだ。なんで、あんな人を好きになつたんだろう。

それは今までにも、自分に對して繰り返し問い合わせ続けていた事。今更答えがでるはずもなかつた。

理屈ではないのだろう。だから尚更想いを変える術を見つけられないのかもしれない。

「あんなバカ、どこがいいのよ」

声に出して自分を責めて、けれど思い浮かぶのはそんな最低な男と自分以外の女のキスシーンだった。

胸を占める気持ちは悔しさでも腹立たしさでも怒りでもなく、た

だ自分を襲つ悲しさと、胸が痛くなるほど辛い思い。
その事がこりうれようもないほど悲しくて辛くて、ただ涙があふれ
た。

帰ってきた部屋の中は嫌になるほど静かで、自分の息づかいがやけに響いて聞こえた。

ベッドに体を埋め込むように投げ出して、力一杯さんざん泣いた。叫びたい気持ちのまま、布団と枕に顔を埋めて実咲は声を上げた。胸に渦巻く気持ちを吐き出すように、泣けるだけ泣いてやるうと、力一杯泣いた。

さんざん泣きわめくと、泣いて暴れている自分が滑稽に思えてきて力が抜けた。

むくりと体を起こすと、実咲は自嘲気味に笑う。
もう、終わりなんだ。

疲れるほど泣いて、少しずつきりした頭と投げやりな気分でたどり着いた結論。

続けたければ続けられる。見なかつたふりをして、いつものように隣にいればいいだけのこと。

雅貴を手放したくない気持ちが、そう自分を誘惑する。
けれど自分はそれに耐えられない事も分かっていた。

雅貴と付き合っていく上でこの程度のことが気になるようなら、続けていても自分が辛くなるだけなのは目に見えているから。
だから終わらせよう。

実咲は決意する。

「別れよう」と、たつた一言でいい。

そしたらきっと軽く「分かった」と返されて、それで終わる。
別れようと決意しているのに、まだ雅貴のことが好きな自分が「本当にそれで良いのか」と決意を揺るがそうとする。別れたところで忘れるのか、と。

決意と躊躇いの狭間で堂々巡りになりそうな頭を振って、実咲は

自分に言い聞かせる。

忘れるかどうかなんて分からぬ。けれど、きっと自分は今より楽になる。

だから、別れるのが正解なのだ。だって、もう考えなくてすむのだから、と。

いつも考えていた。雅貴にとつて自分がなんなのか、いつまでこんな関係が続けることができるのか、と。別れてしまえば、もうそんな事を考えなくて良いのだ。

付き合つ前も、付き合つ始めてからも雅貴は実咲だけを見ることがなかつた。「付き合つ」という言葉の意味を考えるのがばかりしくなるほどに。

全て言葉の上だけのこと。気持ちも行動も伴わない「付き合つ」という言葉。それに振り回されただけの四ヶ月。

考えれば考えるほどあまりにもバカバカしくて笑いさえ込み上げてくる。

何もなかつたフリまでして縋る価値がどれほどあるのか。静かな部屋に、実咲の笑い声がむなしく響いた。

実咲は小さくため息をつく。

雅貴の容姿は周りの男達からは群を抜いて良い。長身で細身だけれど筋肉質な引き締まつた身体。きれいだけれど、どこか男臭い整つた顔立ち。会話は退屈させないし、いつも周りに女がいる。

実咲はそんな雅貴と一年余りの間、ただの友人でしかなかつた。けれど友達同士の付き合つの中で、いつからか雅貴の隣に自分以外の女性が隣にいることを辛いと感じるようになつていた。隣にいるのは自分でありたい、友人ではなく女としてみられたい、そんな風に願うようになつて、実咲は雅貴の彼女の座を望んだ。

その結果、彼女というその立場はあつたつと実咲のもとに転がり込んできた。

実咲はその軽さの意味から目を逸らし自分に都合のいい部分だけを見て、雅貴にとつて自分自身の存在が特別であるという理由を見

いだそうとしていた。

雅貴の周りには実咲より遙かにかわいい女の子が数多いう。男慣れしていく後腐れのないその子達。比べて、どちらかといえばまじめで、男の子と付き合ったことはあるもののセックスに至つては雅貴が初めてだつたような自分。そんな実咲のことを知つていながら、それでも雅貴が自分を選んだその意味、……特別だからだと、思つたかった。

もつて一ヶ月、早くて三日。どこまで本当か知らないが、そんな付き合い方しかしないと噂されていた雅貴。確かに友達として側にいた頃から、取つ替え引き替え、すぐに周りにいる女の子は変わつていつた。そんな雅貴が、自分とは四ヶ月ももつてゐるなんてことに特別を見いだして、実咲は彼女の座にすがつてきた。

なんて事なかつたのに。ただ、お互い別れを切り出さなかつただけ、それだけのこと。雅貴にとつて、自分は別れを切り出さなくていいくらいには都合が悪くなかつただけのこと。

そう思つと、また涙があふれてきた。

本当は知つていた。

見ないふりをしていただけで気付いていた。自分と付き合つてゐる間も他の女と寝ていたこと。キスは本当に挨拶代わりに誰とでもしていること。

知らないふりして、聞こえないふりして、自分だけは特別と言ひ聞かせて。

だけど、雅貴は私でなくともいいんだよね。

実咲はこらえようとしてもこぼれる嗚咽を聞きながら、心の中でつぶやく。

分かつていた、知つていたよ、そんなこと。

本気で雅貴を好きな私が、バカなんだ。

こんな事で泣いている私が、バカなんだ……。

こぼれる涙をぬぐい、こぼれる嗚咽をかみ殺し、疲れたように実咲は笑う。雅貴を信じようとしてきた自分があまりにも滑稽だつた。

もう、明日で全部終わり。
眠れない夜は、ひどく長かった。

「おはよー」やつまーす」

研究室に男の声が響いた。

実咲は試験管を揺する手を止める。顔を上げて入り口に立つ男の顔を見た。

雅貴。

実咲の心臓が突然どくどくと音を立てて騒ぎ出した。

「おはよう

わざかに声がかされた。

「あれ？ 今研究室にいる、実咲だけ？」

実咲以外いな事に気付くと、雅貴はとたんに碎けた様子になりにこにこしながら入つてくる。

「みんな現場に行つてるから」

実咲はなんでもないフリをして試験管を置き、判定を書き込む。そんな実咲の素つ気なさはいつも通りの反応だつたが、「いつも通り」にしようと思つと、いつも通りがどうだつたかを見失いそうになる。

「実咲、目、赤い。寝不足？」

歩み寄ってきた雅貴が、実咲の頬を触る。

昨日は、何の連絡もしてこなかつた人。

なのに心配そうに見つめてくる瞳が愛しくて実咲の胸が痛む。

「そう？ 昨夜ちょっと眠れなかつたから。そのせいかな」

夜に呼び出して別れを告げるつもりだつた。けれど、今なら誰もいない、いっそ、今別れを切り出そうか。

いつも通りを装つて会話を交わしながら実咲は考える。

「実咲でも仕事中居眠りとかする？」

「出来るわけないでしょ。だいたいが立ち仕事か、居眠りが出来ないような作業中だし」

苦笑しながら、笑つて いる雅貴の脇腹を「もう少」と肘で小突く。別れを切り出そつかと思うと、顔を見ることが出来なかつた。実咲は新しい試験管を取り出すと小刻みに揺すり、仕事と当たり障りのない会話で動搖を隠す。

「それに、今日は検体が多いから忙しいし。あ、そつだ、シャーレ届いてる? 今日中に来ないと足らないんだけ?」

「ああ、とりあえず一箱確保してきた。メーカー違つけど大丈夫?」「サイズは?」

「それは一緒」

「なら良いよ。あ、単価は?」

「あー、えつと。こっちが安い。けどまあ、ほとんど一緒に。確認する? 単価当たりだと一円以下」

「ふうん。あ、これ、以前サンプルもらつたトコのだね」

「そう、それ」

「次は、いつもの入る?」

「三日後にはいけるはずだけど」

「じゃあ、それで良いよ。経理にも説明お願ひね」

別れを切り出そと想いながら、結局は切り出せないまま仕事の話でごまかしている。早く言わないと、誰かが戻つてくる。

そう思つと、どくどく心臓が高鳴り、試験管を持つ手元がわずかに震えた。試験管を振るのが作業の一つで良かつたと、心の中で溜息をつく。

突然雅貴が笑つた。

「相変わらず、仕事熱心だよな」

「何のこと?」

「他に来ないし、俺が来てるわけだし、少しごらり手を止めてもよくない?」

からかうような物言いに、実咲は手を止めることなく「あり得ない」と笑う。

「今日は忙しいって言つたでしょ。時間のタイミングが五分ずれた

ら三十分帰るのが遅れるのよ。めちゃくちゃ濃密スケジュールなの。その代わり、うまくいけば定時で帰れるけど

「ふうん。俺も、今日は六時には終わるかな。終わったら電話して。

晩飯一緒に食おう

スケジュール帳を確認しながら雅貴が言った。実咲は唾液を飲み込む。

「……そうね」

そうだ、何も今、こんなところで別れを切り出す必要はない。仕事が終わってから、プライベートな時間にする方が良い。

実咲はそう自分に言い聞かせ、少し動搖が落ち着いた心臓の刻む音を感じながら雅貴を見上げる。

「じゃあ、夜に」

雅貴はそういうと、ちらりとドアの向こうを見て実咲にキスをする。

「なにして……」

「実咲が素っ気ないから」

当たり前のように雅貴が笑う。実咲はため息をついた。

ああ、なんで、口元がゆるんでいるんだろう。

そんな自分が情けなくて、あきれた表情は、雅貴に向いているようを見せながら、本当に実咲があきれているのは、自分自身だった。

「場所は考えてよね」

「大丈夫、人はいないから。そのくらいは確認した。俺が実咲の評判を落とすようなこと、するわけないだろ?」

「どうだか」

実咲は雅貴を追い払うような手つきで手を振る。

雅貴は「何、その態度」と笑いながら研究室を出た。部屋を出た雅貴につっこりと笑いながら手を振る。その姿が見えなくなつて、実咲はため息をついた。何をしてるんだか。

別れようと思っている相手に愛想を振りまい。バカみたい。
なんでもないフリをするばかげたプライドに、まだ振り回されて
いる。

結局、予定通り、夜まで先延ばし。

雅貴が実咲を誘う意味。それがセックスの誘いであることを十分
にわかつていた。

雅貴と会う時は、何もしなくて、セックスだけはしていた。
セックスの意味が愛されているとは同等の意味でないことは十分
に分かつていて。愛情なんて、そんなものなくつたつていくらでも
出来る行為だつていうことぐらい。

わかっているのに求められることを嬉しいと思つ自分は、やはり
バカなのかもしれない。実咲は、心中で自分を嘲つた。

仕事中、頭の中はビリヤって別れを切り出すか、いつ、切り出すか、そのことで頭がいつぱいだった。忙しいのに、ろくに仕事が手につかない。ミスをしないように心がければ仕事は遅くなり、急げば小さなミスを繰り返す。

こんななんじゃダメだ……。

そう思うのに、気持ちは仕事が終わった後のことばかりを考えようとする。

別れを切り出せば雅貴はビリ反応するのか……。

考えるだけでも緊張で鼓動が早くなる。こわかった。イヤだった。本当は、別れたいわけじゃなかった。なのに、それを切り出すしかないこの状況がたまらなく辛かった。

さんざんな一日になつた。一日で何回「すみません」と言つただろつ。実咲は、私事に振り回されて仕事がぼろぼろになつてしまつ自分の精神面の弱さを呪つ。自分のちょっととしたミスが他の人の仕事に影響してくるのに。

ため息をつきながら会社を出た。結局、定時より一時間近遅くなつてしまつた。

「終わった？ 軽く飯でも食おうつか？」

会社を出ですぐのところで声をかけられ、びっくりして顔を上げる。

雅貴がにこにこと笑いながら実咲に歩み寄つてきていた。

「……いつから待つてたの？」

「そんなに経つてない。行こ」

気にするなどいう雅貴に、実咲は泣きたくなる。

「そうね」

今日一日実咲を苦しめた張本人は、何も知らずに涼しく笑つている。そしてこんな日に限つて、雅貴は優しい。そんな雅貴が憎くて、

けれど愛しくて、蹴り飛ばしてやりたいと思つた。

けれど弱みを見せたくない、実咲は同じように涼しげに笑つて見せた。

「ありがとう」と、せらつと言つて。

当たり前のように雅貴の隣を歩く。

今日が、こうして一緒に歩ける最後の日。

そう考へると、実咲はぞつとした。

のど元から下腹部にかけて、ぐうっと底冷えしていくような感覚。頭がくらくらして、体が重く感じた。そして、別れることを意識するだけで血の気が引くほど辛く感じている事実に動搖した。

今日、別れるのだ。私が別れを切り出すんだ。

すぐ隣にいる雅貴の存在を感じる事で余計にその事実が実咲に襲いかかってきた。

実咲は止めようとしても止まらない激しい動悸におそれながら、いつ、どうやって切り出すか、考へることで感情を抑え込もうとする。

反面、動搖とは裏腹に今はまだ雅貴が隣にいるといつ事実にほつとしている自分も感じていた。

これが最後なんだ。

実咲は、必死に自分にそう言い聞かせる。

だからこうやって一緒にいることをうれしいなんて思つたらいけない。もう、これが最後なんだから。この時間を延ばしたいだなんて、思つたらいけない。いつまでも苦しみたくないなら、早く終わらせないと。

実咲は相反する感情をまた堂々巡りで考へている自分に気づき、こつそりとため息をついて雅貴の顔を盗み見る。

いつもと同じきれいな横顔だった。

「何だよ」

視線に気づいた雅貴が笑つた。

「何でもないよ」

はつとして無理矢理笑顔を作りながら目をそらす。

好きだなんて思つたらいけない。昨日のあの彼女ともこんな風に一緒にいた事を忘れたらいけない。雅貴の笑顔を横目に、実咲は隠れてため息をついた。

「なんか食べたいものある?」

「別に。あんまり食欲ないから軽食があるとこが良いけど」「俺は結構ガツツリ食べたいんだけど……」

普通に話をするのが、こんなに辛いことだとは思わなかつた。実咲は視線をそらせながら、気持ちをごまかすように辺りを見渡す。

「じゃあ、ファミレス行こつか。あそこならセレモニ種類あるだろうし」

田にとまつたファミレスを指して言つと、雅貴が笑う。

「おまえ、そういうとこ、ほんとこだわりないよな」

「え?」

「なんでもない」

意味が分からずに問い返すと、雅貴は実咲の手をさつと握つて楽しそうにファミレスへと足を向けた。

扉を開けるとカラソと音がして、店員に「いらっしゃいませ」と迎えられた。

案内された席に座り、注文を済ませると重い沈黙が訪れた。

もつとも、重いと感じているのは実咲だけだつたのかもしれないが。

本当は雅貴にも聞こえているんじゃないかと思つぼじ、実咲の心臓がどくどくと大きな音を立てている。

「なんで黙つてるの?」

雅貴が笑いながら実咲のうつむき加減の顔をのぞき込んできた。今、かもしけない。今が言つときなのかもしけない。実咲は息を吸い込んだ。

「……何でもないよ」

けれど出てきた言葉は自分の理性を裏切つた。そして取り繕つよ

うに雅貴に笑いかける自分がいた。

笑っている自分を、何をしているんだと頭の片隅で責める声がした。

実咲は笑った表情のまま雅貴を見つめる。

「……どうしようもない。今更言い出せないのは、どうしようもなかつた。

「……私は、言いたくないんだ。

笑いながら胸がきりきりと痛んだ。

雅貴が好き。別れたくない。

そんな自分に気づいてはいた。それじゃダメなのに。分かっていても、もつ少し、もう少し……と延ばしている。

「注文は以上でよろしいですか？」

店員が運んできた食べ物を確認すると軽く頷いて、去つていくその姿を何気なく横目に見る。

「今日、大丈夫だつたか？ 居眠りとかしなかつた？」

笑う雅貴が憎らしかつた。誰のせいだと思っているんだと怒鳴つてやりたかつたが、その勇気もない。

「居眠りはしてないけど。あんまり、大丈夫とは言えないかもね。定時のつもりだつたのに、一時間も遅くなるなんて」

苦笑いしてごまかしながら、熱いコーヒーを一口を付けて、その香りだけ確かめて口に含むことなくカップをおぐ。落ち着かない。

「なんか、おかしい」

「なにが？」

「調子悪いんじゃない？」

雅貴が手を伸ばしてきて、額に触れた。

気持ちよかつた。

ずっと触れていて欲しい。

その感情を抑え込んで、実咲は笑いながら雅貴の手を押し戻す。

「大丈夫だつて」

そう笑つて答えながら、全然大丈夫じやない自分がいる。自分がおかしいのは十分に分かつていて、でも、それを気付かれるのはイヤでごまかす。

そして、ごまかしながらふと思つ。

心配、してくれているのかな。

ふと思いついたその考えに、うれしさがこみ上げてきた。

そんな風に感じる自分が嫌だった。

期待したら、ダメだ。

実咲は浮かれる気持ちを必死に押さえる。

なんでもないフリしている実咲に雅貴がつぶやくように尋ねてきた。

「今日、大丈夫？」

雅貴のたつた一言で舞い上がっていた実咲の気持ちが沈んだ。ほら。

そう自分を嘲笑う。

体を気遣つてくれてた訳じゃなく、雅貴はセックスができるかどうかが気になつていただけだった。

否応なしに気付かされた事実。

そうだ、雅貴は私なんて何とも思つていない。彼女つて言う名前を付けた専用のセックスフレンド。

馬鹿だな、私。わかつていても、何度も何度も期待をしてしまう。本当に馬鹿だよなあ……。

「……大丈夫だよ」

実咲は泣きそうな気分で、笑つて答えた。

これが最後だ。雅貴に抱かれる、最後の機会。

こんな気持ちでも、こんなにダメだつて思つていても、それでも抱かれたいと思つてしまつ。最後なのに抱かれたいなんて、終わらそうとと思いながら、セックスするなんて。

馬鹿げているけど、せめて、最後だから。

自分に言い訳をする。

言い訳をしながら実咲は惨めな気持ちで自分の意志の弱さを嘲笑つた。

雅貴が食事を終えると、しばらく何でもない話をした。

そして、ファミレスを出ると実咲の部屋に向かう。

実咲は雅貴の少し斜め後ろを歩いていた。

何してるんだろう、私。

自分のすることがむなしかった。別れようとしてる男とセックス

スしに家に向かっている。

なにしてるんだろう。

やめた方がいい。

頭の中ではわかつていても、言に出せずに雅貴の後をついて行く。

今言つた方がいいってわかつてているのに、頭の中ではセックスを終えた後に別れ話を切り出している自分を想像していたりする。

終わつたら言おつ。どうせ、いつものようにセックスしてしまえば雅貴はそのまま帰るつもりだろうから。

帰ろうとした雅貴に言えばいい。

「別れよう」「うつて。

そしたら、きつと「わかつた」つて簡単に返事が返つてくるだろうから。それで終わるだけだから。

実咲のアパートに帰り着くと、いつものように先に雅貴がシャワーを浴びて、実咲が後でシャワーを浴びる。

はじめの頃は、いっぱいしゃしゃしたなあ。一緒にシャワー浴びたりして。たつた四ヶ月なのに、もう一緒に入ることさえほとんどなくなつて。一人暮らし用のアパートのお風呂なんて、狭すぎて二人では入れるような広さではないから仕方がないのだけれど、それでも無理して一緒に入つたりしていたことが、ぼんやりと思い出された。

……ナニ考へてんだろ。倦怠期の夫婦みたい。

ぐだらないことを考へながら出ると、雅貴が笑つて実咲を手招きする。

実咲はそれに応えて当たり前のように雅貴の膝の上にのつた。キスして、肌を合わせて、腕を互いに絡み合わせて。

雅貴の体温を感じながら実咲は考へる。

イヤだな。別れようとしている男に抱かれて、幸せを感じるなん

て。

「……んつ

抱かれて、抱きしめて、気持ちよさに流されて。
まだ少し余裕のある頭の片隅で考える。

セックステ好きだな。好きな人に抱かれて、幸せと、気持ちよさだけ追つかけてればいい。イヤなことなんて何も考える余裕もない。気持ちよさに流されて、今、このときのことだけ考えてられる。二人の息づかいが荒くなる。
この時間だけが、ずっと続けばいいのに。

深く、息をついた。

雅貴がシャワーをすませて生乾きの髪のまま服をつけている姿をベッドに体を埋めたまま、ほんやりと眺める。

最後なんだ。これが、最後。

「……雅貴」

「なに？」

声をかけると振り向きもしないで返つてくる雅貴の声。

「こんなもんかな。これ以上、何も変わりはない。」

実咲はあきらめて呟いた。

「別れようつづか」

実咲に田も向けずに服を着ていた雅貴が一瞬止まって振り返った。

「え？」

「……だから、別れようつ

「なんで」

ワケがわからないと言つように首をかしげる雅貴を見て、実咲の胸にじうじょうもない悲しみがこみ上げた。悲しそうでも、つらそうでもない。突然言われて怒っているわけでもない。別れる理由が思い浮かばないから、訝しんでるだけ、そんな表情。

「……別れたいから」

「だから、何で別れたいわけ？」

その問いかけに思わず笑つた。

「わかんないんだ」

「思いあたらないし」

「だろうね、雅貴は思い当たらないかもね」

言いながら自嘲する。雅貴がわかるなんて、初めから思つていなかつたけれど。

泣きそだつた。同時に、どうでもよくなつた。

「雅貴さ、昨日何してた？」

「……」

雅貴は答えない。実咲は息を吐いた。

「言わないだけの良識はあるんだ。まあ、一応、彼女だもんね、私も……名目だけだけどね」

軽く笑つてベッドの上から雅貴を見上げる。

「私は、やっぱり理解できないし。わかつてたつもりだつたけど、ああゆうことやられるのはやっぱりイヤだし」

何を思つているかわからない雅貴の表情に不安を感じ、目をそらせてそのまま一気に言いたいことをはき出した。

「みんながみんなさ、雅貴と一緒にじゃないんだよ。挨拶程度の気分でキスしたりとか、遊ぶ程度の気持ちでセックスしたりとか、……理解できないよ。雅貴からしたら何でもないことでしょう。そんな価値観の違う人に私が『こちやんこちやん』言つたところで、理解できないでしょ。私の価値観を雅貴に押しつける気はないよ。でも私も雅貴の価値観は理解できないし理解しようとも思わない。だから、そんな雅貴についていけないから別れようつて言つてるの。これ以上つきあつてると、干渉しそうだし。雅貴、うつとうしいの、嫌いでしょ？」

言い終わると、小さく息を吐いて、横目に雅貴の表情を伺う。雅貴は、まっすぐに実咲を見ていた。

「……実咲なら、それでもいいけど？」

「……今まで本気かわからぬ声だつた。」

けれど、それは思いがけない返事でもあつた。

実咲の視線の先で雅貴は笑つている。

何故、こんな状況で笑えるんだ？

実咲には理解できなかつた。

雅貴の言葉は、その内容も口調も冗談にしか聞こえなかつた。けれど悔しいことに、そんな言葉でたまらなくうれしくなつてゐる自

分がいた。

簡単に終わるはずだった。

実咲の想像では「わかった」と一言返事が返ってきて、それで終わるはずだった。雅貴の今までの女性関係は、全てそうだったから。そのことを知っていたから。

どうして。

実咲は泣きたくなつた。

どうして私にはそんな言葉をかけるの。

からかわれているのか、遊ばれているのか。

ああ、もしかしたら笑いのネタにでもされているんだろうか。

ほんの一秒にも満たないわずかな時間、実咲の脳裏にいろんな考えがよぎつた。

けれど、それらの不安を全て払拭するほどうれしい言葉だつた。信じられないのに、信じたくてたまらない自分。

「なあ、別れることないだろ?」

歩み寄ってきた雅貴が実咲の顔をのぞき込んだ。

また、私はこのまま流されてしまうんだろうか。

実咲は目の前にある雅貴の顔をぼんやりと見る。

ダメなのに、絶対ダメだと思っているのに。

「干渉してもいいって言われてもね。信用できない人とはつきあえないって言う意味だつたんだけど、わかんなかった?」

涙で声が震えそうになるのをギリギリで押さえながら強がることができた。

「じゃあ、実咲とつきあつ間は、他の女に手を出さない、それなら別れない?」

やつぱり本気とは思えない口調だった。

馬鹿にして……っ

「……そうね、それだったら考えてもいいわね。雅貴に、それができるならね」

自分を押さえながら、必死で演技をする。馬鹿にしたように雅貴

に笑いかける自分の口元が、わずかに引きつっているのがわかつた。

「じゃあ、賭けるか？」

「賭け？」

実咲が眉をひそめると、何でもないよう雅貴が笑つた。

「そう、俺が浮氣をするか、しないか」

「それが、何の意味があるわけ？ 賭けたらなんかくれるの？」

「ばかばかしくてつきあつていられない。」

心の中で実咲は叫ぶ。何とか平常を装つているが、今すぐ泣いてしまったかった。出て行つてと叫び散らしたかった。

何でこんな男が好きなんだろう。馬鹿を見るのはわかっているのに、別れようとしないだけで、別れたくないと言われたわけでもないのに、どうしてこんなにうれしいんだろう。

おそらくこのまま流されてしまうだろう自分が、たまらなく情けなかつた。

「賭け対象は、そうだな。こんなんでどう？ 俺が浮氣をしたら、実咲の言つことを何でも一つ聞く。俺が浮氣をしなかつたら実咲は俺と別れない」

「バカバカしい。」

実咲は心の中だけで笑つた。

バカバカしいと思つていて、それでも言つのだ。バカバカしいことを口にする雅貴より、もつとバカな自分は。

「何でも言つこと聞くつて、ほんとに何でも？」

「そう、何でも」

気づかれないように唾液を飲み、思い切つて言つた。

「じゃあ、ずっと私だけ見てつて言つたら、私だけとつきあうの？」

「もちろん」

笑いながらうなづく雅貴。

なんて、この男の言葉は軽いんだろう。

欠片ほどの期待が裏切られただけなのに、ひどく動搖した。先の言葉が本気じやないことぐらい、バカでも分かるだろう。なのに落

胆した自身に、実咲は本気が少しでも感じられたことを無意識に期待していたのを自覚してしまつ。

「ふざけてるわね」

「……かもね。でも、かなり本気」

そう言つて雅貴が再び実咲に被さつてくる。元々ベッドの上にいた実咲を押し倒すような体勢になつて、キスをしてきた。

うそつき。

それでも、実咲はは言つ。ひきとめられたうれしさと、あふれるほどの幸福感に負けて。

「そう、その約束、忘れないでね」

仕方なくつきあつ、そんな二コアンスを含ませる」とだけが最後の強がりだった。

「なあ、もー回しようか?」

雅貴が囁きながらベルトの留め具をはずす。

実咲は言葉を返さずに、腕を絡ませることでそれに応えた。

決別さえできない自分の情けなさにやりきれなくなりながら、そんなイヤな気持ちを一瞬だけでも忘れてくれるセックスの誘惑に負けて。

ピピッ、ピピッ……。

田覚ましが鳴っている。

実咲は眠さをこらえて起きあがると田覚ましを止めた。別れるはずだった雅貴と別れなかつた氣の重さ、そしてそれをどこかほつとして、うれしく思つてゐる自分。田覚めたと同時に襲つてきた複雑な氣分を紛らわすよつに、実咲は髪をかき上げてため息をついた。

今日から、バカげた雅貴のゲームが始まる。

今日は雅貴が研究室にまで顔を出すことはないはずだ。その事に少しほつとしながら、実咲は白衣に着替える。

「おはよ」

顔を上げると涼子がいた。

彼女は高校の頃からの友達で、実咲が氣を使わず何でも話せる数少ない友達だつた。大学は別れたのに、会社で一緒になり、付き合いはそろそろ十年近くなる。会社が一緒なのは偶然ではなく、就職難で右往左往してた頃に一年早く入社した彼女からうけてみないかと誘われたのだ。

「おはよ」

返すと、涼子は困ったように笑つた。

「浮かない顔してる」

顔は笑つているが、実咲を心配している声だ。

「ま、ね」

苦笑気味に笑うと涼子がそのまま隣に来て小さい声で囁く。

「で、どうしたの？ ていうか、どうなつた？」

一日前雅貴の浮氣現場を見たときに、唯一愚痴を漏らした相手が涼子だつた。別れるつもりであることも全部話してある。

愚痴に付き合わせた上、心配までかけさせている。挙げ句の果てにその心配への返事が更に情けなくて実咲は曖昧に笑つて小さくながら答えた。

「最悪なことに、別れてない。もう、ダメすぎ」
小さい声で「ソシ」と答えると、涼子が顔をしかめて、頭を押された。

「なんでもた。辛くない？」

「けつこうね」

答えて、ため息をつく。

周囲に聞こえないようにコソコソ話が続く。

「でもさ、どうこう訳かあこひ、私が別れようつて言つたのに、ひきとめたのよ」

「マジ?」

涼子が裏返りかけた声を出した。

「うん、マジで。もうさ、イヤなんだけど、それが嬉しくてさ、ダメだね」

笑うしかなくて笑つと、涼子も困つたよつて口元だけ笑いかけてきた。

「正直、ダメだと思つけど、仕方ないか、そんなことになつちやつたんな」

「うん、やう言つてくれるとあつがたい。涼子、今日の髪あいてる

?」

「うん? ゲチ聞いて欲しい?」

先に言われて、実咲は笑つてうなずいた。

「そう。悪いけど私の精神安定剤になつてちょうだい」

「高くつぶよ?」

「お髪代?」

「もち」

涼子が笑つて、実咲はまじめな顔を作つて返す。

「承知いたしました」

「つそつそ」

軽口で話すうちに、朝礼の時間になり、二人は慌てて向かった。

「あのバカ、どうしようもない奴だとは思つてたけど、ホントにどうしようもない奴だね」

昼休み、実咲は喫茶店で昨日の出来事を涼子に話すと、彼女はあきれかえった様子でため息をついた。

「だよね」

「でも、そのどうしようもない男が好きな実咲も、どうしようもないよね」

「まーね

実咲は笑いながら水を一口飲む。実咲は苦笑いをするぐらいしか返事が出来なかつた。すると、涼子は少しきつい表情になり実咲に詰め寄つてくる。

「まーねじやないよ、実咲。前から思つてたけどさ、何であんんにあんたが引っかかるのよ。そりや井上君はかつこいいよ？ 私だつて、誘われたらふらふらつて行きたくなるのは認める。でも所詮遊びの相手としては、でしょ。あんたが本気になる価値が、わかんない」

心配してくれる涼子に、実咲は力なく頷いた。

「そうだよねえ……。私も、そう思うんだけど。でもさ、雅貴は悪い奴じゃないのよ」

自分でそう言つてから、ため息が出た。脳裏をよぎるのは、雅貴の笑顔。

「どーが！」

涼子が目をつり上げたのを見て、実咲は困つたように笑つた。

「うん、だからね、女への態度はどうかと思うんだけど。人としては悪くないんだよ、ただ女にだらしなさすぎるんだよね」

その言葉に、涼子がむつとした様子で更に詰め寄つてくる。

「といつことは、実咲にとつてはダメな人間つて事に変わりないじ

やん

「そこが問題なのよ」

あははは、と、実咲は笑つて見せた。笑うしかない気分だつた。何で私は雅貴を弁護しているのだろう、と。

そんな気持ちがやりきれなかつた。好きな気持ちつていうのは、こんなにもやつかいだ。ダメな奴だと思いながらも、人に言われるとかばいたくなつてしまつ。

涼子がため息をついて、真剣な顔をして実咲を見た。

「賭で付き合うなんて、そんなコト言つのは、本気だと思えないよ。絶対、いつか実咲が苦しくなるよ。意地をはつて付き合つたりしない方がいいと思うんだけど」

涼子の言葉と、そして真剣に実咲を思つ気持ちとが、胸に突き刺さつた。

その通りだと実咲は思つた。その通りだと思うのに、うなずけない自分が切なくて、情けなくて、涙がこみ上げそうになる。

「分かつてる。分かつてるけどさ、ダメなんだよ。嬉しいの。ひきとめられるなんて思わなかつたからさ。別れなきやつて思つてるけど、ホントのホントは別れたくなくつて……。ずっと一緒にいたいの。辛くなるつて分かつてもさ、一緒にいたいんだ」

実咲は泣きそうになりながら笑う。

すると、困つたように笑つた涼子がぽんぽんと背中をたたいた。

「うん、そうだね、そんなもんだよね。辛いのは実咲なのにな、ごめんね」

優しい声だつた。涼子の気持ちが嬉しくて、今度は違う意味で涙がこみ上ってきた。涼子の言葉は正しい、実咲がそう感じているのも知つていて、涼子はそれでも実咲を思いやつて尊重してくれている。

それが分かつた。

うれしさに、実咲の頬がゆるむ。

実咲は目尻をぬぐつて、涼子に笑顔を向けた。

「ううん、ありがと。涼子がさ、いてくれてよかつた。甘えて」めんね

「いいって。私は、実咲があいつと付き合つて、あんまり賛成しないけど、実咲が泣くのヤだしさ。いい方向に行けるように祈つてから。迷惑とか思わなくていいからさ、いつでも愚痴つていいから」「昼ご飯代払つたら?」

「そりそり、そこ重要」

ふつと一人で吹き出す。実咲は涙を拭いながら笑つた。グチを交えながらもたわいない話をしていると携帯がなつた。着信を見て、実咲の手が止まる。それを見て察した様子で涼子が尋ねた。

「誰?」

「……雅貴」

今はまだ、雅貴と顔を合わせたくないなつたし、声も聞きたくなかつた。

顔を見れば、声を聞けば、また感情に流される。そして流される自分に嫌気がさすだろつ。そして会いたくてたまらない自分を、嫌悪感を持つて自覚させられるのだ。

「出なよ」

涼子の言葉に実咲は戸惑いながらも、出ないでいる理由を思いつかず覚悟を決めて電話にでた。

「はい」

『実咲? 今日、何時頃終わる?』

「今日はたぶん六時頃だと思つ」

『じゃあ、その後どうか行こ?』

断ろうか、実咲は一瞬そう考えたが、断ると「賭に付き合つてあげている自分」のスタンスが崩れそうに思えた。

遊んであげているのは、私の方。

雅貴にそう思わせたい。そんなくだらないプライドが実咲を突き動かした。

「わかった、終わったら電話する」

気がつくと、そう答えていた。断ることが躊躇に思えた。

電話を切つてから、とたんに後悔がこみ上げる。何をしているんだろう、と。くだらないプライドに振り回されても自分に良いことは何もないのに。

実咲はそんな自分に疲れてふと息を吐くと、涼子が目の前で、しうがないなあというふつて、あきらめた様子でに笑っていた。
「思うようにしたらいいよ。実咲が望む方を私は応援するから。ダメだと思つのならそういう言つてあげる。でも実咲が選んだのなら、私は実咲の選んだ方を応援するよ。それでもしがんばつてもダメなら慰めるぐらいしてあげるから」

「うん、ありがとう」

涼子と話していると、実咲の目の前が開けて見えた。心が軽くなるように思えた。

涼子がいてくれて良かつた。

そう思つけれど、改めてもう一度言つこはちょっとと照れくさくて言えず、実咲はちょっととまかして敬礼をしてみた。

「その時はよろしく。頼りにします」

「よろしい。その時の謝礼は忘れないよ」

涼子が胸を張つて、実咲に会わせたまじめな低い声で答えた。

「昼食?」

実咲がくつと吹き出すと、涼子もふと吹き出し、顔を見合わせて笑つた。

朝から重かつた足取りが、喫茶店を出る頃には、だいぶ軽くなつていた。

仕事が終わった。

それがたまらなく憂鬱に思えた。

憂鬱で逃げてしまいたいのに、会えないと寂しくなるだろう。仕事であれば、どちらの気持ちも抑えがきく。けれど、会社の外に出れば、両方の気持ちにはさまれて身動きが取りづらい。

涼子とは部署が違うため終わる時間も違う。

実咲はため息をつき、ためらいながら携帯を取り出す。着信履歴に残る雅貴の名前。

やつぱり、忘れたふりして帰ろうか……。

一瞬悩んで、けれど結局かけてしまつ。

呼び出し音を聞きながら、いつそ、電話に出ないで欲しいなどと考える。けれどすぐに呼び出し音がぷつっと途切れ、雅貴の声が聞こえてきた。わずかな緊張感に、心臓がぞくりとはねた。

『終わった？』

実咲の心とは裏腹に機嫌良さそうな雅貴の声。

「うん。今どこにいる？」

『そこから一番近いコンビニ。外にいるから』

『分かった。十分ぐらいで行く』

なんでもない会話に訳が分からないほど緊張した。実咲は切れた携帯を見つめながら小さく息を吐く。

私はこんなに緊張しているのに、昨日の今日で、雅貴には何の変化もない。

そう思つと、更に自分が情けなく思えて、もう一度ため息をついた。

「こんなコトしてて、いいもんかな」

眩きながら重い足取りでコンビニに向かう。

見えてきたところで、雅貴がコンビニから少し離れたところに座

り込んでいるのを見つけた。

何しているのか怪訝に思いながらも近づくと、足下に子犬が戯れているのが見えた。

またか。

実咲は苦笑した。

実咲が雅貴と親しくなったきっかけも、彼が捨て犬と遊んでいたのを見たときだった。わずかに懐かしさが込み上げた。

実咲が声をかける前に気づいたらしく、雅貴は顔を上げて「よお」と軽く声をかけてきた。

「また捨て犬でも見つけた?」

「ていうかもらった。里親探してるって言うから」

子犬が差し出される。実咲はそれに逆らわず受け取ると、胸に抱いた。

「ちっちゃいね、生まれてそんなにたつてないのかな」

「三ヶ月。子犬を人にやるのならそれまでは絶対に親元で育てるのが義務だって、説得しておいたから。そしたら三ヶ月になつたらそつこ一で連れて来やがつた」

「なんで三ヶ月?」

「犬同士の社会性をつけるため。あんまりちつこいときに母犬から離したら、犬が自分を犬だつて自覚しないんだつてさ」

「へえ。そんなのがあるんだ」

「売つてるヤツは、平気で三ヶ月以下のヤツを売つてたりするけどな。ああいうの見ると何かやりきれないよな。取り扱つている以上俺が知つている程度のことは知つてるだろうに、そんな常識より、子犬の時期に需要があるからそれを優先させて売るとか。命よりも売り上げ重視つていうの? そういう子犬を押しつけられる無知な飼い主からしても、良い迷惑だよな。まあ、飼い主が無知だから、ああいう商売の仕方が成り立つんだろうけど」

辛辣なことをなんでもない表情で言いながら、実咲が抱いている子犬に手を伸ばし、優しい目をして子犬の首を撫でた。

「雅貴、よく引き取る気になつたね」

「一匹も二匹も一緒だろ」

苦笑しながら雅貴は実咲の腕から子犬を抱き取つた。

「一回家帰るからさ、ちょっとつきあえよ」

「おつけ」

答えて、一緒に歩き始める。

あのときと一緒にだな。

実咲は懐かしんでそつと笑う。

実咲の胸に懐かしさが胸に広がつていた。

その既視感が実咲の気持ちをゆるめてしまったのか、雅貴と肩が触れ合つた。これまでみたいにふれあうほどどの距離で歩きたくないと気をつけていたのに。自分の気のゆるみを感じながら実咲はまたさりげなく距離をあけた。

なんでこのタイミングなんだろう。

子犬を抱いた雅貴を見て思う。

いつそのこと嫌いになりたいのに、今やたらと実咲の好きな雅貴の姿ばかり見せつけられているようだった。

好きだなんて思っちゃいけない。揺るみかけた気を引き締めた瞬間。

「そんなんに離れるなよ。やつぱりまだ怒つてるわけ？」

一瞬、考えていることが知られたかのように感じて、実咲はどきりとした。

が、そんなわけはない。実咲は冷静になると、今度は雅貴の言葉にムカツときた。

何をバカなことを言つているのか、と。怒つてないわけがないじゃないか、と。

けれどそんな気持ちを抑えて実咲は笑つてみせた。

「怒つてるわよ」

本心をあえていつも軽口のように言つてのける。昨夜は雅貴と一緒にいる誘惑に負けたけれど、ゲームというのなら上位に立つふ

りぐらいしてみせる。にっこり笑つてなんでもないふりをしてみせる。

「悪かつたつて」

実咲の笑顔を真に受けたのか雅貴はへらへらと謝つてきた。実咲はにっこり笑つたまま雅貴に挑戦するように視線を合わせた。

「まさか謝つて許してもらえるなんて思つてないでしょ？」

「分かつた。じゃあ、こいつを心ゆくまで触らせてやるから」

そう言つて子犬が差し出される。

あつさりと自分の挑戦が予想外な方向に躊躇され、怒つていたのに、もう雅貴の言葉に揉らぎ始めている。

「もうひ」

実咲は思わず本当に笑つて、再び差し出された子犬を抱き取ると、子犬にキスをしながらこれ見よがしに言つた。

「おまえは、こんなダメ男になつちゃダメよ」

「お~い、実咲。それはちょっと失礼じゃないか？」

雅貴の言葉に実咲は「ふーんだ」と顔をしかめて見せ、頭の片隅で考える。

そうだ、女としてそばにいなければ、雅貴の隣はとても居心地がよかつたんだ。

久しぶりに感じる居心地の良さに、張り付かせていただけだつた実咲の笑顔が本当の笑顔に変わる。

いやになる。

実咲は心の中でつぶやいて、一人の間にある気安さや楽しさを感じながら、簡単にいらだちが消えた事を、自嘲した。

そして、苦々しい気持ちで思い出す。

雅貴とこんな風に軽口を言い合つて、私、好きだつたんだよな。

最近はこんな風に言葉を交わすことが少なくなつていたけれど。

軽口を交わすごとに、実咲の胸の中に以前の気持ちがよみがえつてきていた。

「なにが失礼なわけ？ ペットは主人に似るから、雅貴にだけは似

ない方がいいに決まってるじゃない？」

ふふんと笑つて言うと、ふつと雅貴が吹き出した。

「違うつて。よく見てみ。そいつ雌だから。失礼な奴だなあ。こんなに美人なのに男扱いされて。な」

雅貴が実咲の腕の中の子犬を優しくなでて話しかける。子犬に近づけられた顔。けれど実咲の目の前にある雅貴の顔。一瞬どきりとする。

けれど雅貴の意識は子犬だけに向けられていて、期待混じりの警戒が無駄だったことに気づく。

そんな内心の恥ずかしさを振り払いながら、「ふと思つ。

そうだ、私は、雅貴のこんなところが好きだつた。

動物が好きで、捨て犬に優しくて、里親を捜すために何軒もの知り合いに電話するような雅貴が。

よみがえる気持ちが、出会った頃の記憶を引き寄せた。

雅貴は入社当時から新入社員の中で噂になっていた。

事務用品や実験器具の営業で出入りしている井上雅貴。

背が高く顔立ちもよくその上社交性まであったから、入社してすぐ女性関係の噂が耳に入っていたように実咲は記憶している。当時実咲は雅貴に対して「顔がよくてもてるらしい」ぐらいの印象だけで興味はなかったにもかかわらず、それでも耳に入るぐらいには、その営業さんの存在は有名だった。

実咲がいる研究室は毎日大量に使う消耗品が多いために、彼も頻繁に顔を出し、先輩や同僚が競つて対応していた。

意識し始めたのは入社一年目の半ば頃だった。

その日、会社からの帰りに実咲は捨て犬を見つけた。

「どうしたの？」

実咲が子犬に声をかけながら頭をなでると、その子犬はパタパタと尻尾をふつてよろこんでいた。もしかしたら、捨てられる瞬間までかわいがられていたのかもしれない。そう思うと切なかつた。

一人暮らしのマンションでは飼えないとは思いつつ、せめてもと餌を買って戻ると、そこには子犬に声をかける雅貴がいた。

時々シャーレを届けに来る人だ、という事はすぐに気がついた。たらしの営業さん。

けれど、あまりにも関心がなさ過ぎて、実咲は声をかけたいのになかなか名前を思い出せずに苦労した。

先輩達、この人のこと、なんつて呼んでたっけ……と、実咲は必死に思い出して声をかけた。

「井上君、だよね？」

子犬を抱き上げたまま雅貴が振り返り、実咲を見て頭をひねった。

「えっと……、実咲ちゃん、だっけ？」

戸惑いがちな表情と声に、お互にお互いの認識が甘いことを感じて、軽くほつとした。

それにしても。何で下の名前で呼ぶわけ？ しかも、なんで「ちやん」付け。

その時、親しくもないのにそんな風に呼ばれてむつとしたのと、よく名前知ってるなと感心したのを覚えている。

「そう。よく名前知ってたね」

苦笑気味に実咲が答えると雅貴も苦笑して言つた。

「俺も思つた。全然話したことないし。でも名字の方は覚えてないんだよ。営業としては失格かなあ」

「なにそれ」

困つたように苦笑いする雅貴の様子がおかしくて、実咲は名前を呼ばれて不快になつっていたことも忘れて笑つた。

「やつぱり変だと思つ?」

「ちょっとね」

困つたように笑う雅貴に、実咲はからかうように笑つて頷いた。
「あー、そうだ、ほら、研究室の室長さん。いつも、実咲ちゃんつて呼んでるでしょ？ たぶん、そのせいだ。俺のイメージで君が「実咲ちゃん」になるのは仕方ないと思つ。許して」
言いながら雅貴の目が実咲の持つているスーパーの袋にそそがれた。

「それ、ドッグフード？」

「うん。飼えないんだけど、せめて餌ぐらいあげようかと思つて」
実咲が中を見せると雅貴はちょっと驚いたように缶詰を手に取つた。

「この缶、けつこう高いだろ」

実咲はぷつと吹き出す。

「まあね。でも人の食事に比べたら安いもんだし。毎日ならともかく、今日だけだし」

実咲の言葉に、雅貴がからかうように笑いながら、ひとさし指を

立てて、わざとらしく言った。

「あんまり、いい餌食わすと、後が大変なんだぞ。あと、野良犬に餌付けも良くないよ。状況によりけりだけど、飼う気がないのなら、放つておくか、保健所に連絡」

にこつと笑つて冗談めかして言つた雅貴の言葉に、実咲はパチンと手を打つた。

「確かに、そうかも。思いつかなかつた」

思いがけない言葉に、実咲はなるほどと頷きながら雅貴の腕の中の子犬を撫でた。

「そうだね。教えてくれてありがとう」

雅貴を見上げると、礼を言われたのが意表を突いたらしく少し驚いた顔をして実咲を見、そして破顔した。

「どーいたしまして」

そういうて楽しそうに笑う雅貴を見ながら、注意するでもなく、考えを押しつけるでもなく、さりげなく流せるように教えてくれた事に気付く。

実咲の中の「井上君」の好感度が上がつた。

「井上君は、その子つれて帰るの？」

「まあ、しばらくはそうしようかと思つてる」

歯切れの悪い答えに実咲は首をかしげた。

「しばらく？」

「そう。ウチは犬三匹いて、一匹がけつこつな年でね、月イチで病院つれてかないとやばい状態なんだ。その上、手のかかる子犬が増えたらさすがにキツイから、里親が見つかるまでウチに泊めとく方向で」

「そりなんだ。でも、連れて帰つて家の人は大丈夫なの？」

実咲の問いに雅貴はわざとらしく顔をしかめた。

「一人暮らしだからそれは問題ないけど……しばらく家の中は恐ろしいことになるな」

そう言つと、すぐに「まあ、何とかなると思つ」と笑顔で立ち上

がつた。話を切り上げようとしているのが分かり、実咲もそれにあわせて立ち上がる。

「んじゃ、JJの子のために、がんばってね。それじゃ、JJのドッグフード、もらってくれる?」

「さんわわ、もらつとく」

「グルメ犬になつたらごめんね」

快く受け取つてもらえたことにほつとして実咲が笑うと、「その時は責任とつてもらつて、実咲ちゃんに時々高級ドッグフードを差し入れしてもらつよ」

と、雅貴も笑いながら返してきた。

実咲から袋を受け取ると「じゃあ」と手を挙げて、彼は止めてある原付に向かう。実咲はその後ろ姿にふと疑問を感じて呼び止めた。「ねえ、井上君、子犬つれてどうやって帰るの？ まさか、その原付に乗せて？」

背中に呼びかけると彼は振り返って、何でもないような口調の返事を返してきた。

「そうだけど？」

当たり前のようない返事に、実咲は戸惑いながら尋ねた。

「家、近いの？」

「あんまり近くはないな。」

苦笑いしながら言ったその返事を聞いて、呆れたのと感心したのとでひどく笑いが込み上げてきたのを今でもはっきりと覚えている。「子犬つれて、どうやってバイクを走らせる気？」

「なんとか」

涼しそうな顔をして雅貴が答えた。

「なんとかって」

実咲は吹き出した。

「井上君って、意外と面白い人だね」

実咲はひとしきり笑うと、たいした問題でもなさそうな顔をしている雅貴に言った。

「よかつたら車で送るよ」

その時雅貴の表情がゆるんだ。

「ホント？ 三十分乗せていく」とになるから、面倒だと思つていたんだ。こいつも疲れるだらう」

「その代わり原付取りに、ここまで戻つてこないといけないけどね。一度手間だけど」

「おっけー、おっけー。助かるよ、ほんと。実咲ちゃんの方こそ、

迷惑かけるけど」「

思いがけず遠慮がちな反応に好感が持てて、実咲は思わず笑った。

「迷惑じゃないよ。井上君のおかげで、私もこの子のことを心配せずにいられるわけだし」「

「でも実咲ちゃん、車乗つてきてるよ！」に見えないけど」「確かに実咲は徒歩だった。

「アパートに置いてあるから。」これから歩いて十分弱だけど、急いで取つてくるから十五分ぐらい待つてももらえる？」

「家、どうち？」

「こいつね。この通りのパチンコ屋のところを右に曲がって、そしたら本屋あるの、知ってる？そこの近くなんだけど」

実咲が指した方を見て雅貴が頷く。

「ああ、それなら一緒に行こうか。俺んちはこの通りをずっと行くんだし」

「そう？」

そうして一緒に歩き出すと、私たちはとつとめもなく話した。

「でもウチまでくるの面倒じゃない？」

「なんで？」

「原付押しながら歩いたら疲れるし」

「まあね。楽ではないけどな。でも、こんな道ばたに原付置き去りにできないし。下り坂だし、そんなに大変でもないよ。実咲ちゃんのアパートの駐輪場におかせてよ」

「そつか。うん。そうだね。じゃあ先に原付乗つていつても良いよ。犬つれて私が歩くからさ、向こうで待つていてよ」

原付を押すのは結構大変なはずなのに、雅貴は笑つて実咲の提案を断つた。

「そんなんにあいはらわなくてもいいだろ」「

「追い払つてなんかないよ」

「じゃあ、一緒に歩いても良いだろ。実咲ちゃんさー、いつも研究室の奥の方にいるし、俺が荷物持つて行つても、全然動く気配ない

し。嫌われているかと、どきどきしてたんだよ」

その言い方がおかしくて笑うと、「実咲ちゃんと話してみたかつたんだ」と、さらりとくさいことを言わせてしまった。

名前もまともに覚えてなかつたのに、話してみたかつたつていうのは単なる社交辞令なんだろうと思つたが、悪い気はしなかつた。話したこともない人を嫌つたりなんかしないよ。ただ

「ただ?」

「井上君、先輩達のお気に入りだからね。井上君と話したい人いっぱいいるし、私がわざわざ行く必要ないから」

実咲の受け答えに、雅貴はにやつと笑つてから、大げさなぐらいにうなだれた。

「ふーん。俺、やっぱり実咲ちゃんからあんまり良い印象をもたれてなかつたんだろ?」

確かに、と、実咲は考える。あまり良い印象は持つていなかつた。かといって、格別悪い印象を持つていてわけでもないけれど。良くも悪くも、関心がなかつた、と言つ方が正しい。

でも、ここは。

実咲はわざとらしくにっこりと雅貴に笑いかけた。

「あ、ばれた?」

「うわっ、傷つく!」

雅貴は、わざとらしく更にがつくりとうなだれた。

会話を交わしながら、実咲は、意外に話しやすい雅貴に「さすが営業」と感心していた。

実咲自身は、あまり人と話すのが得意な方ではなかつた。特に、社交的な人と話すのは大抵疲れる傾向にある。けれど雅貴と話すときは、息が合うというか、自然に会話が弾むのを感じていた。

「それにしても、井上君つて、原付なんだね。ふつーに、かつこい車乗つてそうなのに」

何となく覚えた違和感を、ふと実咲は口にしてみた。

「無理。車は好きだけど、金かかるし。なんか、俺、そういうイメージあるみたいだね。そんなに遊んでるつもりはないんだけどなあ。欲しい車は買えないんだよ。適当に手頃なヤツも考えたけど気に入らない状態の車乗るくらいなら、ない方がましだし」

「へえ、井上君、買えないぐらい高い車が欲しいの？」
うつかり非難がましい口調で言つてしまつた実咲の言葉に、雅貴がクスッと笑つた。

「一戸建てに住んでるから」

雅貴はなんでもないよう口に言つたが、実咲はえつと止まる。

「親元、つて事だよね？」

と言つて、あれ？と思つ。それならむしろお金が貯まる。考え込む実咲を前に彼はにっこりと笑つた。

「一人暮らしつて言つたろ？」

「まさか……買つたの？」

「まあね」

「分かつた！ 犬のためでしょ？」

驚いたのを隠すように、からかうようにおもしろくもない冗談のつもりで言つた実咲だったが、雅貴はにやりと笑うことでそれに答えた。まさかの正解だつたらしい。

「なんでまた、そこまでして」

あきれるを通り越して、感心してしまつた。

「ウチのは、全部おれが拾つてきたんだよ。一人暮らしそうの前から飼つてた奴らもいるし」

「全部つて、全部捨て犬を拾つたの？」

驚く実咲に、雅貴が頷く。

「そう」

「三匹捨ててあつたのを全部引き取つたって事?」

その質問に、雅貴は楽しそうに笑つた。

「普通は、そう思つよな。三匹の犬が全部自分が捨ててきた犬つて聞いたら」

「違うの?」

驚き通しの実咲に、彼が胸を張つた。

「俺の捨て犬センサーは高精度なんだ」

「なにそれ」

思わず笑つてしまつた実咲に、雅貴はしみじみとつぶやいた。

「冗談抜きでさ、なんでか捨て犬と遭遇するんだよ。二十六年生きてきて七回子犬を捨ててあるのに遭遇したつてヤツは、俺以外に出会つたことがないね」

「七回も?」

子犬を拾つた回数で感心する口が来るとは思わなかつた、と、実咲はまじまじと、さつきから自分を驚かせ続けている張本人の顔を見た。

「奇跡の高確率」

にやりと彼は笑つた。

「……それは、犬に運命感じるのは当然かもね……。うん、家買つたつていうの、納得できたよ」

はああ……と、しきりに感心しながらも、実咲は雅貴をからかつた。

「それにしても、車より家だなんて、予想外に堅実なことをするんだね」

彼が思つた以上に好印象な事がうれしくて、にまにましながら見つめた実咲に、雅貴が苦笑いした。

「初めてまともに話したのに、予想外に堅実とか、失礼じやない? どうせなら『犬のためにそこまでするなんて、優しいのね』とか

「それにして、車より家だなんて、予想外に堅実なことをするんだね」

言われた方がうれしいんだけど」

「あ、それは、他の女の子に任せると、

実咲がはつと笑つて手を振ると、雅貴はわざと「うしくため息を

ついた。

「実咲ちゃんつて、結構きつこことをさらつと言つよな」

「でも、確かに、優しいつて言つか、すごいよね。私には、そこまでの思い切りつて言つか、根性ないし。犬は実家において来ることもできただんでしょう?」

何気なく尋ねたことに、彼は真つ直ぐ前を見て答えた。

「俺以外に犬を好きな人がいないからね」

淡々とした声になつたことに、この時実咲は気付かなかつた。

「好きじやないのに飼わせてくれてたんだ。それはそれですごいね」雅貴は、その言葉に複雑そうな顔をして、ごまかすように笑つた。そこでおやじやく実咲は聞いてはいけないことなのだと氣付いた。

アパートに着くと、そのまま車に乗り込む。

「送つていつた帰りだけど、そのまま私の車乗つて原付を取りに戻る? それとも今日は原付、置いて帰る?」

実咲は運転をしながら尋ねる。

「それじゃあ、帰りも頼むよ」

頷いた雅貴に実咲はほつとした。普通の会話は続けられることにも、さつきの会話の後でも自分と話すことを雅貴が不快に思つていないうらしいことにも。そして何より。

「うん。よかつた、私も助かるかも」

ほつとして笑つた実咲に、不思議そうに雅貴は顔を向けた。

「なんで実咲ちゃんが?」

「方向音痴なんだよね。送つていいくのは井上君がいるから良いけど、帰り道が分からなくなつたらどうしようかと思つてたの」

「ナビつけたら?」

苦笑いする実咲にからかうように雅貴が言つと、実咲は真剣に頷いた。

「ホント、ナビ欲しいんだけどね。でも、お金かかるし。自分でやつたら安くすむって聞いたけど私にはわかんないし」

「俺、そういうの得意だよ」

ため息をついた実咲に、雅貴が弾んだ声で言った。

「車持つてないのに?」

「趣味だから」

楽しげに言う雅貴の声に、本当にそういうのが好きらしいこと感じ取れた。

「それは、設置してくれるって事?」

実咲が笑うと、うれしそうに雅貴が頷いた。

「うん、つける気になつたら声かけてよ」

「そう? ありがと?」

実咲は笑つてうなずく。頼むことができれば確かに良いかもしけないけれど、そんな気はさらさらなかつた。好きなことを話して楽しんでいるだけの、ちょっとした社交辞令だとしか思つていなかつた。

家に着くと、車で待つとする実咲に、雅貴が部屋にあがるよう声をかけた。子犬が慣れるのに時間がかかつたら待たせることになるから、と。

実咲は車から降りて、家を見渡す。

中古物件だつたのだろう。その家の雰囲気もまた、微妙なノスタルジックさが意外だつた。

実咲の中の雅貴のイメージは、この数時間でだいぶ変わつていた。あまり新しい家ではなかつたが、庭が広い。そして、実咲はぎよつとする。

「い、井上くん、庭に出るとここの戸、開いてるんだけど……」

「うん、その辺りは開け放し。犬がいつでも家の中は入れるようにな。元々客間用? ていうか、床の間つて言つの? みたいな和室だつたんだけど、今はそこが犬小屋なんだ」

「ちょっと待つて、今、私、犬小屋の概念について、考え直すから

「ルクの床になつてゐる部屋と、犬と、庭を見ながら、実咲は啞然とする。雅貴がにやにやと笑つてゐた。

「実咲ちゃん、おもしろい言い方するなあ」

「うん、でも、おもしろいのは、井上くんの発想の方だと思つ。防犯上どうなのよ、それ」

「あー。そこはほら、犬もいるし」

にやにやと嘯いた雅貴に、実咲は首をひねる。

「あり得ないでしょ」

「ホント大丈夫。その部屋は庭から誰でも入れるけど、そつから他の部屋には入れないような作りにリフォームしてあるから」

「……なるほど」

思わず感心して庭から中をのぞいた実咲だった。

玄関から家にあがると、犬小屋部屋に続くドアの鍵を開け、そちらに移動する。一匹の寝そべつた老犬がゆっくりと立ち上がり、雅貴に歩み寄つてきた。そして元気な二匹も雅貴に駆け寄つた。

慣れない環境に、子犬は戸惑つていたが、3匹の犬たちはどれも子犬に関心を示すが、いたずらすることなく、また弱つているという老犬は子犬の世話をするかのようにクンクンと子犬をかいでは側にいようとしていた。子犬はすぐに落ち着いていった。

その様子に安心した雅貴は実咲に言つた。

「今日は本当に助かつたよ。良かつたら一緒に晩飯食わない？ お礼におごらせてほしいんだけど」

「え？」

にこにこと笑つてゐる雅貴を前に実咲は戸惑つた。おごつてもらえるようなことはした覚えがない。そもそも、子犬を引き取つて大変なのは雅貴の方だ。自分は引き取れずに放置するつもりだつた。

返答に困つてしまつた実咲に、雅貴が困つたように笑う。

「まさかとは思うけど、俺が送り狼になるとか、そういう心配はしてないよな？」

実咲は吹き出した。

「それはやばいね。断ろうかな」

クスクスと笑う実咲に、雅貴がほつとしたように笑う。

「あんまり良い噂がないのは知ってるけどね。でも俺だって同意を得ないと手を出したりしないし」

まいつたな、とわざとらしく困ったフリをしておいてから、雅貴はまじめな顔で実咲を振り返った。

「でも、実咲ちゃん可愛いし、実咲ちゃんさえよかつたら俺は手を出しても……」

雅貴が美咲の肩に手を置いた。

「絶対遠慮しとく」

ペシッとその手を振り払い、実咲は、つんと顔を背けた。けれど、笑いをこらえる実咲の口元はゆるんでいる。

「うわ、ソッコー？」

「まーね」

雅貴が自分をそういう目で見ていないらしいことを実咲は感じていたため、実咲にとつても、雅貴にとつても、このやりとりは気楽な軽口でしかなかった。

一人きりの部屋での、そんなやりとりをえただの楽しい会話だった。

笑いながら、部屋を出る。

その後、結局、口の上手い雅貴に言いくるめられて、実咲は夕食をおじつともらうことにになった。

この日から実咲は雅貴に対する印象を変えていた。

思つてたほど変な人じやないかも。

時々研究室にやつてくる、女の子ウケの良い営業さん。また話す機会があれば、楽しいかもしけれ、そう思った。

「」の時はまだ思いがけなく気の合つ友達を見つけたような気分でしかなかつた。

それからしばらくは、たまに言葉を交わすぐらいの会社に顔を出でる営業さんにすぎなかつた。

けれど、実咲が机の上に置きっぱなしにしていた本がきっかけで、本と音楽の趣味で意気投合し、それ以外にも話が合つたりといったところで、恋愛対象としてではなく、友達として急激に親しくなつていつた。

冗談半分にしかきいていなかつたナビ設置も、親しくなつたことで結局本当に雅貴に頼んでやつてもらうことになつた。

というよりも雅貴がナビ設置に乗り気で、自分の趣味を実咲の車に乗せて楽しんでいたというのが正しいかつたのだが。

気の合つ男友達ができて楽しかつた。

ナビ設置や、本やCDの貸し借りをする内に雅貴の友達とも親しくなつたほどだつた。

完全な友人としての付き合いしかなかつたし、一年以上もの間、実咲にとつて雅貴は気の合つ男友達でしかなかつた。

それが、どうしてこんな風になつちゃうのかなあ。

実咲は思い出しながら苦笑した。

そう、あの頃は楽しかつたのだ。あの頃の気持ちのまま、友達として付き合つていけていたのなら、こんな辛い思いをせずにすんだのに。

女癖が悪すぎと笑いながら、雅貴をこづいて彼を好きなままでいられたのに。

出合つたのは一年ほど前の出来事だった。実咲にはたつた一年で、自分の中の何もかもが変わつてしまつたように思えた。

けれど雅貴は何一つ変わっていない。出合った頃のままなのに。変わったのは、私自身。

一年前と同じような状況に、今実咲はいた。

実咲のアパートの駐車場で、実咲の車に犬を抱いて乗り込む雅貴。状況は同じなのに、あの頃との気持ちの違いが、実咲の胸に突き刺さった。

あのときは楽しかったのに。

今は雅貴が側にいることに、実咲の胸の中に幸せと苦痛が同居している。

「おまえ、頼むから車でお漏らしすんなよ」

雅貴が子犬に話しかける。

子犬はぱたぱたとしつぽを振つて、雅貴の指をぺろぺろとなめている。

楽しそうに雅貴が笑っていた。

その姿が愛しくて、こみ上げてくる幸福感。そして苦痛。

実咲はそれから目をそらし、からかいを含んだ声ですごんでもせた。

「もしもの時は、雅貴が責任もつてちゃんと自分の体で受け止めてね」

にやりと笑う実咲に、雅貴が神妙な面持ちで頭を下げた。

「……すみません、バスタオルを貸して下さい」

殊勝な態度に、実咲は鷹揚に頷いて見せると、顔を見合させて二人で笑つた。

実咲はとつてきたバスタオルを渡すと、運転席に乗り込んだ。運転をしながら雅貴を盗み見る。

今のような穏やかな表情を見るのは久しぶりだった。

最近はまともに会話したことがなかったのだと気がつく。バカみたいに、出合えばセックストしていた。

セックストは気持ちが良い。体だけでなく、心が。不安な気持ちや苦しい気持ちを「まかしてくれる。素肌が触れれば側にいる実感を

満たしてくれる。自分が雅貴にとつて一番近い存在だと勘違いさせてくれる。快感が考える事を放棄させてくれる。だから、バカみたいに体を求め、体だけを求めてくる雅貴に応えた。

今、子犬に向ける穏やかな雅貴の表情を見て、セックスの気持ちよさを求める事の無意味さを、突きつけられる思いだつた。

セックスに雅貴の心はない。

小犬を見つめる雅貴の優しいまなざしに、実咲は現実を痛感した。穏やかな雅貴の表情は愛しすぎて、腹立たしいほどに切なさをつもらせる。

ハンドルを握る実咲の手に力がこもる。

これ以上、彼を盗み見るのはやめようと思った。

動搖して、手元が狂いかねないと思った。前を真剣に見ているのに、集中して運転をしようとしているのに、実咲の頭の中は、どこか他人事のように白々しくふわふわと景色が流れていく。人が飛び出してきても、とっさに動けないかもしれないと思えるほどに、運転に集中できずにいる自分を感じていた。

運転に集中しようとしているのに、実咲の頭の中は隙あらば雅貴のことを考えようとする。

運転に集中しないと、そう思いながらも以前雅貴の家で飼われていた老犬が死んだときのことが実咲の脳裏をよぎった。

「犬は人より先に死んでしまうからな」

あの時、雅貴がそう言つて悲しそうに微笑んだ。

その表情が浮かんで離れない。

小学生の頃拾つてきて初めて飼つた犬だつたと話してくれた。

母親は犬が好きで、母に教わりながら一人で育てたのだと。その後、母親が病気でなくなり、母の言つたことを思い出しながら、一人で世話を続けていたと話した。

「母が亡くなつてからは、こいつがいたから、大夫救われたよ」

そう、愛おしそうに、命が尽きた老犬を撫でていた。

雅貴が犬に向ける笑顔は、いつでも優しい。

あの頃は私と話す時もそんな笑顔をしていたのに、と実咲は思い出した。

裏のない、好意が裏打ちされた笑顔。

思い返すと、雅貴が自分に向ける表情に違いがあることがわかり、愕然とした。

雅貴の犬に向けるような笑顔が、私に向けるものとは違うと感じるようになったのはいつ頃からだつただろう。

実咲は考える。笑顔なのに、同じ笑顔であるはずなのに、この子犬達に向ける笑顔は優しく、実咲を含め女性に向ける笑顔が軽薄に見えるようになってしまっていた。

子犬に向ける優しい笑顔。「先に死んでしまうから」そう言つて悲しげに笑つたその情の深さ。

一度でもあつただろうか。付き合つていた女性と別れてあれほど悲しそうに微笑んだことなんて。

雅貴はいつでも女性と別れるたび何事もなかつたように笑つていた。

きっと私と別れても、同じように笑つてゐるのだだらう。そう思つた瞬間、たとえようのない悲しみが実咲の胸をしめた。おまえはいいね。雅貴に優しくされて。きっとこれからも大切にしてもらえる。

雅貴の腕の中にいる子犬に、実咲は心の中でそつと話しかけた。

読んで下さっている皆様、拍手を下さっている皆様、いつもありがとうございます。

拍手へのコメントのお返事は、活動報告にて行っています。
時折、自覚なしでネタバレしていくので、ネタバレが苦手な方は、
活動報告をのぞく際は、ご注意下さい。

雅貴の家に着くと一匹の犬が出迎えてくれた。

もう、この一匹にも会えないと思っていた。元気だが十才を超えているアズキとまだまだ元気盛りのリュウ。

「相変わらず元気ねえ」

実咲は目を細めた。

雅貴は飛びついてくるリュウの頭を軽くしながら子犬を一匹の犬と対面させる。

「今日からウチの家族になるからな」

子犬を抱きしめたまま座り、なおも飛びつこうとするリュウを牽制しながら話しかける。

「けんかすんなよ」

雅貴はリュウの頭をわしゃわしゃとなでた。リュウに比べてずいぶんおとなしいアズキは子犬に興味を示したように鼻を突きつけている。

新入りと古株達はクンクンと互いににおいをかぎながら、挨拶を交わしている。

「こーら、ちび助。あばれるなつ」

子犬が少し落ち着かない様子でぱたぱたともがきはじめた。

「タラシはイヤだつてさー。ねー?」

実咲は茶々を入れながら歩み寄つて子犬の頭をなでると雅貴が苦笑した。

「……根に持つてる?」

のぞき込む雅貴に、実咲がこくりと笑う。

「持つてる」

そのやりとりに胸が一瞬痛むが、何気ない会話として流れしていく。以前のような打ち解けた雰囲気があった。いいな、ずっとこうしていたいな。

実咲はこの心地よさに和みかけた。しかしその楽しい気持ちとは裏腹に、続かないと分かつていながらそんなことを望んでしまう自分自身を顧みて、たまらなくせつなくなつた。

実咲は立ち上ると、何気なく部屋の中を見渡した。

雅貴の家には、流した浮き名を考えると、驚くほどに女臭さがない。

あまり家には女性を連れてこないよつこじこるらしい。

理由は、この犬たちだと雅貴は言う。

出会つたきっかけの子犬のことがなければ、実咲もこの家に来ることはなかつたのかも知れない。それでも以降何度も雅貴の家に行くこともあつたのだが、それもずっと友達としてのつきあいの上で成り立つていたのだろう。

今思えば「彼女」に収まつてからここへ来るのは久しぶりだったのだから。

おそらく雅貴は家に女性を連れ込んだことはほとんどないはずだと、実咲は思つてゐる。実咲との付き合つても、セックスをするときは必ずホテルか実咲の部屋なのだ。

自分の部屋に女の子が来ると、女の子を一人で帰すのはイヤだからとか、送つていくための車がないとか、尤もらしいことを言つていたが、今の実咲には、雅貴が、自分のテリトリーから女性を追い払つているだけにしか思えなかつた。

雅貴は、女性と付き合つとき、どこか一步距離をおいているような気がした。

実咲はふと、いつか交わした雅貴との会話を思い出した。

まだ友達としてこの部屋にきた頃のことだった。

「ホントに、犬好きだよね」

雅貴と犬たちが遊ぶ姿はほほえましくて言つた言葉だった。

「雅貴、付き合つてゐる人に嫌がられたことない?」

あまりにもかわいがる様に、おもしろがつて実咲がからかうと、

実咲を見て雅貴の片方の口端がゆがむように弧を描いた。

「一回、犬と私とどつちが大切なのよつて聞かれたことあるな、そ
う言えば」

「なにそれ」

実咲が笑うと、雅貴はおかしいだろ？ と言つよつに口元が笑み
を作る。目は笑つていよいよ見えた。

「で、なんて答えたの？」

「犬の方が大事なんて、思つても言つわけないだろ」

雅貴が笑つた。

「まあ、それはそうよね。で、実際のところはどうなの？」

からかう実咲に、雅貴は笑つて、当然のよう言つた。

「人間は、俺がいなくても生きていけるけど、ウチにいる奴らは、
飼い犬にしてしまつた以上、俺がいないとまともに生きていくこと
は不可能だ。そしたら、必然的に答えは決まるだろ？ それが犬
を飼う以上、飼い主が持つ責任だしな。大にできないのなら、自
分の都合ばかり押しつけるのなら、ペットを飼う資格はないだろ」
当然のよう、面白そうに笑いながら雅貴は言つた。それを分か
らない女達をあざけつてゐるよつにも見えた。

その頃、雅貴の付き合つタイプの女性にあまりいい印象を持つて
いなかつた実咲は、相手の女性の気持ちを考えたことはなかつた。
けれど今になつて思い出した雅貴の言葉に、実咲は痛みを覚えた。
当時実咲は、彼の一本筋の通つた考え方には共感する部分が多か
つた反面、フュミニーストのくせにずいぶんと皮肉な見方をすると思
つていた。

今になつてそれを思つと、ふと疑問がよぎる。

本当にフュミニーストだらうか。むしろ女性を厭つてゐるよつにも

……。

そこまで考えて、ばかばかしいと考え方拭つ。

いつだつて女子には愛想良く、優しすぎるぐらゐ優しい態度。

常に「彼女」がいて、同時進行で何人とも付き合うような男だ。女嫌いだなどという、突拍子もない考えをした自分に、実咲は苦笑いした。

こみ上げてくる笑いと同時に、妙な不安感もこみ上げてきた。雅貴は部屋の中を歩き始めた子犬と、先輩犬たちの様子を穏やかな顔で見守っている。

「雅貴」

不安になつて名前を呼んだ。

「なに?」

雅貴が返事と同時に振り返つた。その穏やかな笑顔が、犬に向けていた表情そのままで、実咲はたとえようのない安心感を覚える。

「……雅貴の作つた、カルボナーラ食べたい」

何の用もなく呼んだ手前、適当に思いつくことを言つて「」まかす。雅貴は一人暮らしが長く、実咲よりも料理もうまい。高校生の頃から一人暮らしをしているのだという。一人暮らしをしなければいけないほど実家が遠いわけでもなかつたらしいが、再婚したばかりの年若い義理の母に気をつかつたのだと言つていた。

「いい年こいて、俺と一回りしか違わない母親を持つとは思わなかつたよ」

そう言つて皮肉るように笑つたことがある。

実咲はその恩恵を何度もうけたり、得意料理だという何品かを習つたりしたことがあつた。

雅貴は一步間違えると嫌味なぐらい、いろいろとそつのない男だつた。けれど自分が出来るからといって人を見下すようなことはせず、丁寧に根気よく教えてくれた。

どんぶり勘定で料理をする実咲には雅貴の作る料理は面倒なほど手が込んでいて、ほとんど作つたことがないのだが。たまに思い出して作ると、失敗をする……というよりも別物になつていた。

実咲の言葉に、雅貴は少し悩むように「あー……」とつぶやく。断るつもりなのだろうと実咲は思つた。雅貴はこの家に他人を長居

それせる気はないはずだからと。

「言つてみただけなのだ。今更、雅貴に期待することはない。雅貴にひとつては代えのきくセックスフレンドの一人でしかないのだから。好きだなんて思つたらいけない。自分が特別だと勘違いしたら傷つく。」

断られたときの返事を考えながら、よりもよつて、自分が傷つくようなことを口走つてしまつたことを実咲は悔やんでいた。

雅貴は悩んだ様子で、冷蔵庫を開けている。そして、キッチンで戸棚の中を確認すると、実咲に向かつて笑顔を向けた。

「じゃあ、久しぶりに食つてく？」

屈託のない笑顔に、実咲は一瞬ひるんだ。思いがけない言葉と、思いがけない雅貴の表情。実咲は動搖した。

「え？ いいの？」

うわすりそつうな声で、必死に、なんでもないフリをしながら返事をする。

「自分で言つ」といて「

「……うん、そうだね。ありがとう。久しぶりに食べたかったんだ。雅貴に習つたとおりに作つても、なんとかうまくいかなくて」

「卵液を絡めるときにコツがいるんだつて。実咲は急ぎすぎるんだよ」

雅貴が、楽しそうに笑つた。

「楽しいなんて、思いたくないんだけどね」

いつものように一人で食事をしながら自嘲^{ジコウ}意味こつぶづぶやく実咲に、涼子はなんでもない顔をして言葉を返す。

「仕方ないでしょ。嫌いになつたから別れようとしたのとはワケが違うんだし」

「まーね」

実咲はため息混じりに、目の前の食べ物を食べるでもなしにお箸でつづいた。

「でもさ、ちよつといい傾向じやない？」

「なんで？」

「にっこり笑つて言つた涼子に実咲はいぶかしみながら箸を置く。「だつてさ、ずっと一緒にいるのが辛いって言つてたでしょ。それつて楽しつつて思える余裕が今までずっとなかつたってことでしょ？」でも、今は楽しい」

ね？ と、涼子が笑つた。その思いがけない言葉に、実咲は動搖した。置いた箸をもう一度持ち上げ、また目の前の食べ物をつづく。「それは……もう、別れる決意があるからじゃないかな……」

「そうかなあ……」

涼子の納得がいかなそうな反応を見ながら、実咲はこれまでのことを思い返してみた。

「でも、そうだね。最近つていうか、雅貴と付き合つ前頃からかな？ 思い返すとさ、昨日みたいに一緒にいて楽しかったこと、ほとんどなかつた気がする」

「そうなの？」

「うん。一緒にいるとさ、うれしかつたり、幸せな気持ちになつたりとかはするよ。好きだから。でも、楽しいかつて言つと、ちよつ

と違つてたかも。どつちかつていうと、辛かつた。たとえばさ、涼子とこうしてただ話してたりするだけで私は楽しいしありがたいなあとは思うんだけど、こんな感覚、雅貴とはなくなつてた。好きな人が一緒にいるっていう幸せはあるんだけど、それは、もつと、こう、自己陶酔的って言つか……」

「どう言えば上手く伝わるか分からずに、説明していると、涼子がうんうんと頷いてきた。

「あ、それはちょっと分かる。私の場合は、実咲と一緒にいて樂しつつて言つよりもなんか一緒にいるだけで落ち着くつてかんじ?」「そうそう。そんな感じ。氣を使わなくていいつて言つかる……。前は、雅貴と一緒にいて、楽しかつたんだよ……」

実咲は言葉を切ると、さつきからいじるだけだった料理をよひやくぱくりと一口食べた。

「なんなんだろうね……。どうしてこんなになつちやつたのかなあ」思い返すと、友達として楽しく遊んでいた頃、があまりにも遠くに感じた。

その様子を見ながら、涼子が少し躊躇いがちに問いかけてきた。
「……あのさ、でも今はまた楽しく感じてるんでしょう? もしかしたら前のように戻れるかもしないよ?」

「え……?」

「……で、もし、そうなつたら、どうする?」

以前のように戻れたら。

想像して、実咲はため息をついた。

昨日の楽しかつた時間が実咲の脳裏をよぎつた。楽しくて、手放し難い幸せな時間。

幸せすぎて、賭をした現実との落差が押し寄せる。

あんな幸せな時間が恋人としての時間として続いたら、自分がどうするのか想像もつかなかつた。

「……どうしようね」

気力のないその返事に、涼子が詰め寄つた。

「どうしようつね、じゃないよ。情を移せば移すほど別れるのが辛いよ? ただでさえこんななのに、いい状態がずっと続けばそれでいいけどさ、もし同じ事繰り返されたら……つらいよ?」

「……慰めてくれる?」

哀れつぽい顔をして見つめる実咲に、涼子が渋い顔をして苦言を呈す。

「慰めてあげるけど……覚悟はしといた方がいいかもね。でも最初から悲觀もいい結果生まれるわけもないし、ある程度前向きな部分も必要だよね」

「無茶いってるよ……」

実咲は空になつた食器をよけると、テーブルに突つ伏した。

「……他人事だもん」

涼子は、いっそ冷淡にふふんと笑つて言つてのけた。

「そうね、他人事よね」

実咲は突つ伏したまま涼子を見上げ、笑つた。他人事と言いながら、本当は誰よりも気にかけてくれていてことを知つていて。聞き流して欲しいことはちゃんと聞き流してくれる。慰めて欲しいときはでもいさめられて、でも本当に辛いときは誰よりも本気で向き合つてくれる。

彼女の言葉ほど優しい「他人事」という言葉はない。少し離れて冷静に、本質を的確に突くような、親身になり過ぎない、けれど心からの優しさ。

「うまくこいつがいくまいが、やれるだけのことをした方が後悔しないと思うよ」

他人事と切り捨てたその口で、涼子がこの上なく優しい声で実咲を包み込む。

「……かもね」

実咲は、涼子を見上げて微笑んだ。

やれるだけのこと。

けれど、何をすればいいというのだろう。
信じることはできない。どうしても疑つてしまつ。そして疑り続けていたい。信じてまた傷つくくらいなら、疑つて「ああ、やつぱり」とあきらめた方が楽だから。けれど疑り続ける自分に、一体どうだけのことができるというのか。

どうして「好き」だけじゃいけないんだろう。

そう思うと切なくなつた。それだけなら、きっと辛くはなかつた。けれどそれだけではいられなくて。見返りが欲しい。雅貴にも同じように自分を思つて欲しい。

たつたそれだけの願いは、果てしなく無理なことのように思える。実咲は雅貴からただの一度も「好き」という言葉を聞いたことがなかつた。

分かつてゐる。たぶん、雅貴には私に対する恋愛感情はない。
その結論に実咲は溜め息をついた。

それは最初から分かつてゐたことだつた。雅貴の実咲に対する感情は、友情の上の好意だ。大切にされているのも分かつてゐる。好意を持つてくれているのも知つてゐる。けれど、それは恋愛感情ではない。実咲の想いと雅貴の想いは同じ位置はないのだ。けれど、いつか、好きになつてもらえたら……。そう期待をしていたけれど、なのに彼の気持ちを得るために始めた二人の付き合いは、実咲が求めれば求めるほどに、遠ざかつてゐるように感じた。

雅貴の気持ちを求めて、追えば追うほど遠くに感じた。
近くにいると感じた瞬間、突き放されるような。なのに突き放されたかと思うと、いつものように側にいたり。

私だけを見て欲しいという想いは、ついに届かなかつた。
抱き合つて名前を呼ばれる瞬間はあんなにも近いのに、呼ぶ声は

求められていると感じるのに、終わってしまえば寒々しいほどに、遠くにいる。もしかしたら、嫌われているんじゃないかと思うほどに、いっそ冷淡に雅貴は去つてゆく。

突き放されているのではと感じる瞬間が怖くて、身構える癖がついてしまったのかもしれない。期待しないようにする癖が。

癖は抜けない。そして現実も辛いことが多い。

雅貴を信じるのは、とても難しいことに思えた。

自信を持っていた、彼の実咲に対する好意すらも疑りたくなるほどに。

付き合っている間に、ずっとつきまとつていた他の女性の影。入り替わり立ち替わり数多の女性が雅貴の周りを立ち寄つては去つてゆく。

人気があるのも考え方だ。実咲と雅貴がつきあつてているのを知らない会社の同僚達はその話題で何があると盛り上がるのだ。実咲はそれを知つていたから、彼女たちの情報界隈では雅貴と一緒に行かないようにしていたため、見つかったことがないのだが。

それでも雅貴が他の女性とキスしているのを見たあの瞬間まで、ずっとそれらの噂を信じないようにしていた。噂に過ぎないと。それはただの友達だと。

けれど、あの突き放されていると感じる瞬間を重ねたぶんだけ、目をそらしていくも、確かに不安はふくらんでいたのだ。

そして、実際に実咲を抱いたその腕で、他の女性も抱いていた。私と雅貴の気持ちは、あまりにも違うところにある。

実咲は何度目かの溜め息を小さくつく。

好きだと、ただそれだけ思えていた頃のまいまいられたなら、どれだけ楽だつただろうと実咲は想像する。友達として側で笑つていられるだけで十分だつた、あの頃のままで。

以前は一緒にいるだけで楽しかつた。趣味が似ていて、話していくまでも会話が途切れることがなかつた。CDや本の貸し借りをしたり、雅貴の男友達に混ざつて一緒に遊びに行つたりもしたこ

ともあった。

雅貴のことを友達として信頼していた。考え方も価値観も似ていた。一緒にいて気兼ねすることもなくとても落ち着けた。自分にとつてそういうように、雅貴にとつても自分は大切な友達なんだと感じていた。

あの頃はまだ、雅貴のだらしない面が見えていなかつただけかもしない。雅貴は友人に對してはいい奴なのは確かなのだ。頻繁に女性を取つ替え引き替え遊んでいる割に男友達が多い。

あの頃の実咲は、女としてより友達としての付き合いしかせず、また雅貴も女としての実咲を求めてもいなかつたから、見えていくて当たり前だつたのかもしれない。

そのまままでいればよかつたのに。

けれど、それは悔やんでも仕方のことなのだ。

もう、友達としてみていられなくなつてしまつたのだから。あの頃の気持ちには戻れないのだから。

いつ頃だつただろう、女として見られていなことが辛く思えてきたのは。

そして、いつからだつたのだろう、雅貴の軽薄な側面を感じるようになつたのは。

実咲は思い返し、そしてまた溜め息をついた。

雅貴への思いが変わつたから、それまで見えなかつた側面を感じるようになった自分に気付く。彼は、以前から女性に関しては何一つ変わっていないのだと、痛感した。

あれはいつだつただろう。

実咲はこんな風に変わつてしまつた、始まりの出来事を思い返す。何となく雅貴に対する気持ちがくすぶり始めていた頃だつたけれど、まだ友達としか思つていなかつた頃。

ファーストフードの店内で、一人で音楽が何かの趣味の話題で盛り上がつていた、その時の出来事を。

そのとき突然会話途中に一人の女性が割り込んできた。実咲より年下だらうか。とてもきれいな子だと実咲は思つた。

「雅貴」

少しキツイ目をして雅貴と実咲をにらむ彼女に、雅貴は実咲には向けないような、優しい笑顔を浮かべて彼女を見上げた。

「こんなところで会えるとは思わなかつたな」

その時その雅貴の表情を見て欣然としない気分になつたのを覚えている。

私にはそんな風に笑わなくせに、でれでれして。

そんな風に思つたような記憶がある。

割り込んできた彼女は前置きもなく嘲るように言つた。

「この人も付き合つてるの？」

雅貴は苦笑して彼女を見上げていた。

「彼女はただの友達だよ」

「嘘。新しく付き合つてる子がいるつて聞いたのよ。ずいぶんとランクを落としたのね」

「だからそれは別の子。そんな事で嘘はつかないよ。あつちの彼女は君とは違つたタイプの美人だよ」

二人の会話を聞きながら、胃が重くなつたような気がした。

彼女が実咲に対してもう一度暴言を、雅貴は否定すらしなかつた。

それに対しても腹が立つのは違う、けれど気分でも悪くなつたようにならむかむかした。けれど実咲はなんでもないふりをして立ち上がつた。

「一人で話す時間が必要そうね。私は帰るから」

雅貴は引き留める素振りすらせず、頷いた。

帰る準備をする時間が、やけに惨めに思えたのを覚えていた。帰り際、「じゃあ」と目配せをした実咲に、雅貴が声をかけた。

「ごめん、後で連絡するから」

実咲は頷くと、なんでもないふりをしてその場を去つた。なんでもないふりして歩きながら、惨めさに唇を噛んだ。

確かに私はさつきの彼女みたいに美人じゃない。マイクなんてみつともなくない程度にやつてるだけだし。可愛い格好なんてしてないし、色気なんてないし。

言葉にして考えていると、余計に惨めだつた。

きれいにマイクをして、きれいにセットされた髪、高そつな可愛らしい服の彼女を思い出した。

きれいな子だつた。

そして自分をもう一度省みると、溜め息がこぼれた。歩きながらふと横を見る。

地味で、華やかさの欠片もない自分の姿がガラスに映つていた。その日の夜、雅貴から連絡があつた。彼女の暴言をいさめなかつたことをまず謝られた。ここで彼女を諫めると、余計にひどくなると思つたからだと弁明した上で、それでもイヤな思いをさせたはずだから、と、ひたすら謝つてくれた。

実咲は笑つて「その判断は正しいと思つ、気にしなくて良いよ」と答えた。

笑いながら答えたその言葉は、確かに本心ではあつたが、それでも惨めだつた。

その時はどうしてか自分でも分かつていなかつた。

けれど今になつて考えれば、それがきつかけだつたように思つ。雅貴が女と一緒にいるのを見るたび、聞く度に苦しく感じるようになつてきたのだ。

自分に見せない笑い方、自分に向けられない優しい声。それを自分以外の女に向けられているのを見ると苦しく感じるようになつた。どうして自分にはあんな風に笑つてくれないんだろう。どうして自分にはあんな優しい声をかけてくれないんだろう。

そう考えれば考えるほど辛くなつていつた。

私もあんな風に笑いかけてもらいたい。

いつの間にかそんなことを考えるようになつていて。

あのとき私が求めていたそれは、ただの軽薄なだけの笑顔だつたのに。優しい笑顔ではなく、ただ優しそうなだけの上つ面だけの笑顔だつたのに。そんなことにも気付けず、あの時どうしてもその笑顔が欲しかつた。あの笑い方を向けられない自分は女としてダメなのだと想いこんでしまつた。

思い返すと苦笑いが漏れた。

それからだつた。実咲が服装や化粧に気を使い始めたのは。

少しずつ、少しずつ、自分を変えていつたその頃が思い出された。メイクを丁寧にするようになつた。味気ないTシャツを着ないようになつた。それまで手をつけていなかつたアイメイクを始めて、ただ塗るだけだつた口紅にグロスを付けたりラメを入れたりして雰囲気の違いを出すようにして……そうして少しずつ小さなメイクのテクニックを積み重ねていつた。

自分の目にも以前との違いが明らかに分かるほどになつたのは、雅貴を気にし始めて2、3ヶ月は経つた頃だつた。鏡の前には雅貴が付き合う彼女達のようにきれいにメイクをして髪を整え、ブランド物の服に身を包んだ実咲がいた。

増えていつた化粧道具、ブランド物の服や小物。

これで雅貴の周りの女人に引け目をとらずにすむ。

そう思つと実咲は満足だつた。

そして実咲の変化に伴つて雅貴の態度も少しづつ変わつてきていた。

「なんか最近、雰囲気が変わつた」

初めの頃はそんな風に訪ねられたりもした。そのたびに、「最近、何となく興味が出てきてね。こういうのかわいいからやつてみたくなつたんだ」

と、ごまかしていた。

そして実咲が少しづつ新しいものを取り入れるたびに、雅貴は気付くと「いいね」とほめた。

結果、実咲は半ば有頂天になつて自分を飾りだした。

その頃には、もう実咲も自分の気持ちに気づいていた。

私は、雅貴が好きなのだ。

雅貴に、自分を見てもらいたい。女として見られたい。

気付けば尚のこと実咲の中でその気持ちは日々大きくなつていつた。

そして、ある日、ついに雅貴が言った。

「なんか最近、すごくかわいくなつてない？ いいかんじ。その方が絶対いいって」

そう言つて向けられた笑顔。

それは雅貴が彼女たちに向けるような優しい笑顔だつた。

欲しかつた笑顔が向けられた。そう思つと興奮が体を駆け抜けた。

雅貴が私を認めた。

実咲にはそう思えた。

友達というポジションは変わらなかつたが、雅貴の実咲を見る目は確かに女に対する目になつていた。

しかしその頃から、雅貴の女に対する薄情さが目につきだした。

それまで眉をひそめることがなかつたわけではないが、それでもほとんど気にしたこともなかつたことだ。

なのにその頃になつて突然気になりだした。

それは自分には関係なかつた雅貴の女に対する対応が、自分にとって関係ないものではなくなつただけなのかもしれない。

事実、雅貴が同時に数人の女と関係を持つていたところで、今までなら実咲に関係のないことだった。「あんた、そういうの、よくないって」軽く笑つてやめなよと注意するだけでそれ以上のことはなかつた。

けれど、雅貴を男として気にすれば気にするほどそういう軽薄さがイヤでたまらなくなつてきた。女を自分の脇の添え物ぐらいにしか思つてないよう、取つ替え引つ替えして彼女を変えていく。そんな態度にたまらないほどの嫌悪感を覚えた。

女として雅貴に認められれば認められるほど、雅貴にとつて自分が替えのきく存在になつていくように思えた。自分もセックスをすれば、雅貴にはもう用済みになつてしまつ、そう思えた。

そんな雅貴の一面を、実咲はその時になつて初めて実感したのだ。

思い返すと、ろくでもないことばかりが思い出されて、実咲はため息をついた。

好きにならなければ、そんなところに気付かずにはんでいたのかかもしれないのに。

けれど、それでも一緒にいたかった。

そうして実咲は、雅貴の望む女らしさを少しずつ身につけていき、でもずっと一緒にいるために姑息にも友達のふりをし続けた。

そうして友達のふりをしながら、女人と腕を組んで歩く雅貴の後ろ姿を田で追いかけた。

雅貴の軽薄さに嫌悪を覚えながら、それでもそうして雅貴の隣にいるのは自分でいたいと願つてしまつようになつていて。

こんなに雅貴の女癖の悪さに嫌気がさしているのに、それでも、どうしても雅貴を好きな気持ちが止められなかつた。

あきらめるにはあの頃の雅貴は優しすぎた。もしかしたら私は特別かも知れない、と期待させるのは十分なほどに。それはただの友達としての優しさだつたが、それが余計に特別に扱われているように感じられたのだ。

そして、とうとう耐えきれなくなつた実咲は、あの日、雅貴が付き合つていた女性と別れたのを見計らつて彼を呼び出した。

仕事が終わつて夕食がてらの小料理屋。居酒屋を兼ねたその店内の喧噪から少し離れたボックス席に陣取り、そしておもむろに切り出した。

「ねえ、私と付き合つてよ」

自分であきれるほどそつけない声と言葉だった。

雅貴が実咲の田の前で悩むように小さく首をかしげる。

心臓がイヤになるほど大きく鼓動を打っていた。

けれど、それが精一杯だった。

どんな顔をしていいのか分からず、ただ必死でその言葉を言つていた。

自分以外の女と一緒にいる姿を見たくない、だたその一心で、雅貴の隣にいるのは自分でありたくて。

そして、叶わないのなら、いつそのこと、雅貴から離れたくて。玉碎覚悟だった。雅貴は確かに自分を女として認めているようではある。けれど雅貴にとつては自分は友達に過ぎない。それに、雅貴と付き合う女性を近くで見過ぎていた。自分より明らかにランクが上の女性。そして雅貴の周りにはまだそんな女性達が雅貴と関係を持とうとたむろっている。

自分なんかを選ぶはずがない。でも今の状況は耐えられない。その時の実咲には期待と諦めが同時に胸の中にあった。

「付き合つて、今からどつか一緒に行くわけじゃなくつてか？」
的にはずれな答えに、少しあきれて、少し力が抜けて、そして少し笑つて、わずかにふるえながらテーブル越しに、雅貴のほほを軽く握つたこぶしでトンとたたくように触れる。

「んなわけないでしょ。どうしてそんなことを言つたためにこんなトコにわざわざ呼び出すのよ」

「……まあ、そりゃそうだよな」

雅貴は少し驚いた様子で、髪をかき上げながら頭を搔いていた。
「いや、そななとは思つたんだけど、もし「本屋行くの付き合つて」とかつて感じだつたら、早とちりで恥ずかしいだろ」
「そうかもしないけどさ……」

力ががつくりと抜けているのに、緊張と動搖のふるえは止まらなかつた。

「じゃあ、付き合つうか」

動搖している実咲へフエイントをかけるようにあつせりと雅貴が言つてのけた。

唐突すぎて、実咲の頭は一瞬雅貴の言葉が理解できなかつた。

「え？」

実咲は彼の顔を見た。

雅貴は笑つていた。女性にいつも向けている、甘つたるい笑顔で。実咲は、自分に向けるその笑顔を見て、はじめて不快感を覚えた。欲しかつたはずの笑顔は、得てみると、とても価値のない物だつたと言つことに、このとき、漠然とながらも気づき始めていたのだろう。

ああ、やつぱりこの程度か。

あの時の実咲の気持ちを言葉にするとすれば、そんな感じだつた。答えをもらつた瞬間、うれしいはずなのに同時にむなしさと切なさが胸を占めていた。

自分は、雅貴と友達だつた。雅貴の周りの女性ほど美人でもない。けれど、それでも自分と付き合つてくれるというのなら、雅貴にとつて自分は特別なのかもしれない。そんな期待を打ち碎くには十分すぎるほど、軽い答えだつた。

自分も、他の女と変わりないのだ。

それがそのとき実咲に突きつけられた現実だつた。
締め付けるような痛みが実咲の胸を襲つた。

そこから自分の気持ちをじまかす日々が始まつた。
その日の絶望を胸の中に押し込めて、もしかしたらと期待を抱き続けた。

自分と付き合つているはずなのに、見え隠れする女の影に田をつぶつた。イヤでも耳に届く噂から必死で耳をふさいだ。時折感じる突き放されるような雅貴の遠さも氣のせいと思い込もうとした。

一緒にいるのが幸せで、うれしくて、つらさと苦しさから田を背けて。

そうしていの内に実咲は、ふと気付いた。

自分が、誰よりも長く雅貴の彼女の位置に座り続けていることに。

ああ、やっぱり、私は特別なんだ。

それに反する心の声を無視して、実咲は自分に言い聞かせた。

そうして自分を「まかし続けた結果、実咲は一番嫌な形で現実を思い知らされることとなつた。

思い出したくもない数日前のキスの場面が思い出され、実咲は頭を振つた。

せめて、ずっと胸にあつた不安から目をそらわずにいたなら、あれほど傷つかなかつたかもしれないのに。

ヤフーの辞書より引用。

おもあそは【後編】

〔副〕落ち着いて、ゆっくりと行動するわ。

「立ち上がる」

「どうしようもない」とが思い出されて、実咲は自分の考えの甘さを後悔する。

友達としているだけなら、雅貴はいい奴だと思えるのに。その気持ちは今も変わりなく実咲の胸の中にあった。けれど、その思いがなおのこと、自分をそんな勘違いへと追い込んだのだのかも知れない、と、そう思えた。

好きだという気持ちを打ち砕いてもおかしくないほどに、雅貴の女人に対する誠意のなさに実咲は嫌悪を覚えていた。

「そうだよ、最低だよ」

実咲は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

最低の男だと、心底思つた。そして、その最低さに傷つけられたのに。

なのに、それでも気持ちが変わらないのは、どうしてなのか。考えるだけで胸がつまつた。

深いため息がこぼれた。それには深い自嘲がこもつていた。

「もしかしたら……って、期待してるのかな」

声に出してつぶやいてみた。

それはあまりにも白々しく、滑稽に響いた。

私は信じていいのかもしれない。

自分は特別だと、以前のように一人の人間として雅貴が自分を認めてくれている。そして、いつかそのうち、自分の事を女性として好きになってくれるかもしれない。

そんな風に考えながら、実咲は笑った。

笑わないと押しつぶされそうだった。

考えた内容が、あまりにも現実不可能に思えて。考えた内容をあり得ないと否定する感情ばかりが押し寄せてきて。

「前向きに、か」

涼子の言葉を思い出し、ふっと息を吐く。

期待し続けて、何か進展があるというのか。雅貴が自分を本心から受け止めようとするように変わるとでも言つのか。

友達として今も一緒にいたのなら、こんな風に、決別がこれから先に見え隠れするような事態にはならなかつたのだろうか。

「なんで、好きなのかなあ」

今更、どうしようもないことをつぶやいてみる。声に出してみると、何となく心が落ち着いた。けれど、何か変化が起こるわけでもない。

見切りはつけているはずなのに、それでも、未だに薄情さの裏にあるかも知れない女性への誠実さを雅貴に求めている。

もし自分がもう一度雅貴を信頼して、それで以前のような信頼しあえる関係を取り戻せるのなら。

考えて、実咲は自分をいさめるように軽く首を振った。

きつとそんなことは起こらない。雅貴にとって友達でなくなつた自分は他の女と変わらないのだから。

確かに、雅貴はいつものように簡単に実咲と別れようとしなかつた。けれどそれはただの気まぐれに過ぎないだろうと実咲は思つている。こうして再び付き合うのは、別れたくないのではなく、ただのゲームのような物なのだから。

思い起こせば、つきあい始めていつの間にか以前のような軽口をたたくような楽しい会話が一人の間になくなつていた。

突き放されているんじやないか、そう感じる瞬間がまた訪れるのではないかと、怖くて逃げていた。

ろくに会話もなくセックスをしていた。実咲は雅貴の目を他に向けさせないために必死で自分を飾つていた。

そこまで考えて実咲は我に返つた。

ああ、なんだ……。

そのことに気がついた瞬間、涙がこみ上げてきた。

特別であるはずがない。私は、友達ですらなくなつていたのだから

実咲は、自分が雅貴の周りにいた女性達と同じ存在になつていて、ここに気付く。着飾つて、雅貴の気を引く彼女たちと。

ようやく気付いた気分だつた。頭でわかつて、いたことが、ようやくすとんと自分の中に落ちてきたような感覚。

私は特別じやない。雅貴が私に執着しているわけでもない。ただ遊び、ゲームでしかない。

そうだ、そういうことなんだ……。

気付いた事実に胸が押しつぶされそうになる。

無理だよ、涼子。

実咲はすがるよつに親友を心の中に思い描く。

この状況を変えられるほどの力は、私にはない。私にできる事なんて、変わればいいと思いながら何もできずに、せいぜい強がつて、なんでもないふりして雅貴と最後のゲームに付き合つくらい。ゲームが終わつたときに、鼻で笑つて、なんでもないふりをしていられるよう予防線を張るぐらい。

私にできることは、自分が傷つかないよつて、雅貴を信じないようにするだけ。

こんななんじや何も変わらない、分かつていても、それ以外のことはできそうにない。

無理だよ。

心の中で親友に話しかける。前向きにと言つて発破をかけてくれたその言葉さえ、今の実咲には重かつた。

私に、雅貴を変える力はない。

結果は、きっと変わらない。

絶望が実咲を包み込んだ。

実咲は息を吸つた。

もう、いい。何も変えられないのなら、何も変わらなくていい。

雅貴との関係の終着点を見た気がした。

でも、それでも一緒にいたい、少しでも長く。

雅貴が飽きて、最後通知を突きつけてくれる、そのときまで。

実咲は深く長い息をついた。

雅貴が飽きて、最後通知を突きつけてくれる、そのときまで。
実咲は深く長い息をついた。

今だけ、ゲームが終わるその時まで、それを覚悟して雅貴と一緒に
にいられることを考えよう。

何も考えず、今までのようになんかをそらして。

私には、きっと何も変えられない。自分の気持ちも、雅貴の気持ちも。
だから、今だけは一緒に……。

実咲は暗鬱とした絶望の中、自嘲した。

せめて、友達のままでいられたらよかったですのにね。

その日は、待ち合わせの場所に行くと雅貴は本を読んでいた。実咲に気付くと本を開じて雅貴が軽く手を振る。それに手を振り返すと、実咲はテーブルの向かいに座った。

「そういえばさ、この本の新刊でたの知ってる?」

雅貴が暇つぶしに読んでた本をさした。

「うん? 買ったよ」

「マジで? 僕、探してるんだけど、売り切れてるみたいでさ。ちょっと足のばしたらあるのわかってるけど時間なくて」

「貸して欲しい?」

実咲がにやりと笑つてもつたいくぶると、雅貴が顔の前で両手を会わせた。

「お願ひします」

ここ数日、仕事が終わると一緒にいるのが当たり前のようになつていた。つきあい始めた当初でさえ、連日待ち合わせて一緒に過ごすことはなかつた。

けれど賭をしてから、毎晩電話がかかってくるようになつた。会つた日に電話なんてろくにしてきたことないのに、今は会つた日も、会わなかつた日も、必ず電話をかけてくる。

わざとらしいと思いつつも気がつくと心待ちにしている自分に気付く。ゲームを始めてたつた十数日しか経つてないのに、それが当たり前のように心待ちにしている。

実咲はそんな自分の弱さを叱咤するものの、自分の気持ちなのにコントロールできずにいた。

信じたくないのに、信じなくてたまらない。

好きになりたくないのに、好きで好きでたまらない。

当たり前のように一緒にいて、当たり前のように毎日電話がかかってきて、当たり前のように実咲だけを見ているように見える雅貴。イヤになる。

実咲は心の中で悪態をつく。

勘違いをしてしまいそうな自分が、イヤでたまらない。分かつてるくせに、それでも、もしかしたら雅貴が自分だけを本当に見てくれるのではないかと、期待しそうになってしまふ自分がいる。

ゲームのくせに、そんな風に見せかける雅貴が憎い。こんなにも、こんなにも雅貴のことが好きなのに、雅貴にとつてはゲームでしかないことが、たまらなく辛い。

優しい雅貴。

以前のような楽しくて居心地の良い関係が続いていた。

自分の名前を呼ぶ彼の声は優しくて、体を重ねた後でも当たり前のように実咲を抱きしめる。以前のように自分を突き放すような冷たさを感じなくなっていた。

むしろ、雅貴は以前より優しくなった。友人としてつきあつていた頃の思いやりと、彼女としてつきあい始めてからの優しさと、両方を実咲に向けているように感じられた。

実咲の望んだ雅貴が、そこにいた。

「実咲」

優しく名前を呼ばれ、抱き寄せられる。

そうしてキスしたのは、雅貴の家のリビングのこと。

どうして、家になんか呼ぶの。

どうしてこの家で、そんなに優しくするの。

期待が募り、実咲は心の中で雅貴をなじる。

優しくされたら期待をしてしまう。三匹の犬と戯れながら、屈託なく笑う表情がそのまま向けられて、そのままキスされて。

うれしくて幸せで、それが苦しくて胸の痛みとしてこみ上げる。

この家にいることを許されたら期待してしまつ。

どうせ、私のことなんか、本当はどうでもいいくせに。

心の中でなじりながら、幸福感に流される。

キスをしていると、遊んでいるのかと思ったのか、犬が飛び入り参加してきた。

「おまえ、邪魔すんなよ」

笑いながら雅貴がすり寄つてくるその体をなでた。

雅貴にじやれつく犬の様子にふつと気持ちが和み、実咲も笑う。

「雅貴と遊ぶの、ホントに好きだね」

犬に話しかけて、その首をなでた。

雅貴の家は居心地がいい。今は三匹になつた犬たちが実咲の心を和ませてくれた。何より、彼らがいるせいか、家では雅貴自身がとてもゆつたりとくつろいでいる様子になる。犬たちと戯れる雅貴を見るのは楽しかつた。

半分押し倒された状態から、実咲は体を起こすと、先日引き取つた子犬を抱き上げ、雅貴と寄り添うような状態で座り直す。雅貴が笑いながら犬をかまう様子が楽しかつた。

抱き上げた子犬が、実咲の顔をぺろぺろとなめた。くすぐつくて、子犬の愛情表現がかわいくて、その口元に顔を寄せる。

「……実咲」

突然子犬が雅貴に奪い取られ、キスされる。

「つづき、しょ」

雅貴に誘われるまま寝室に入る。

「おまえらは邪魔するから、だめ」

笑つて犬たちを閉め出すると、そのままベッドに押し倒される。はじめて入つた部屋だった。一人で寝るには、大きすぎるベッド。この部屋に、自分以外の女性が入つたことあるのだろうか。疑問が浮かび、そして考えるのをやめた。

どちらにしろ、自分にとつてはよくない考えにたどり着く。

過去にいたのだとしたら、その特別な女性への嫉妬を抱き、いなければ自分は期待する。

「……何を考えてんの？」

雅貴の問いかけに笑う。

「ドアの向こうで、寂しがつてゐる子がいるよ」

ドアの向こうから聞こえる、クンクンとなく声。

それを気にする実咲に、にやりと雅貴も笑顔を返した。

「じゃあ、入れる？ 犬つて、最中をじつと見てるから興奮するつて話、聞いたことあるけど。試してみる？」

実咲に覆い被さるような体制で、からかうよひひひひわやく雅貴の声。

「絶対に、やだ」

実咲がペチっとたたくようにして顔の真上にある雅貴の両ほほを挟むと、彼は笑つて実咲を抱きしめるように彼女の体に身を沈めた。

幸せなまま、毎日が過ぎていた。

きっと、怖いぐらい幸せ、といつて言葉は、いつにいつのためにあるのだろうと実咲は思う。

賭を始めて一ヶ月がたつていた。

雅貴の言葉を信用なんかしていなかつた。少なくとも、信用しないと自分を戒め続けていた。

けれど、これまでの一ヶ月、実咲の知る限りでは雅貴が約束を破つた様子はなかつた。

まだ、ゲームに負けたくない気持ちの方が強いのかもしれない。そんな言葉で必死に自分をいさめる。

たかが一ヶ月、だけど、幸せでたまらなかつた一ヶ月。

自分をいさめなれば、雅貴のことを信じたくて信じたくてたまらない自分が、「もういいだろう」と、「もう信用してもいいだろう？」と、誘惑する。甘い考えに流されそうになる。

雅貴が見せる誠実ともいえる態度がうれしくてたまらない。

なのに信用できない。信じたいと思うこともあつたけれど、「もし

かしたら「と不安がよぎる。信用できないのに信じたい。信じたいけれど、疑り続けていたい。相反する感情が実咲の中で交差していた。

けれど、雅貴が今だけでも実咲だけを見ているということが、理性や不安を全て押し流すほどの幸福感を感じさせていた。

「実咲」

優しく名前を呼ばれ、当たり前のようにそばにいるようになった雅貴が手をつないでくる。

そんな何でもないことが、どうしようもなくうれしい。

回数なんてもう覚えてないほどセックスをしてきたのに、手をつないで歩いてることが幸せだなんて、自分でも不思議だ。

雅貴の大きな手が、実咲の手のひらを包むように握りしめる。つないだ手の感触が気持ちよくて、幸せになる。

距離をとろうと思つても、手をつなごうと伸ばされた手に、思わず触れてしまつ。躊躇いながらも軽く雅貴の手に触れるようになつぐと、その瞬間彼の表情が和らいで、優しく握りかえされる。まるで当たり前のようと一緒にいた。

それがあまりにも幸せで、実咲は望む。

ずっと、こうしていることができればいいのに、と。

限りがあることを分かつていながら、この瞬間が少しでも長く続くよひこと。

信用しないといつ反面、叶わぬと思しながら、今の幸せなときが続けばいいと、祈り続けていた。

それは、このところ当たり前になつてゐる、帰り際の待ち合わせの時だつた。

実咲は待ち合わせ場所に向かつてゐた。目的の場所はすぐ目の前。その時、目の端に見慣れない影がうつり、見るともなしにその木の陰へ目を向けたときだつた。

油断していた。

それが、真つ先に感じた事だつた。

実咲は、自分の血の気が一瞬で引いたのを感じた。目に映るその光景。

冷えてくらくらし始めた頭と、握りしめた手のひらにじんわりと滲む冷や汗を感じながら、それを、半ば呆然として見つめていた。見せかけの誠実さだと、分かつてはいたはずなのに。まだ、大丈夫だとでも思つていたのか。

頭の片隅で、自分を嘲笑う声がした。

信じないと、自分に言い聞かせてはいたはずなのに。分かつてはいたはずなのに。

感覚が、ぼんやりと遠ざかり、実咲は動搖している自分をどこか遠くの方で感じてゐるような気分に陥る。

今、その場で起こつてゐることが、どこか他人事のように感じていた。

反面、体は強張り、ずん、と重くなつたよつにも感じた。

息をすることさえ忘れたように、なぜか息苦しい。そのくせ、激しい動悸が耳の奥で、ドクドクと響く。

なのに感覚は、ひどく鈍いままで、ぼつとその状況を把握していく。

実咲は身じろぎもせず、ただ、呆然とその瞬間を見ていた。

そして、分かり切っていたのに、泣きたいほどの絶望が押し寄せてきたのを頭の片隅で自覚していた。

感覚はひどく遠いのに、じわり、じわりと、自分の体に浸透していくように、絶望が実咲の体中に広がっていく。

視線の先に、雅貴がいる。実咲が固まっていたのは、ほんの数秒にも満たないような短い時間。けれど、実咲が雅貴に気付いた瞬間から、彼は実咲の視線をとらえていた。

雅貴は分かっていてやっているのだ。実咲に目を向けても悪びれた様子もない。当たり前のように「彼女」を抱きしめたその腕を放そうとしない。

雅貴は、実咲ではない、別の女性を抱きしめていた。そして、今、実咲の目の前でキスをしている。

わざと。実咲に見せつけるように。

それに気付いた瞬間、呪縛が解けたように、感覚が一気に戻つてきた。

戻った感覚とともに絶望を上回る感情がこみ上げていた。

実咲は手を痛いぐらいに握りしめて、自分でも理解しがたい感情があふれそうになるのを必死でこらえた。

心臓が大きく胸を打つていた。握りしめた拳が小さく震えた。

実咲は、自分を落ち着けるように大きく息を吐く。

どうせなら、ずっとだまされていたかった。信用しきれないなんて口先で言いながら、ホントはあのままずつと心の中で期待し続けていたかった。

けれど目の前の現実が、そんな期待を打ち碎く。

だましてさえもくれない。そんな甘い夢さえ見させてくれない。

やっぱり、あんた最低だよ、雅貴。

期待半分、信頼しかけていた矢先の一一度目のその場面。そして今度は、実咲が見ているのを知りながら、意図的な行動なのは一目瞭然で。

雅貴がさつきのキスから抱きしめたままでいる、自分ではない女性。雅貴が再びその彼女にキスをしながら、その視線を実咲にむけた。

その目が笑っていた。
まるでいたずらでもしているかのようだ。

何を考えているのかわからなかつた。

実咲に気付いたとたんキスをした雅貴。

別れなければ、そう言えればそれですむといつに、何を回りくどくこんな形で見せつけられなければいけないのか。どうしていつもで私を傷つけようとするのか。

実咲は雅貴から視線をそらし、きびすを返す。

何でもないよう、気にもしていないよう。ただ、あきれただけのふりをして。

傷ついたと悟られないよう、走り去らないだけがせめてものプライド。

勝手にすればいい。いい加減に愛想も尽きた。どんなに好きでも、雅貴という人間がどれだけ女に対して最低になれるのか、いいかげん思い知らされた。自分の人生をこれ以上めちゃくちゃにする必要もないだろう。

泣きそうになるのをこらえる。誰がこんなとこりで泣くものか。視界が霞んだが拭いもしなかつた。拭つそぶりさえ雅貴には見せたくなかった。うつむきそうになる顔をぐつとまつすぐ前に上げた。家に帰れば、一人でいくらでも泣ける。ここはまだ人目もある。泣いたら止まらなくなるのは目に見えてくる。あいつのせいでこれ以上恥なんてかきたくもない。

「……実咲っ

思いがけない声が後ろから駆け寄つてくる。

今更何をしにきたのか。

追いかけてくる雅貴を振り返りもせず、実咲は歩いた。

「待てよ」

肩をつかまれて顔も見ずにふりほどいた。

「そんなに怒るなよ、ほんの冗談だよ。浮氣する気なんてないから

困ったような声にも聞こえるが、あまりにも空々しく思えた。

実咲は小さく鼻で笑った。じゃあ、さつきのあれは何のつもりだつたといつ氣なのか。あれが浮氣でないなら、なんだと。

雅貴の言葉に応える氣すら起こらなかつた。

「ホントにそんな氣はなかつたんだ。実咲、悪かつた。ちゃんと何でも言うこと聞くから」

あまりにも軽い雅貴の声が実咲の耳を通り過ぎる。

今更、何を言つているのだろう。

馬鹿にして。ここまで本氣でゲームの延長にされていふとは思わなかつた。未だに賭のことを言つだなんて。

「ああ、そう、そつだつたわね。何でも言ひと聞くのよね?」
ならば望み通り、賭に勝つた商品を頂いてやるひと実咲は思つた。勝つことは分かつていても、勝ちたくもなかつた賭の、代償を。

言い捨てた実咲に喜々として雅貴の言葉が返つてきた。

「うん、何でも言つて。ちゃんと聞くから」
やつと話が通じたと、ほつとしている雅貴の考えが、手に取るようになつた。

そんなはずはないと考えたら分かるだらうに。雅貴の何一つ心の込もつていらない言葉、そんなものが、どうしてこの状況の自分に通じるなんて考えることができるのか。

実咲は腹を立てる。そんな風に雅貴が思うのは、それだけ実咲のことを見ていらないからなのだ、そういうことだと思つた。

早足で歩きながら実咲は顔も見ずに吐き捨てた。

「一度と私の前に顔を見せないで」

「え……ちょ……つ、実咲?」

どうして焦るんだらう、今更。分かつていたことだらう。

「悪かつた、ホントに悪かつたからー。そんなに怒るなよ」

意外にも真剣な声だつた。思わず実咲が振り返りそうになるほどに。けれど振り返る前に雅貴の腕が力ずくで実咲の歩みを止めさせた。その反動で実咲はそのまま雅貴に顔を向

ける。

そして雅貴の目を見据えると怒りを隠すのをやめて吐き捨てた。
「……聞こえなかつたの？ 顔を見せるなと言つたのよ？ 何でも
言つこと聞くんでしょ？」

あの一瞬、実咲を止める真剣な声が初めて実咲の胸に届いた。け
れど一度や一度雅貴が心に響くような言葉を言つたくらいで収まる
ような怒りでもなかつた。

「そりだけど、そりじゃなくて。なあ、本当にもうしないから、そ
んなに怒るなよ」

向かい合つたとたん、ほつとしたのか雅貴の言葉が軽くなつた。
口調から困つているのは確かなようだ。けれどそれだけだつた。
なんて、心のこもらない言葉なんだろう。

そう思えて、雅貴の言葉が更に実咲の怒りをたきつけた。

「もうしない？」

実咲は嘲笑つた。

「私とつきあうのはゲームなんでしょ？ 浮氣するかしないか賭け
てただけでしょ？ あんたは浮氣をした、だから、ゲームオーバー
でしょ？ なにマジになつてんの？」

怒鳴りたいのをこらえて、雅貴の口調に合わせて軽く言つてみせ
る。

雅貴が一瞬考え込んだ。

「俺のこと、好きじゃないの？」

真剣な表情で雅貴が問いかけてきた。実咲にはその言葉の真意が
分からなかつた。その表情の意味も。本気なのか、そうでないのか。
「だとしたら、なんなの？」

切り返して雅貴の本心を探る。その答えはあまりにも実咲をこけ
にしていた。少なくとも実咲はそう感じた。

「やりなおそうよ」

実咲は笑つた。

「一回も同じ事されて、しかもさつきのはわざと、だつたよね？」

好きな男にそこまでされて、それでもつきあつようなら馬鹿になれって？」

実咲は笑いながら、雅貴の口をのぞき込む。

「あんまり馬鹿にしないでほしいわね。あんた、何したか分かってないわけ？ 人傷つけて、それが簡単に許されるとでも思つてんの？」

笑うしかなかつた。あまりにもバカバカしくて。あまりにも呆れたり、あまりにも辛かつたりすると、人はほんとに笑つてしまつものだと、頭の片隅で考えていた。

「それは……本当に悪かつた。でも、本当に本気じゃなかつた。本気なら、わざと見せるようにやらないことぐらい、わかるだろ？」

本気じゃない、よくもそんな白々しいことが言えたものだ。分からたくもない。その言葉を飲み込み、実咲は子供をあやすように雅貴の言葉を聞いてあげる。そして、言いたいことを言わせてあげているのは、雅貴に最後通知を告げるためだつた。

「仮に、本気じやなかつたとして？ あんた、私になにさせたかつたの？」

実咲の問いかけに、一瞬ひるんだ雅貴だが、ためらいがちに答えた。

「おまえなら、なにを命令するのか、その、興味があつた」
そんなことのためにこんなバカげたことをされて自分は傷ついたのか。

その内容に、実咲はどうしようもない衝撃を受けた。焦燥感なんか、怒りなんか、それとも悲しみだつたのか。

「あんた、馬鹿？ 「私だけ見て」とか、本気で言つと思つたの？
あんなところ見せておいて、そんな命令したところで、あんたが本気で従うと、そんなことを私が信じるとでも思つたわけ？ 所詮あんたはゲームみたいに遊んでいいだけでしょ？ 私だけ見てるふりをして？ 私に、そんなゲームして楽しんでるあんたを見て、喜べって？ 本気でもないあんたをみて、何を喜べって？」

実咲が堪えきれずにつくし立てる、雅貴の表情が違うとそんなつもりはないと訴えかけた。

「確かに、実咲の言うとおりだな……悪かった。ただ、そう言うと、思つたんだ。もし、実咲がそう言つたら、実咲とだけとつきあつつりだつた。それは本当だ」

真剣な声だつた。けれど、それが必要以上に実咲の神経を逆撫でた。

私がつきあえといつたら、つきあうつもりだつた？　自分の意志じゃなく「おまえがつきあえといつたから」つきあう。屈辱的だと思った。つき合いたいから付き合つて詰じやない、そういう意味とほぼ等しいではないか。

それが、好きな女に対する仕打ちか。

実咲は口に出しそうになつたその言葉を飲み込んだ。

好きだなんて、言われたことは一度もない。好きじゃないから、自分にこんな仕打ちができるのだ。仮に、本当は好きだとして、なにこんな事をするというのなら、尚更これ以上付き合い切れない。おかしくて、涙が出てくる。

最後まで、人を馬鹿にしている男だ。

これ以上、話すことなんて、なにもない。

真剣な表情で懇願するような雅貴の視線。それをまつすぐにらみ返していた実咲はそつけないほどの動きで背を向けると言つ放つた。

「……バイバイ」

実咲の決意を感じてか雅貴はそれ以上何も言わず、帰ろうとする実咲をひきとめようともしなかった。ただ、実咲はその場から逃げるような気持ちで歩きながら、その場を立ち去るまで背中に雅貴の視線を感じていた。

肩肘張つて、強がつて、ようやく家にたどり着くと、倒れ込むようにならうにベッドに転がる。

疲れた、な。

実咲は何をする気力も起きないまま寝返りを打ち、その度にため息をこぼした。

毎日かかってきていた電話は、もう来ない。自分自身で別れを決めたのに、それでも悲しさがこみ上げてきて、涙がこぼれた。

「雅貴、あんた最低だよ」

つぶやく声が震えた。

もう、一度と会いたくない。会えば、きっと決心が揺らいでしまうから。あんな馬鹿な男に引っかかって、これ以上生活をめちゃくちゃにしたくない。

ふと自分の姿を思い出す。

この服も、このスカートも、この髪型も、身につけたアクセサリーも、クローゼットに入っているあの服も、あのワンピースも、あのコートも、あの靴も、全部、全部、雅貴に自分を見て欲しくて選んだ。

ホントはどれも私の趣味じゃない。貯金を全部はたいてまでして買った服。バカみたいな金額のバッグに、邪魔なばかりのアクセサリー。私は自分を殺してまで、雅貴の何が欲しかったんだろう。

もう、雅貴になんか振り回されない。

こんな物はもういらない。全部明日処分しよう。

私はもう、無駄に自分を飾つたりしない。

アクセサリーは、必要ない。

ブランドもの、多かったからなあ……。

数日後、手元に入った金額を見て実咲は驚いていた。いくら元が高かったとはいえ、売り捌くと端金にしかならないと思っていたのに、実際は結構な金額になつたのだ。

引っ越し費用のほとんどを貯えるぐらいには。

始めは捨てようかとも思つていたが、全て無駄になつたのかと思うと癪に障るから、売つて生活の足しにした方がよっぽど賢いと考え直した結果だった。

でも。

と、実咲は自嘲する。

元々の金額考えると、端金か……。

一体いくらつぎ込んでいたかなんて、考えたくもなかつた。

ここ数日で一気に部屋の中がガランとしていた。

雅貴と別れた実感がわいてきて、一瞬胸が痛んだが、せいせいしたと自分を笑いとばして終わらせた。

化粧品は売り飛ばせないから、誰か友達にでもあげようか。

チークも、アイシャドウもこんなにたくさんいらない。『冠婚葬祭用にでもおとなしいのを一つおいておけばそれでいい。

だいたい、『じちや』『じちや』毎日化粧するのも面倒なのよね。ファンデーションと、口紅が一つあれば十分。あ、でも、この顔じゃ、アイブローもいるか。

鏡に向かつて、すっぴんのまま前髪をちよいとあげてみる。作りすぎてあまり残つていらない眉が出てきた。

眉も、もうここまで作り込むことはなくなるだろう。

部屋の中を精一杯片付けて、首に掛けてあるタオルで汗をぬぐつ。冷蔵庫からペットのお茶を取り出すと、そのままどせつと床に座つて、グビグビと飲んだ。

そして、そんな自分に、ふと吹き出す。
このところ、こんな事したことがなかつた。

雅貴は、かわいい、きれいな子が好きだつたしね。私は自分で作った「いい女」のイメージ通りに、自分を演じていたから。
思い返すと、苦い笑みがこみ上げてくる。だいたい、こんな姿も
この一年間した覚えがない。高校時代の体操服のジャージに、使い
古したTシャツ。

元々は、汚しても気軽に洗濯機を回せるような、こんな服が好き
だつた。

そうそう、こういうのが、ホントは楽なんだよ。
わざかなむなしさを覚えつつも、それでも無理矢理に笑いながら、
ペットボトルを下にトンと置く。

明後日にはここを引っ越す。短期間で探したにしてはいい部屋が
見つかつた。

捨てられるものは全部捨てていく。携帯も変える。そしてこの部
屋ともお別れ。

連絡さえ取らなければ、雅貴と会う機会なんてほとんどない。営
業で来ても対応は同僚や先輩がほとんどするから、顔をまともに合
わせずにすむ。

これで、ホントに、おしまい。

「実咲ちゃん、最近メイク変えたわね。ナチュラル志向?」

仕事の帰り際、先輩に声をかけられ、実咲は顔を上げた。

「なんかあつた? 最近、ちょっといい顔してる」

からかう口調に、実咲は思わず笑つた。

「ありましたよ。彼と、別れました」

笑つて誤魔化さなかつたのは、誰かに言つてしまいたい気持ちが
あつたのだろう。そして、実咲自身、口に出して笑い飛ばして、何
でもないことにしてしまったかったのかもしれない。
上手く笑えているかどうか微妙だったが、それでもすつきりした

気持ちが、表に出でていたらしい。だとしたら、きっと、良い事なのだろう。別れた苦しさがまだ胸を刺すが、気付かないふりをして実咲は笑う。

「……別れたあ？ 逆かと思つたのに」

「ごめんね、と慌てる彼女に、実咲は首を横に振る。

「そつかあ。実咲ちゃんてさ、ほら、以前はあんまりメイクとか気にしてなかつたじゃない？ きちんとはしてるし、清潔感とかはもちろんあつたけど、あんまり女の子つて感じじゃなくつて。でも、それが、なんか思つてたのと違う方向に綺麗になつていつたなあつて思つてたんだけど、まあ、かわいいし、良い傾向かなつて思つてたのよ。私、かわいい子好きだしね！ ちょっと化粧濃かつたけど。そつかー。彼氏の影響だつたのね。んー、でも、ナチュラルメイクつて、実咲ちゃんっぽいよね。なんか、良い感じで元に戻った先輩はにこつと笑つて実咲をまつすぐに見つめる。

「そうですか？」

ちょっと氣を使つているのか、いつもより早口になつている彼女に、実咲はクスクスと笑いながら、「ありがとうございます」と礼を言つた。

何も事情を知らない彼女のフォローと褒め言葉との入り交じつた言葉が、今の実咲には心地よく、これで良かつたんだと思えて、ほんの少し救われる思いがした。

けれど、

「でも、女捨てちゃダメよ！」

そう続けられた言葉に、実咲は一瞬ドキリとする。元の生活に戻るつもりだつた。戻そつとがんばつていた。それを指摘されたように感じたのだ。

確かに、この前までの実咲ちゃんは、ちょっと派手で、実咲ちゃんっぽくなつた。でもね、すごくかわいかつたから。もつと実咲ちゃんらしいかわいらしさつてあると思つから。元に戻るんじやなくつて、せつかくがんばつて綺麗になつたのを、踏み台にしちゃわ

ないと。もつたいたいわよ」

「……考えたこと、なかつたです」

実咲は彼女を見ながら、思いがけない言葉に軽い衝撃を覚えていた。

言われてみれば、そうかもしけない。元に戻つたけど、以前よりもマイクは丁寧にするようになつてゐるし、何をするにしても、シンプルでも、ちょっと女性らしさを取り入れるのは楽しいと思つた。雅貴のためだけに、雅貴の好み通りにならうとしていたけど、その中にも、自分の好きな物だつてあつた。

そつか。なかつたことには、できないんだ。

彼女に指摘されたことが、すとんと胸の中に落ちてくるよつだつた。

そして、なかつたことにしたらいけない。

うん、全部捨てるんじやなくつて、苦しくて捨てたいと思つた物の中にだつて、きつとそこには私の得た物だつてあつて。

考え込んだ実咲に、芝居めいた口調と動きで、びしりと指を指して彼女が言つた。

「で、もつと綺麗になつて、また、いい男、捕まえなさい。今度は、実咲ちゃんが、実咲ちゃんらしくつきあえる相手をね」

「はい」

悪戯つぽく笑つて話を切り上げた彼女に、実咲は笑つて頷いた。軽く話を済ませたい実咲に合わせてくれたのが分かつた。その気遣いに感謝しながら、彼女に別れを告げ会社を出る。

そんな会社からの帰り道は、いつもより少しだけ心が軽かつた。彼女との思いがけない会話は、実咲にほんの少しだけ、自分で考えるのとは違う前向きな気持ちを運んでくれた。

雅貴を思つていた自分を切り離そつと思つていた。なかつたことにして、全部元に戻そつ。でも、そつじやなくつて、そういうの、全部踏み台にして「いい女」にならないと、雅貴のことを乗り越えられないのかもしね。

やうね。せつからくだから、踏み合にしてやうづじやない。
そう思つと、ちょっと楽しくて、実咲の気分は、少しだけ上昇した。

雅貴に別れを告げて、一週間ほど経っていた。

苦しさから逃げるよひに物を売り払い、身軽になつて慌ただしく引っ越しをした。

たくさん泣いたけれど、それ以上に慌ただしが、泣く時間を減してくれた。

心機一転、といつには、雅貴を思ひ気持ちを捨てきれずにいたが、それでも、だいぶ気持ちの方は落ち着いていた。

その頃になつて、よつやく、涼子と話をする覚悟が出来ていた。別れのことも、引っ越しのことも、まだ涼子に話していなかつた。涼子に会つてしまえば、きっと泣いて、愚痴ばかりで、心配だけかけるだらうと思つと、とてもではないが話す気になれなかつた。きっと涼子の優しさに甘えて、どこまでも自分は落ち込んでしまつ、実咲はそんなふうに悲しみに浸るのは辛すぎて、避けたかつた。実咲の様子がおかしいことに気付いていただらうに、涼子は何も口を出さず、実咲が話をするのを待つってくれた。

そして新居に呼んだ涼子と、ようやく実咲は向かい合つていた。見守つてくれていた彼女への感謝を胸に、実咲は遅い報告をすると、涼子が静かに頷いた。

「そつか。やつぱり、別れたんだ」

確認するよひにぶやいた涼子に、実咲は「うん」と、小さく頷く。

全部話し終えた実咲はようやく一息つき、「ヒーヒーを一口飲んだ。涼子は新しい部屋を、ぐるっと見渡し、もう一度実咲を見つめた。

「いろいろ、すつきりしたよ」

あははと声を上げて笑う実咲を涼子が探るよひに見つめる。

「……大丈夫？ 無理に笑つてない？」

実咲は笑顔のまま息を吐き、うなずいた。

「ちょっと無理してる。でもさ、笑えるくらいにすつきりしたのも、ホント。分かつてたけどさ、やっぱり、一緒にいるの結構きつかつたんだよね。好きだけじゃ、ダメだね」

笑顔に苦みがさすと、涼子の方が泣きそうな顔になつた。

「あんたがいるのに、浮氣するなんて、ホントに馬鹿よね。実咲の良さがわからんないような男に、実咲は絶対もつたいない」

他人事と言つていたくせに怒りをあらわに怒鳴る友人の姿に、胸が暖かくなる。

いいな。友達つていいよな。

実咲はわき上がる気持ちを噛み締める。

雅貴のことばっかり考えて、周りを見てなかつたのに、それでもこうして友人としてそばにいてくれたありがたさ。

うれしさを噛み締めていると、にやけている実咲を叱りつけるよう涼子が強い口調で言つた。

「実咲も、もつと怒りなよ。いつもそんなになんでもないふりしてさ、溜めたら辛いよ？」

そういえば、さつきから彼女ばかり怒つて、実咲自身は静かにうなずいているだけだ。

そう思うと、実咲は思わず吹き出した。

涼子がむつとした様子で「聞いてるの？」と実咲をにらみつける。実咲は笑いながらうなずく。こんな心境でいられることが、やけにすがすがしかつた。

「そうだね。でもさ、私の分、涼子が怒つてくれてるし。涼子がそんな風に私のために怒つてくれるのってさ、雅貴への怒りとか忘れそうなくらい、うれしいし。……ありがとう」

にやけながら言つた実咲に、怒つていた様子の涼子がわざかにひるむ。

「なにクサイ」と言つてんのよ

涼子が実咲のほっぺをぐにっと伸ばす。実咲から少し目をそらしてその顔が、耳まで赤くなっている。

「実咲、あんた、人がよすぎだよ」

実咲は頬を引っ張るその手を振り払うと、元やにやと照れた涼子を見つめながら言い返す。

「人がいいのは、涼子でしょ」

「あんたよ」

「涼子だつてば」

口げんかのフリして言い合いながら、ちょっと涙が出た。うれしくて。こんな友達持つてるだけでも、私は幸せだなあって、本気で感動して。

くだらない言い合いに、一人で笑いながら、にじんだ涙をぬぐう。実咲は涼子と笑い合いながら、彼の面影を思い出した。雅貴、あんたがいなくても、私はやっていけるよ。

しばらくは涼子の存在が実咲の支えとなっていた。

さりげなく気を使つて、考えない時間を作ってくれる。

そんな時間の経過は、ゆっくりと実咲の気持ちを落ちつかせてくれた。雅貴のことを考えないでいられるようになつていていた。

しかしいくら落ちついたとはい、全く胸が痛まないと言え、嘘になる。雅貴を好きだと思う気持ちが消える日なんて想像もつかないほどに、まだ雅貴のことを好きだと感じている。だから出来るだけ雅貴に関することには思い出したくもないし、触れたくもなかつた。

それを思つと、少し甘かつたかなあ、と、実咲はデータ入力をしながら、溜息をつく。

実咲の背中の向こうで、同僚達の笑い声と、雅貴の話し声が響いていた。雅貴が納品にやつてきていたのだ。耳に入つてくるそれらを出来るだけ聞かないように遮断する。

これまでに何度も、さりげなく話しかけてこようとしているのは気付いていたが、雅貴と話したい同僚達のおかげで、簡単に避けることが出来た。

雅貴は会社ではあまり関わりたくないという実咲との約束を守つているらしく、無理に話しかけてくるような真似はしなかつた。

その点に関しては感謝してあげてもいいかもしない。

もし雅貴が気にせずに話しかけてくるようなら、場合によつては、仕事を辞めてしまおうか、などと、少なからず考えてもいたのだから。

話しかけようとしてきていることに気付いた時は強い不安感もあつたが、すぐにそれが杞憂であると気付いた。

雅貴が無理矢理に話しかけてくることはないだろうと確信した時、

ほつとしたと同時に、不可解な胸の痛みを覚えたことについては、考えないようにした。

とりあえず今はこれで良い。会社を辞めるだなんて、出来ればそんな無謀なことはしたくもないし、話しかけられることがなくて良かったのだ。

もつとも、会社を辞めるだなんてちょっと想像するだけで本氣で考えたわけではないが、それでも、もしこのまま雅貴と関わったら、自分の人生を棒に振る事になるのは想像に難くない。今、雅貴と関わらないためなら、必要があれば、本気で仕事さえも辞めてしまいそうな自分が恐かった。

実咲は雅貴と顔を合わす機会があつても、さりげなく拒絶と無視を繰り返す。

話しかけてこようとしていると感じるのが私のただのうぬぼれで、雅貴の方は特に何も考えていないのであれば、ずいぶんと未練たらしく滑稽に見えるのだろうけれど。

そう思つとおかしかつたが、実咲はそんな自分を笑つて、怒りの表現の一つとこことで胸の中に納めた。

実咲は雅貴に目を向けないよう、何も感じていよいよ、いつも通りに仕事をしながら、雅貴が帰るのをじつと待つ。仕事で顔を合わせる相手と恋愛をするのは無謀だつたな、と思いながら。

納品を終えた雅貴が帰つていいくのを感じて、実咲はこつそりと息を吐いた。そこにいるだけで、緊張してしまつっていたのだ。

元々実咲が雅貴の対応をすることがほとんどなかつたために、関わらずに無視をするのは別段不自然でも気まずくもなかつたが、視界に入るというのは、少し辛い物があつた。

その上研究室内でも人気の営業さんの話は、否応なしに実咲の耳へと届いてくる。

最近は、実咲の会社の事務の子にやたらと声をかけているらしいとか。

実咲は噂を聞く度にこつそりとため息をついた。

その相手は、どうやら涼子らしいということまでは分かっているが、彼女が実咲には何も言わないから、詳しいことは知らない。

涼子が何も言わないのは私を思つてのことだらう、と実咲は思つてゐる。

もしかしたら、と実咲は想像する。雅貴が電話も住所も変えた実咲の居場所を涼子を通じて調べようとしているのかもしない、など。

雅貴は女に執着することのない男だ。だから、まさかとは思うのだが、話しかけてこようとする素振りがあるということは、もしかしたら、まだ実咲に対しての未練があるのかもしない。

だから涼子に近寄つてゐるのかも……。

そう考へると、拒絶する思いとは裏腹に、そうだつたらうれしいと思う気持ちも首をもたげる。けれど、もう、それに囚われるつもりはないのだから、出来るだけ考へないようにしていた。

何より涼子が何も言わないのだから、実咲の想像にすぎない。それでも、どういう理由であれ、彼女が何も言わないのはこれ以上実咲の心が乱されないよう、防波堤になつてくれているだらう事は想像に難くない。吹つ切つたつもりでいても、雅貴の名前を耳にするだけで、まだ実咲の心はざわめき動搖するよつた状態であることを涼子は知つてゐるのだから。

だから実咲は涼子が何も言わないことに、時々落胆しつつも、それでも今は、それがありがたい事だと、心の中で涼子に感謝した。本当は、感謝していないと、雅貴と顔を合わせてゐるというだけで、ずっと自分を気遣つてくれている親友にさえ嫉妬してしまいそうな自分を自覚してゐた事もあり、ことさら、良い方に考へるようになっていた。

別れてすつきりした。もう、雅貴とは、何の関わり合いもない。そう考へる気持ちに嘘はない。

けれど、雅貴を思つ気持ちは、理性ではどうにもならなかつた。

関わらないと誓つても、雅貴がいないことを受け入れても、名前を聞けば、どうしようもなく彼のことばかり考えてしまう瞬間というのがあるのだ。

雅貴が自分のことで涼子に声をかけているのだとしたらと考えただけで、これ以上関わりたくない思いと、どうしようもない期待感がこみ上げてしまう。

一人の女性に固執することのなかつた雅貴が、自分にだけはあきらめきれずに追いかけてくれていてではないかと思えて、その期待感は胸を踊らせるのだ。

もう関わらないと決めているのに、そんな事がどうしようもなく嬉しくて、嬉しいと感じてしまう事がどうしようもなく悲しくて、そんな自分があまりにも滑稽で、実咲は笑う。

笑つて、笑つて、そして息をつき、彼のことを考えないよう、今日も心にしまつ。会いたい気持ちから目をそらす。

そうして、時折どうしようもなくかき乱される心とは裏腹に、生活は、淡々としていると言つてもいいほど、平穀で落ちついていた。惑うのは、ほんのわずかな時間。すぐに気持ちを切り替え、実咲は新しい生活に目を向ける。

ほんの少し、心乱されて、けれど、穏やかな生活。これでいい。

毎日、雅貴に振り回されることのない、悩むこともない生活。取り戻した自分らしさと、受け入れた新しい自分とを、少しワクワクしながら探る生活。

別れてからも楽しいことや、嬉しいこともたくさんあった。ちょっと金欠気味だけれど、今の自分が好きだと思つ服やメイクを探したりするのが楽しい。そしてその充実している生活の反面、どこかむなしさが時折心をよぎる、そんな日常がここにあった。

だいぶ吹つ切つたつもりだつたけれど、自分を押し殺してでも良いから側にいたかつたほど好きだった人だ。すぐさま完全に吹つ切

れるはずもなく、忘れるには、もう少し時間がかかるんだな、と、半ばあきらめも込めて実咲は笑う。

出来るだけ笑顔でいると、少し落ち込んでいても気持ちが上を向く気がした。

最近、涼子が気を使っているのか、いろいろと連れ回してくれる。気が紛れてちょうど良いのだけれど、一つだけ、どうしようもなく気になることがあった。

「うん、かわいい、かわいい」

涼子が満足そうに実咲を見る。

実咲は引きつりながら涼子を見て笑った。

「私ね、最近の実咲の服の感じとか、すごく好きよ。シンプルで落ち着いてるけど、ちょっとフューミニーンなの取り入れてるでしょ。似合ってる」

「ありがと」

上機嫌の涼子に、一応、口先だけの礼を言つて実咲は溜め息をついた。

今日も、か。

連れて行かれる先に田を向けて、まったく、涼子も飽きないものだと思つ。

涼子に連れ回される先々には、やたらと男が多いのだ。平たくいふと、会コン比率が高い。当分は男の人と遊ぶ気にはなれないというのに。もちろん彼氏も当分はいるらしい。分かっているだろうに、変なところにまで気を回すところが涼子のいいところなのか、悪いところなのか。

「前の男を忘れるには、新しい恋よ！」

〔冗談めかして言つているが、あの田は本気じやないかと実咲は思う。

確かに、女を捨てるなといわれて、その通りだと思つた。経験を踏み台にいい女になつてやるとも誓つた。やっぱりそれには男性の目があるのが一番かもしれない。

でも、今は、ちょっとといらないかな。

まだ完全には吹っ切つていないし、それは、相手の男性に失礼な気がした。

せめてもう少し。ワンクール置いて欲しい。

が。そんな実咲の心は置いてけぼりで、涼子に別れたことを報告した直後から、合コン三昧の日々である。

週一頻度つてどういう事。

この一ヶ月ほどを思い返して、実咲はざわめく居酒屋の中で苦笑いしていた。

「実咲と気の合ひそうなタイプの人も、今日は来るつて言つてたからさー！」

そう言つて、今回は断ろうとした実咲を無理矢理メンバーに引きずり込んだのだ。

すでにできあがつてる数人のメンバー。そんな連中にさらなる追い打ちをかけようとする酒豪もいる。これは、合コンというよりかは、飲み会の雰囲気だ。

でも、いろいろのは気楽で良いかな。

それは、ほんの少しだけ楽しくて、けれど、ちょっと疲れてしまう。

時折盛り上げる人がいて、わっと歓声が上がつて。笑うみんなに合わせて実咲も笑う。

何なの、この体育会系。

涼子の言つところの「実咲と気の合ひそうなタイプ」の男が見あたらなこところに、涼子が口から出任せを言つたのだろうなあとう事が想像できた。

そこはあえて追求せずに、これが涼子の厚意だと、前向きに受け取ることにした。

それにしても、と、実咲は気付かれないようそつとため息をつく。

く。

こんなところで何してるのでかな。

この日は、やたらと頭の中が冷めていた。

普段なら、もう少し楽しめる場の雰囲気が、今日はどうしようもなく心がしらけてしまっている。

理由は分かっている。最近の雅貴の様子だ。もう、声をかけてこよつとしてこなくなつていていたのだ。視線を感じることもない。むしろ、避けられているようにすら感じる。

切り捨てていたはずなのに、雅貴から避けられているという事実を前にしたとたん、全て終わってしまったのだと、絶望すら感じていた。

時折心の片隅で疼いていた希望をなくし、よかつたじやないと自分を励ますも、まだ、少し立ち直れていなかつた。

実咲は周りのテンションについて行けず、一人冷静に、ちみりちみりとチューハイで唇をぬらしながら、帰るタイミングを計る。適当なところで涼子に帰ることを耳打ちすると「ちょっと待つて」とそばにいた青年を引きずり寄せた。

「実咲が帰るつて言うから、送つてつてもうれる?」

「ああ、帰るの? いいよ」

青年はにこりと笑うと軽くうなずいた。

「え、いいよ、大丈夫」

涼子の行動と、立ち上がった青年にびっくりして実咲は大きく手を振る。

「気にしなくていいって。ここつは危なくない」

涼子が笑いながら青年をばしつとたたく。

「や、そうじやなくて……」

「まあ、酔っぱらいの言つことばは聞いとくに限るよ」

実咲が断る言葉を考えているうちに青年が笑つて実咲の隣に立つた。

「んじや、気をつけてね」

少し上機嫌で涼子が手を振つた。

仕方なく実咲も手を振つて「「めんね」と青年に謝りながら一緒に居酒屋を出た。

「『めんね、気にしなくてよかつたのに』

「いいんじやない？ 女の子が一人で帰るって言つたら、どうせ誰

かついて行くと思うよ」

それはどうかな、と思わないでもないが、隣の青年はにこにこと笑いながら言つ。

人が良さそうだなあ

ほんわかしたその雰囲気に、思わず実咲も笑みが漏れた。

「そう？ ジヤ、甘えちゃおつかな」

実咲はいつもなら断るその申し出を珍しく受け入れた。喧噪の後の、暗い一人の帰り道が寂しく感じたのだ。

涼子を思い浮かべながら、実咲はこっそりと笑う。

人を飲み会に連れ出しておいて、私が一人で飲んでる間に自分はちやつかりと気に入つた人を側にキープしてたなんて。

一緒に歩く彼は話しやすかつた。涼子とは、以前からの知り合いなのだという。

飲み会での話をしながら、実咲は青年との会話に居心地の良さを感じていた。感じのいい青年だつたけれど、駅が近づくと彼を見上げて実咲は言つた。

「ここまでいいよ」

笑いかけると、彼は「大丈夫？」と心配そうに首をかしげた。

ああ、こういう人を好きになりたかったな。

居酒屋から駅までの何気ない会話や仕草、そして雰囲気で、実咲は彼に好感を覚えていた。

「大丈夫、家も駅からそんなに遠くないし」

「そう、じゃあ、気をつけてね」

笑顔で別れて、彼が見えなくなると実咲はため息をついた。

何度も連れ回されてきた合コンにもいいなつて思う男の人が時折いた。それでもそれ以上の気持ちにはなれない自分。好感を覚えても、それ以上でも以下でもなく。

涼子の、男を選ぶ目は正しいと思うよ。でも、ハイそうですかと

言つて、あてがわれた男にふらつてことができれば、こんなに辛くないんだよねえ。

実咲は心の中で独りごちる。

仮に「ハイそうですか」とふらついたとしても、今度は向こうの気持ちも問題になつてくる。

今別れた彼なんか、最たる物だ。彼の態度を見ていれば、何となく分かる。彼は、たぶん涼子狙いだ。

実咲はくすりと笑う。

「人生つてうまくいかないな」

実咲は心の中でさつきの彼にエールを送りながら、軽く呟いた。自分の人生はうまくいかない。でも。

実咲は祈る。せめて、周りのみんなに、幸せが訪れますように。周りの人が笑っていると、少しだけ、幸せをお裾分けしてもらつた気分になれるから。

実咲は自分を取り巻く周りの人の温かさを思い浮かべながら、その幸せを噛み締めて、じんわりと微笑む。

そして、私も少しづつ笑顔に戻る。

部屋に帰り着くと、ベッドにぼふつと身を投げる。ちょっと疲れたな。

でも、マイクを落とさなきや。それと、シャワーを浴びて、それから……。

何もする気も起きないまま、しなければいけないことを行動に移さないままだらだらと考えている時だった。

ピンポーン

突然呼び鈴の音がなつた。

こんな時間に誰よ。

実咲は重い体を起こすとドアの外をのぞく。人影は見えるが、誰かは分からぬ位置に立つている。

誰だろ？と、実咲はドアの前で躊躇つた。

こんな時間にやつてくる訪問者に對して、ドアを開くのは躊躇わ
れた。

涼子かとも思つたが、彼女ならこんな時間に来る前にまず連絡を
してくるはずだ。

外を確かめるか躊躇つ実咲の耳に、扉の向こうから声が届く。

「……実咲」

小さな声だつた。

それはよく知つてゐる声に似ていた。とても聞きたくて、一度と
聞きたくない声。

まさか。

そんなはずはない、そう思つのに、実咲は震える手で鍵を開けた。
ガチャンとチーンが張つて、扉が少し開いたところで止まる。
チーンに遮られたドアの隙間から見えるのは、一度と会いたく
ないと願つたその人だつた。

「…………雅貴…………」

それ以上言葉が続かなかつた。何をしに来たのだろう。それよりも、どうしてここを知つてゐるのか。

表情こそ変わらなかつたが、実咲はパニックに陥つてしまつた。

なんで。

もう声をかけようとする素振りせえしなくなつていていたというのに。頭の中は真つ白で、ただ、呆然とドアの隙間から半分だけ見える彼の顔を見つめていた。

「久しぶり」

少し躊躇つた様子で、ゆがむよつて、無理矢理笑つたような雅貴の笑顔が見えた。

「…………何の用？」

低い、こわばつた声が、自分でも驚くほどきつこ口調で出た。雅貴の顔が苦しげにゆがんで見えた。

「少し、話、出来ないか？」

「話す事なんて、ない」

声が震えそうになりながら、せつぱつと実咲は言った。

「頼む、少しで良い。…………十分ぐらいい、ダメか？」

低く苦しげにつぶやかれる声は、どこか思い詰めてこらむようにも聞こえた。

「頼む」

実咲はドアを閉めた。そして、閉じたドアを見ながらどうするべきかを考えた。このまま鍵をかけるか、それとも。

ドクドクと高鳴る心臓の音を聞きながら、どのくらい扉を見つめていたか。

まだ、ドアの向こうに雅貴はいるだろうか。

会いたかったのだと、気付かされる。今でも好きなのだと思い知る。このまま鍵をかければ、これまで通り少しずつ忘れていくだろ？か。それとも、今日の来訪の意味をいつまでも気にかけ続けてしまつだらうか。

未練がましい自分に、実咲は溜息をつく。

間違いなく、私は後者だ。

でも、大丈夫、雅貴のした仕打ちを思い出せば、きっと話を聞いても、流されたりしない。

実咲は、覚悟を決めて、チエーンを外し、ドアを開けた。ドアを閉めてしばらく経っていたのに、雅貴はまだそこについた。

いつそ、諦めて帰つてくれていたら、諦めもついたものを。

「何の話？」

実咲の問いかけに、雅貴の顔が苦しげにゆがんだ。

「……十分でいい」

明確な答えは返つてこなかつた。代わりに、ぽつりと低い声が響く。

「悪かつたな、突然。こんな所まで押しかけて」

「そう思うなら、なぜ来たの」

「……謝りたかった」

実咲は眉をひそめる。

何を今更。

とつさにそう思つ反面、わずかに浮き立つ心。それは期待なのかかもしれない、それを心の片隅で感じつつ、実咲はその感情を押し殺して、怒りや不快感を優先する。

「そう。分かつたわ。あの時のことを悪かつたつて言うのなら、その謝罪は受け取つてあげる。許す、許さないは、別だけどね」

実咲は打ち付けるようになる心臓の音を聞きながら、こわばる顔に笑顔を作る。

「じゃあ、用事は済んだわね。……帰つて」

声が震えそうになるのを必死で押さえながら、実咲は何でもない

素振りをしながら言い捨てた。

雅貴はどこか苦しげに実咲を見つめている。

「許してくれなくていい、頼む、話がしたい」

低く、ぐぐもつたような声が絞り出されるように雅貴から漏れた。懇願するかのようなその表情は、よく見ると、ひどく苦しげで、顔色もどこか悪く見えた。

実咲は狂ったようにドクドクと波打つ自分の鼓動を聞いていた。まともに思考が働かなかつた。

今更何をしに来たのだろう。何を話したいというのだろう。

止まつた思考の中、もう、これ以上関わつてはいけない事だけは分かつていた。

なのにどうして自分は雅貴を振りきる事ができないのだろう。情けなくて泣きたいくらいの気分なのに、会いに来てくれた、会えたうれしさばかりが胸をしめる。

それなりに落ち着いたと思っていたのに、本当は会いたくて会いたくてたまらなかつた自分を、今更ながらに思い知らされる。

「話をして、どうするの」

躊躇う心とは裏腹に、自分の声が驚くほどに冷たいことに、実咲はほつとする。

実咲を見つめている雅貴の顔が、ひどく悲しげに微笑んだ。

「……もう一度、振つてくれたらしい。そしたら……一度と、個人的に声をかけたりしないから」

雅貴が、泣いていないのが不思議なほど弱々しくつぶやく。だから、頼む、話をさせて欲しい、と。

上辺だけの言葉や表情なら簡単に切り捨てることが出来た。けれど、そこには、別れた時のような軽さは欠片ほどもない。一つ一つの言葉が誠意を持つて、真摯に実咲に向けられている。

ずるい、と、実咲は思う。断れるはずがないのだ。こんなふうに頼まれて、何の裏もなく、真摯さを見せられて。

実咲は雅貴の持つ二面性を知っている。女性に見せる軽薄な側面

と、友人や人に對してとても真摯で思いやり深い側面と。

今、雅貴から向けられているのは、実咲が好きになつた、皮肉屋だけれど、情に厚い彼らしか。

今の雅貴となら、話が出来るだらうか。

そう思つてしまつるのは期待なのか。

実咲は躊躇いながらも、結局は雅貴を招き入れてしまつ。部屋に入った雅貴は、軽く中を見渡し、まるで緊張でもしているかのように浅い溜息をつき、そして口をつぐむ。

その姿はいつもの様子と違つていて、実咲は戸惑いながら彼を見つめたが、雅貴は実咲から顔を背け床をじっと見つめていた。

「コーヒー、飲む？」

沈黙に耐えかねて実咲は思わず話しかけたものの、言つた直後に、自分の言葉が長居を促しているようにも聞こえると氣付いて動搖する。

けれど雅貴はそれには全く氣付かず、うつむいたまま、静かに首を横に振つた。

「……いい」

雅貴の返事に、実咲は安堵すると同時に落胆を覚えた。

彼の反応に落胆してしまつた自分に、実咲はどうしたいのかすら分からなくなつていた。

雅貴は相変わらず、どこかこわばつた表情のまま部屋に佇んでいた。明かりの下で久しぶりに彼の顔を見ると、やつれているようにも見えた。光の加減かもしけない、そう思おうとして、目の下のクマに気付く。

疲れているのか、それともそれほどまでに仕事が忙しいのか。

久しぶりに顔を合わせた雅貴の様子が、実咲の知る彼の姿とはあまりにも違つていて、戸惑つた。

仕事柄もあつてか、こんな風に弱さを表に出すよつた男ではなかつた。他人に気遣いや優しさは見せても、雅貴自身はそれを人に求めることがなく、むしろ疲れや弱音は隠そうとするきらいがあるよ

うな男だった。

その雅貴が、隠しきれない疲れを滲ませている。

その姿が、実咲の胸を突く。手を差し伸べたくなる衝動を必死に抑えた。

戸惑う実咲の気持ちを気づいてか気づいていないのか、さらに実咲の気持ちを揺るがすかのように、雅貴が視線を実咲に向け、まっすぐに見つめてくる。

見つめたまま沈黙を続ける雅貴に、実咲はたどえようもない居心地の悪さを感じた。

「で？」

口の中がからからになりながら、声を絞り出す。雅貴の姿に、何でもない言動に、未だ振り回されている自分に嫌気がさす。そんな自分を知られたくないくて、強がって睨むように雅貴の目を見返した。

すると実咲の視線を受けて今度は雅貴が目をそらした。何かを思い悩んでいるようでもあった。

「……実咲」

ややあって、ようやく口を開く。同時に逸らされていった視線が再び実咲に向けられた。

「俺は、おまえのことが好きだ」
静かな声だった。

けれど、それはどこか苦しさを伴って響く。どこか悲しげにも見える雅貴の視線が実咲にそう思わせるのか。

何を今更…。

美咲は、雅貴の言葉、そしてその様子にひどく動搖した。好きだという言葉を雅貴から向けられたのは、初めてだった。付き合い始めてから最後の瞬間まで、一度も向けられたことのなかった言葉。

それを別れて一ヶ月もたつた今になって、雅貴の口から聞くことになるとは。

向けられてくるまなざしを探るより見つめ返し、美咲は彼の真意を探るうとした。

本気のわけがない。

そう思つのに、美咲の瞳に映る雅貴は、どこか憔悴し、まるでがるかのように美咲を見つめているのだ。どうしても、そこに嘘が見つけられない。

「俺は、お前に、最低なことをした。『ごめん』
どくん、と実咲の心臓が大きくなつた。

なによ今更。

自分自身に対して半ば虚勢を張つて実咲はそう思おうとした。
そうだ、今更だ。『めんの一言ですむほど軽く済ませられないほど苦しかつた。

なぜか泣きたくなるような気持ちがこみ上げて、それに気付きたくなくて、美咲はうなだれる彼をなじりうつと、必死に言葉を探す。出でていつて。お願ひだから、早く出でていつて。

美咲は、許しそうになる感情から逃げるより、それを不快感にすり替えた。

そして口端を意識的に引き上げて雅貴に向かつて笑いかける。

「最低なこと？ なにが？ 雅貴に、何が分かるって言うの？ 悪いなんて全く思つてなかつたくせに」

言葉にした直後、美咲の胸がズキリと痛む。

自分の言葉の中に真実を見て、傷つく自分が情けない。美咲は自分が嗤う。嗤いながら雅貴を見つめる。

「ひどいことをしたなんて気持ちは、全くなかったくせに。よくそんな事が言えるわね」

この笑顔は、雅貴への嘲笑のように、見えているだろうか。胸が苦しい。

早く、早く追い出さないと。

実咲は焦りを胸に、雅貴を見つめる目を逸らせた。雅貴の視線が怖かつた。時折まっすぐに見つめてくる視線が、偽りなく実咲をとらえているからだ。

以前のような上っ面で誤魔化そうとする顔ではなかつた。早く雅貴を家から出さないと、きっと、感情に負けてしまう。好きな気持ちに負けてしまう。二ヶ月前の雅貴ならともかく、今、目の前にいる雅貴を振り切るだけの自信がない。

実咲は笑いを納めて、気持ちを強く持とつと、睨むように雅貴を見ることで対峙しようとする。

それを受け、彼は重く息を吐き、静かにうなずいた。

「実咲に切り捨てられたときに言われたこと、ずっと考えていた」低い声。どこか疲れたようなその姿。

実咲の視線の先で、雅貴の表情が、苦しげにゆがんでいた。

「実咲の言つとおりだつた。俺は女と付き合つことに、特に何も考えていなかつたし、おまえと付き合いだしたときも同じだつた」

雅貴は言葉を切ると、うつむき、また、ゆっくりと言葉をつなぐ。

「俺は、実咲のことは友達と思っていたし、大切にしたいとは思つていたけど、付き合つことに関しては、おまえと、他の女を分けて考えていたわけでもなかつた」

静かな口調で、まるで他人事のように淡々と雅貴が言葉を紡いで

ゆく。

事実であるが故に、その言葉が、じわりと鈍く実咲の心を斬りつけるように漫透していった。

胸が、苦しい。

未だに、そんな雅貴の何の氣もなしに紡がれる言葉で傷ついてしまつ自分、未だに泣きたいくらい雅貴を好きな自分を、実咲は自覚する。

たつた今、好きって言つたくせに、何よ。

これ以上雅貴の言葉を聞いていたくない、逃げ出したいという思いに駆られた。けれど実咲の気持ちとは裏腹に雅貴は淡々と言葉をつなげる。

「誰と付き合おうが別れようが、俺には姿が変わるだけでたいして違いはなかつた。極端な話、女と付き合つことなんてセックスさえできれば後はどうでもいいことだつた。……俺は、分かっていなかつたんだ」

雅貴の声が、苦しげにゆがんだ。淡々としたその口調が、にじみ出る苦しさを吐き出すように絞り出される物へと変わる。

「俺は、実咲が俺にとつて特別だと言つことを、分かっていなかつた。当たり前にしてくれたから、それに甘えていることにさえ気付いていなかつた。俺は、あんな事までしておいて、おまえと会えなくなるなんて、全然、考えてもいなかつたんだ……」

苦しげな告白に、実咲の頭の中は、真っ白になる。けれど、ただ一つだけ、心に残つた言葉があつた。

私が、雅貴にとつて、特別……？

どくんと、強く心臓が音を立てる。

「……なに、それ」

心の中を渦巻く疑問が、口をついて出た。

激しく打ち鳴らされる鼓動は雅貴にまで聞こえそつなほど大きな音を立てている。

その先の言葉を聞きたくて見つめた雅貴の顔は、先ほどまでの苦

しげな様子はなりを潜め、代わりに静かに、どこか悲しげに沈んでいる。それは実咲の目に、憎らしいほど落ち着いていて見えた。

「……まともに付き合いだしたの、半年ぐらい前だったよな。それまでずっとおまえのことは友達だと思っていた。付き合うと言つても、それまでのつきあいにセックスが入つてくるかどうかぐらいの差にしか思つてなかつた」

抑揚のない声で話す雅貴の眉間に小さくしわが入る。ややあつて今度は息を大きく吸い込む。辛そうな表情だった。

「それまでみたいに一股かけてるの見て怒りながらも笑つて小突いてた感じで、女のことで俺が何しても、笑つて許されると思つていた」

そう言つて見せた苦い笑いは、雅貴自身に向けられ、自分を嘲るよつに言葉を続ける。

「そんなわけないのにな。おまえが俺のこと好きつて言つてくれてたのに、たぶん、俺はその意味がよく分かつてなかつたんだ。あんな事したら、おまえがどれだけ傷つくかなんて、考えてもなかつた」腹立たしいほど率直な言葉だった。特別だと言われた言葉への期待をたたき落とす程度には。

未だに雅貴の言葉に一喜一憂している自分に実咲は泣きたくなる。苦しさから逃げようと雅貴をなじる。

「だから? それが何だつて言うの。分かつていなかつたから、仕方がないって?」

雅貴が言葉を見つけられないのか、息苦しそうに見つめて来た。

「……実咲……」

苦しげな雅貴の表情に反比例するよつに、実咲の中に沸々と怒りが込み上りてきていた。

意味が分かつてなかつた? 笑つて許されると思っていた? 男友達と同等とでも言うのだろうか? 体以外、女として認めてくれてなかつたということなのか。

ああ、と、実咲は思い至る。

そっか。そういうことか。

ようやく、納得がいく。確かに、それならば好かれているのだろうと、実咲は出会い頭の告白の意味に気付く。傷つけて反省もしただろう。落ち込んだ様子の雅貴の姿も当然だ。
なぜなら、私は、彼が最も大切にする「友達」という存在なのだから。

腹立たしさと、あきらめと、悲しさと。渦巻いた感情が揶揄となつて雅貴に向かう。

「女だけど、特別に友達として好き? そんなこと言われて何を喜べって?」

怒りを通り越して、滑稽すぎて笑つてしまいそうだった。

分かっている。雅貴は女は大切にしないが、友達は大切にしている。実咲は他の女のようにどうでもいい存在ではないと、雅貴はそう言つているのだ。だから実咲は友達でいられたらよかつたと、一時期は願つていたはずだった。

けれど、どうして今更それを喜べるのだろう。大切だと言われても女として見てくれないのなら同じではないか。

友達でしかいられないことと、女と見られれば大切にされないと。立場は違つても、雅貴を好きな実咲にとって辛さに変わりはないではないか。

その思いが実咲を苦しめる。

女性として、唯一人の雅貴の恋人として愛されて、大切にされたいのだから。片方だけでは、けつときょく苦しみの形が違うだけで、辛い思いを繰り返すのだから。

泣きたかった。友達でいたかったはずなのに、それが叶いそうな今、それさえ不満に感じてしまつ自分がいる。

今の実咲にとって、雅貴の特別な女性でなければ意味がなかつた。友達だけではダメなのだ。

「違う！ そういう意味じゃない……！」

なじる実咲に、雅貴が反射的に否定をしてきた。そして、とつさの語句の強さは、すぐに力ない言葉へと取つて代わる。雅貴が感情を抑えようとするかのように震える溜息をついた。

「ごめん。俺は、また実咲に嫌な思いばかりさせているんだな。ごめん。そういう意味じゃなかつたんだ。俺はおまえが好きだ。……

俺はおまえ以外の女には興味ないよ」

どきりとした。望む言葉を返されて。それは心が読まれたかのように居心地の悪さだつた。けれど実咲は必死で皮肉げな笑みを作つて言い返した。

「そんなバカなセリフを、本気に受け取れって？ あんたぐらいの女好きなんて見たことないのに？」

雅貴の周りにいる女性と戦う士俵が違うのでは、結局実咲は苦しい思いをするのだ。何とも思つていられないからといって他の女を抱く雅貴を見る羽目になるのがオチだ。

辛くてたまらない気持ちが表に出ないよう押しさえつける。言い捨てた私に、低い声で雅貴が呟く。

「そうだな、顔と体がきれいな女となら誰とでもしてきたしな。そう思われるのが当然だと思う。でも、おれは別に女の子が好きなわけじゃない。俺は、今まで付き合ってきた子達が他の男とセックスしても何とも思わないし、好きだった子もいなかつた」

必死で言い訳するような視線を、実咲は目をそらせることで拒絶する。

「……何それ。意味わかんない」

「恋愛対象として興味があつた訳じゃない。俺が好きなのは実咲だけだ。俺は、おまえが他の奴とするのだけはイヤだし、実咲が俺以外の男と笑いながら歩いているところも見たくない。実咲以外の女

の事は、好きだったわけじゃないんだ」

言い訳がましい言葉を、実咲は笑い飛ばした。

「それで？ 仮にそれを真に受けて私とあなたがよりを戻したとして？ 私が他の男とやるのは許せないから、私が雅貴の彼女になって、あなたが興味のないセックスフレンドとやりまくるのを見つてろって？」

実咲は軽く笑つてみせる。ばかりじい、と。今までと何が違うの、と。

あり得うことだ。

そう思いながら、実咲は雅貴を見る。彼が必死に否定していくのを期待しながら。

実咲は自分でも気付かぬ内に、期待していた。

不安を揶揄という形でぶちまけて、雅貴に否定してもらいたかった。

そんな実咲の無意識に応えるように、雅貴はきつぱりと断言する。「実咲以外と付き合う気はない。もう一度と他の女には手を出さない。……今は、興味もないよ」

雅貴の真剣な表情で紡がれる言葉。

嬉しかった。

望んだとおりに、いや、それ以上の言葉を返されて。

胸を占めるのはたとえようもない悦び。

うれしくて、けれど、実咲は泣きたくなる。

雅貴の言葉を、素直に受け入れることができなかつた。

「……それを、信じろって？ 女に興味がない？ 雅貴からそんな言葉聞くなんて、笑えるんだけど」

信じたい、信じたいのに、どうしても信じられない。泣きたいぐらいたに嬉しい、けれど、泣きそつながらいそれを信じられない自分がいる。

「……どうやつたら、それを信じられるって？」

泣きそうになるのを堪えながら嘲笑うように雅貴を見る。笑つて

いないと、涙が堪えられそうになかった。

苦しい。

こんなに好きだと思うのに。私は雅貴を信じられない。もうあんな思いをしたくない。あんな苦しい思いはしたくない。彼の言葉に未来を見つけられない。彼の言葉が本当だという保証も、本当だとして、続くという保証も、なにもないのだから。

保証がなくても、純粹に願い、信じるには、実咲の受けた傷は大きすぎた。

信じると言つことは、悲しいほどに、難しい。一度不信感を抱いてしまえば、きっと完全にぬぐい去ることは出来ないのだ。深い傷は、どんなに綺麗に治つても、必ず跡が残るようだ。

雅貴の表情は真剣だつた。彼は実咲からの非難を覚悟していたよう、静かにうなずいた。

「俺が何を言つてもすぐに信用してもらえるとは思つてない。そう思われるだけのことをしたと思っている。俺が実咲の立場なら、……たぶん信用しない」

つぶやいたその顔が自嘲氣味にゆがんだ。

「……ごめん。そんな事に気付くのに、一ヶ月もかかった。ただ、それが、今の俺の正直な気持ちだ」

雅貴は息を吐くと、口元を引き締めた。

そんな雅貴の様子を、複雑な気持ちで眺めながら、実咲は頭の片隅でちらりと考える。

今、ここで、信じられない、帰つて、と、言つたのなら、雅貴は帰るのだろうか。そして、はじめに言つたように、もう、関わりのない人となる……？

考えて、ぞつとした。

雅貴との関わりを捨てていたつもりなのに、捨てる覚悟が付いていたはずなのに、今は、もう、それを失うことを、実咲は恐れていった。

半時間にも満たないわざかな時間が、一ヶ月費やして忘れようとした。

した心を、もう揺るがしている。

雅貴の言葉を拒絶しても、再び、雅貴自身を拒絶する勇気は、どこに消えてしまっていた。

実咲は何も答えられずに、胸の中で渦巻く気持ちをもてあります。自分がどうしたいかさえ分からなくなっていた。雅貴の言葉を、どう判断すればいいのかわからない。

信じたい。雅貴を好きだと思う気持ちは、悲しいほどにぶれることがない。それは、気持ちを自覚したあの日から、ずっと、変わることなく。

でも、こんな事、続けられない。

実咲はそう自分に言い聞かせる。ずっとと思い続けていた考えに囚われていた。囚われていたかつたのかもしれない。傷つるのが怖くて。それ故に、雅貴を追い払おうとしなければいけない理由を必死で探した。

そして、不意に嫌な事実を思い出す。

雅貴は、私に嘘をついたことは、一度もない。

その事実に、ドキリとする。「まかすことにはあった。けれど、言いたくない事は言わなかつたのであって、嘘はつかなかつた。その点に関しては、付き合つていた頃も一貫して変わらず誠実であつたとも言える。

また一つ、実咲は、雅貴を追い払えない理由を一つ作り出す。雅貴から逃げ出さないといけないと、ずっとと思い続けていた強迫観念が、雅貴を遠ざけなければと実咲をせかすのに、「もう今更関係ない、帰つて」の一言が、のどの奥で止まつたまま出てこない。

逃げ出したい反面、実咲は、雅貴を許したかつた。許して、今、目の前にいる、真摯な雅貴と、やり直したかつた。

すがりたい。

実咲は思う。

雅貴の言葉にすがつてやり直したい。

けれど、もう傷つくなは嫌だつた。怖かつた。

注釈(?)

「雅貴を許したかった」というのは、実咲が雅貴に与える許しではなく、実咲が、実咲自身の中にある雅貴に対する負の感情に与える許しです。

許しとは、他人に与える物や他人から与えられる物ではなく、自分自身に与える物だと思うのです。

他人がいくら許しても、自分が自分自身を許さなかつたら許せない。言葉でいくら許すと言つても、理性がいくら許したいと思つても、許せない気持ちが消えないこともある。許しとは、自分が自分自身にしか与えることが出来ないと思うのです。

返事のない実咲を前に、雅貴はしばらく考え込んだ様子で黙つていたが、ためらいがちに口を開いた。

「もうひとつ話を聞いてもらいたい。気分のいい話ではないと思つ。だから、迷つていただけど……、やっぱり、聞いて欲しい」「実咲は探るように雅貴を見ると、彼は躊躇つた様子で手をそらした。

「俺が、実咲と付き合つていた間も、他の子と関係を持つてた理由言いにくそうに、雅貴がつぶやく。

「どくんと、心臓が大きな衝撃を伝えてきた。
なに、それ。そんなの、聞きたくもない。

「今更言い訳？ そんなの聞いても意味がない」

「ここに来て、何でそんな苦しいことを聞かないといけないのか。
言い捨てた実咲に、雅貴が小さく息を吐く。

「……そうだな。そんな事を聞いて欲しいと頼むのは、虫が良すぎ
るよな。はつきり言つて、うくでもない話だし、聞けば余計に実咲
は俺を軽蔑するかもな」

そう言つて雅貴は重く溜息をついた。

「でも、俺は、出来れば実咲とやり直したいと思つてはいる。そのた
めにも聞いてもらいたい。その話を聞いて、実咲が俺を許せないの
なら、俺も、諦めがつくから。最初に約束したとおり、もう、おま
えに迷惑はかけない。一度とここにも来ない。約束する。だから、
実咲は、俺をあきらめさせるためでもいいから、話を聞いて欲しい」
雅貴は静かに息を吐いて実咲を見つめてきた。

返事を求められて、自分の心臓が激しく打つのを聞く。

「聞きたくない。

けれど、もし、雅貴の言い分が理解できて、信用できるようにな
るとしたら？ それとも、もっと軽蔑できる……？」

聞きたくないけれど、聞きたい。

決着を、自分の心につけられるだろ？

そんな期待がないわけではないが、聞くのは怖い。

実咲には選ぶことが出来なかつた。

雅貴から田をそらすと、それをどう受け取つたのか、雅貴が話し始める。

「たぶん俺は、自分の好きなように組み敷けるのなら、誰でも良かつたんだと思う。セックスがしたかったわけじゃないと思う」

意味が分からず、とつさに実咲は問い返す。

「じゃあ何がしたかったの？」

責めるような口調になつた実咲の声が震える。答えを聞けば、自分が傷つきそうな気がした。

実咲の田の前で雅貴は考え込むように口をつぐみ、そして、息苦しそうにつぶやいた。

「……見下したかったのかもしれない、と、思う」

雅貴が大きく息を吐いた。

それを感じながら実咲は自分の手をじつと見つめる。自分と雅貴の付き合つてた頃のことが脳裏をよぎつた。そういうことだつたんだ、と思うと泣きたかった。だから、雅貴は誰でもいいからあんな事が出来たんだ、と。

「きれいな顔して、何考えているか分からぬいような女が俺の思うとおりになるのが面白かった」

実咲の顔がゆがむ。その言葉が彼女の中で惨めに響いた。

「私も、その中の一人、か」

自嘲してつぶやいた言葉に、雅貴がきつぱりと否定した。

「違う。実咲は違う。実咲をそんな風に見たことはない。実咲と抱き合つのは、気持ちよかつたよ。実咲は、他の女とは全然違う。実咲に触れるのは信じられないぐらい気持ちよかつた。実咲の隣は、居心地が良かつた。でも……居心地が良すぎて、正直イヤだつた」

気持ちがいいと言つたその口で嫌だといつ。胸がズきりと痛んだ。

「……意味が分からない」

「たぶん、俺は、実咲のことも見下したかったんだろうと思つ。でも、出来なかつたんだ。人としてはもちろん、女としても、抱けば、いつだつて気持ちよかつたし、俺は実咲がかわいいと思つていたよ。俺ばかり猿みた的にやりたがつて、いつだつておまえが優位に立つてゐるようを感じていたような気がする。俺は実咲相手だと優位に立てなかつた。だから、苦しかつたんだと思つ」

雅貴が深く息をつく。実咲は、それをどう理解したらいいのか、分からなかつた。嬉しいような気もしたし、切なくも感じた。思いもよらない雅貴の告白に、感情がついていかない。

「たぶん俺は、怖くなつたんだ。実咲相手だと俺はいつものように優位に立てない。俺と付き合いだしてから、やたらときれいになるし。……俺は、化粧をしてきれいになつた実咲が、笑顔の下で何考えているのか分からなくなつた。自信をつけて、他の男にも同じようく笑いかけているかもしれない、そんな気がした。だから、実咲を抱いた後は余計にイライラしていた。実咲に見下されたくないで、たぶん俺は必死で実咲をおとしめる為の何かを探していた。でないと怖かつたんだと思う。実咲は俺なんか簡単に裏切るはずだと、ずっとそんな感覚があつた」

その言葉に、呆然として聞いていた実咲の感情の一つが、ようやく目を覚ましわき上がつてきた。

「私が、雅貴を裏切る……？」

怒りで声が震えた。その言葉を、そのまま雅貴に返したかった。他の女に同じように笑いかける雅貴を見て、苦しんだのは実咲だった。

「私がいつ……」

「実咲はそんな事しない。分かつてんのだ」

雅貴が頭を抱えるようにしてうつむいた。そして息を大きく吐くと、もう一度顔を上げる。けれど実咲と目を合わそうとはしなかつた。その表情は無表情なのに、実咲にはひどく苦しそうにも見えた。

「でも、俺は、そんな女しか知らないんだ。見た目のいい男を連れて歩きたい、後腐れのないセックスをしたい、そんな女しか俺の周りにはいない」

「それは、雅貴がそんな付き合いをして……」

「実咲がカツとして口を挟むと、その言葉尻を取り上げるよ」、元ひづりには雅貴が続ける。

「そうだ。そんな付き合いしかしてこなかつた。いい加減、気がつけば良かつたのに。せめて実咲を傷つける前に。たぶん、俺は、女とのつきあい方のスタートを間違えたんだ。実咲と出会ひ、ずっと以前に、……俺は間違えていたんだ」

雅貴は、下を向いたまま小さく息を吐いた。

雅貴の告白はをどう受け止めたらいいか分からぬまま、実咲の中にその言葉が重く響く。

「でも、俺はそれに気がつかなかつた。実咲と一緒にいるのは居心地が良かつたのに、そこで気がついても良かつたはずだつたのに。でも、それの違和感を居心地が悪いと逃げて向き合わなかつた。俺は、怖かつたんだと思う。居心地が良ければ良いほど、不安が募つていたんだと思う。実咲は、俺の中の安定を壊すんだ。実咲の側が心地よいほど、女の子を見下していたことで安定していた俺の立ち位置は崩れる。だから俺は実咲と一緒にいるほど他の見下す女の子が必要になつたんだと思う」

浮気の言い訳としては、最低だと思った。

言い訳のつもりなら、話にならないと怒鳴つたかもしれない。

けれど、実咲は口を挟むことが出来なかつた。

雅貴の言葉は謝罪の意志はあつても、許しを請うわけではなく、むしろ断罪を求めているように見えた。言い訳と言つよりも、これが雅貴にとつての事実なのだ。

それを実咲が怒りにまかせて責め立てたとして、雅貴は、ただその怒りを「そうだな」と受け止めるだろうと想像できた。

「そのくせして、俺は、実咲に依存していた。居心地がいいから、

甘えていた。だから、ずっと側に置いておきたくて、俺は実咲の優位に立とうとしていたんだと思う。それに実咲が優位のままだと、俺に実咲を引き留めておく力がないようで恐かつたせいもあるかもな。俺はたぶん、実咲に「俺は実咲を傷つけるだけの力がある」「つて、思わせたかったんだ。そんなくだらない俺のプライドに、実咲を巻き込んだ」

雅貴はため息をつくと、わずかに微笑んだように見えた。

「勘違いも甚だしいよな。どんなに実咲を傷つけることが出来たとしても、俺自身が実咲に嫌われたら、なんの意味もないのに。どんなに俺が優位に立っていると感じても、切り札を持っているのは実咲の方だったことに、俺は、実咲に見捨てられて、ようやく気がついたよ」

実咲は言葉を失っていた。雅貴の言葉はどれも思いがけない物でどういう風にとらえていいのかさえ判断がつかなかつた。ただ、分かつたこともある。

恐らく、語られた事は雅貴の本心であるだろつと言つ事だ。そして、弱みをさらけ出しているのだろつと言つ事だ。そして、弱みをさらけ出しているのだろつと言つ事だ。

けれど、それでも答えを出せなかつた。

だからといって何が変わるというのだろ、という気持ちがある。変わらはずがないという気持ちを維持したかった、と言つた方が正しいのかも知れない。

結局のところ、失つた信頼という物は、これほどまでに大きいということなのだ。

もう一度雅貴を信じたいと心は揺らいでいるのに、信用できるのか？とストッパーが働く。

雅貴の言葉は、ほぼ間違いなく本心だと実咲は思つていた。それは、分かる、分かつてしまつ。女として雅貴と一緒にいた時間より、友達としてそばにいた時間の方が長いから。

けれど、今は本心でも、それはいつまでも続く気持ちなのか。

信じたらダメだ、と実咲は自戒する。

信じて馬鹿を見るのは、私なのだから、と。

黙り込んだまま、何も言わない実咲に、耐えかねたように雅貴が話し始める。

「今更、こんな事を言つても信じてもらえるとは思つてない。でも、信じれなくとも、許すことができなくとも、それでも少しほは俺のことを好きだと思つてくれるなら、頼むからもう一度俺と……付き合つて欲しい。信頼できるわけないのはわかつてゐる。でも俺は実咲の側にいたい。実咲が好きだ。頼む。もう一度だけでいい。もう一度だけでいいから、やり直させて欲しい。前のことがそれで取り返

せるとは思わない。でも、実咲の信頼を取り戻せるようにがんばるから。実咲の信頼を裏切るようなことはしないと約束するから「懇願にもとれるその言葉。

信じられる筈がない。事実だとしても、それを受け入れるいわれなんてない。あんな事をしておいて、どの面下げ……。心中で、実咲は何度も何度も目の前の苦しげな雅貴を罵るのに。

……どうして、私はこんなに嬉しいんだろう。

考えることとは裏腹に、心の奥底からこみ上げてくるのは歓喜だつた。

実咲は込み上げてくる涙を必死でこらえた。

どうして私はこの男がこんなに好きなんだろう。

実咲はこみ上げてくる気持ちに翻弄される。

私だけを好きだと言って、私だけを大切だというその言葉が嬉しいたまらない。私はこの言葉が欲しかったのだと、喜びに胸が詰まるほどに。

信じられないのに、許したくないのに、再び雅貴を受け入れようとする自分がいた。信じたらダメだと実咲の理性は思つていて、信じたくてたまらない。

たまらない幸福感が実咲の胸を覆い尽くそうとしていた。

私の知つている雅貴は女にこんな風に執着をしない。だから、これは信じていいはずだ。そんな言い訳を自分にして、信じていい理由をつくってしまう。そして今まで受け入れたい自分を自覚する。

実咲は大きく息を吸つた。

私は、決断しなければいけない。

「……イヤつて言つたら……」

実咲は彼を見つめながら、震えそうになるのを堪えて言葉を絞り出す。

実咲の言葉に、雅貴がびくりと震えた。

「もう、顔を見せないでつて言つたら、その通りにするのよね……」

？」

実咲のつぶやきに、雅貴が震えた。握りしめた拳が、白くなるほど強く力が入り、その手がわずかに震えている。

「……ああ」

目を閉じた雅貴が、絞り出すよじつぶやいた。

胸が苦しい。

私のたつた一言で、この人は離れていく。

そう思うと何かに突き刺されるような痛みが襲う。

この人を失える？

実咲は自分自身に問う。

これほど私を失つたと苦しんでくれるぐらい、好きだと言つてくれる、彼を失える？

こんなに、好きで好きでたまらないのに、彼を失つて、私は後悔しない？

まるで最後通牒を突きつけられるのを待つ体の雅貴を見ながら、実咲は自分に問いかける。

失いたくなんか、ない。彼の手を、取りたい。

分かつっていた。本当に分かつっていた。雅貴が本気で言つていることを。雅貴が本当に自分のことを好きだと言つてくれていることを。実咲は分かつっていた。

雅貴の言葉がすんなりと自分に届く。今の雅貴の言葉にこの前のような軽さはいつさいない。今の雅貴の言葉には確かに真実がこもつていた。

けれど、実咲はその雅貴のさしのべられた手をすぐに握り返すことができなかつた。また傷つるのが怖かつた。信じたからといって、不安が消えるわけでもなれば、一度知つた恐怖をぬぐえるわけでもない。一度知つてしまつた感情は、もう、取り返しがつかないほどに、傷となつて残つている。

かといって、彼の気持ちを知つて、別れる決意も出来ない。

もしかしたらホントにずっと浮気はしないかもしねない。

けれどそれ以外にも問題がある。彼の言葉が仮に本当だとしても。けれど「いつか自分以外を好きになるのかもしない」そんな考えがよぎる。雅貴を拒絶する為の言い訳が、最後の皆のようにそびえる。それは、今問い合わせたとしても、決して解決することのない不安だった。

雅貴の言葉が本当ならば、今はいいかもしない。けれどいつ現れるかもしない雅貴が自分以上に好きになる女性。いもしない女性の陰に自分はおびえながら過ごさなければならない。

希望と不安に心が揺らいで、たった一つの決断さえ出来なかつた。言葉を返せずにいる実咲を見て、苦しさを耐えるように田を背けていた雅貴が息をのんだ。

今、私はどんな顔をしているのだろう。

どこか驚いた様子の雅貴を見て、実咲は逃げるように田をそらす。分かっている。たぶん、泣きそうな顔になっている。

だつて、表情が、隠せない。どうしたらしいか分からない。

「……何でよ、信頼なんて、出来るはずがないじゃない」

声に涙がにじんだ。震える声は、涙に濡れてか弱く響く。

「何で、今頃、そんな……」

それは、雅貴を受け入れたい気持ちを滲ませて、弱く、弱く響く。雅貴がその実咲の弱さにすがるようにつぶやいた。

「疑い続けてくれたらい。俺はそうされるだけのことをした。疑わしいと思つたら俺を問い合わせてほしい。そしたらちゃんと説明する」

雅貴はそこで言葉を切ると、苦しげに声を潜めた。

「……人から信頼を得るのは大変だよな。けど、失うのはほんの一瞬なんだよな。一度信頼を失つたら、取り返すのは最初の何十倍もかかる。だから実咲が俺をいつまでも疑うのは仕方のないことだと思つていて。だから何回でも疑つてくれてかまわない。不安になつたら、疑わしいと感じただけでも問い合わせて欲しい。俺はおまえがもう一回信頼してくれるまで、何回でも説明するから。だから、頼

む……！　もう一度、考え方直して欲しい」

苦しげに懇願してくる声、切なげに訴えてくる瞳。

雅貴が今まで見せたことのないそれらが、全て、実咲に向けられている。

胸が詰まる。苦しくて、泣きそうなぐらい嬉しかった。

雅貴の言葉が、実咲の心に染み渡つていく。言葉の一つ一つが、ひとしづくとなって、ゆっくり、ゆっくりと、実咲の心に浸透してゆく。

目の前にいるのは実咲が好きになつた雅貴だつた。案外思いやりがあつて、人の気持ちを大切にする、大切な人には本当に誠実な人。好き。やつぱり、大好き。もう、いい。もう、どうでも良い。

実咲はこみ上げてくる涙を、手の甲で乱暴にぬぐつた。

「雅貴が、私以外の女人を好きにならないとも限らないじゃない」涙声になりながら自分にとつての最後の砦を掲げた。もう、雅貴の手を取ろうとしているのに、最後にあがいてみせる。

「……そうだな。そうかもしれない。でもそうじゃないかも知れない。それは分からない。ただ、今は実咲以外には興味ないよ。俺にはそうとしか答えようがないから。でも、もしそんな女ができたら、浮気をせずに、おまえにはつきり言つ。気持ちはどうにもならないけど、裏切るような行動は、絶対にしない。もし、そんな日が来たのなら、その先のことは、一人で決めよう」

盲目的に否定の言葉を言うのではなく、肯定するところに誠実さをかい見る。雅貴は実咲の望む受け止め方を知つてゐる。

いつからだつただろつ、こんな雅貴が見えなくなつていていたのは。軽薄でダメなところばかり目につくようになつてしまつていたのは。でも、今は見える。実咲が好きになつた雅貴が、確かに目の前にいる。

「……私のことが、好き?」

「好きだ」

端的に答えた雅貴の声は真剣で、笑つてしまいそうになるくらいまじめな顔だつた。

「浮氣はしない?」

「絶対しない」

力を込めて雅貴がうなづく。

もう、ダメだ、と思つた。

自分が好きになつた雅貴の姿を改めて見つけて、どうして拒絶できるというんだろう。見えなくなつても好きだつた。どんなにイヤなところばかり田に付くようになつても、彼じやないと、駄目だつた。

いつから、あんな雅貴しか、見えなくなつていたのだろう。どうして、雅貴のそんな側面ばかりが向けられるようになつたのだろう。それは、雅貴の心の変化にも繋がつていてる。

雅貴は、女の子を見下したかつたのだと言つた。

けれど、雅貴は実咲を最初から見下していたわけではなかつた。

じゃあ、いつから?

実咲は不意に気がついた。

ああ、そうだ。

胸が軋むように、その瞬間を思い出す。

きっと、あの頃からだ。あの頃から、私の好きだつた雅貴の姿が瞼昧にぼやけていったのかもしれない。

実咲は思い出す。雅貴のことを気にし始めて、ブランド物で身を固め始めた頃を、必死で、雅貴の周りの女の子達に合わせようとしていたあの頃を。

気付いて、実咲は息が詰まるような苦しさを覚えた。

雅貴が自分を友達でなく他の女と同じに扱い始めたのは、自分が雅貴の周りにいる女と同じような振る舞いを始めたから、雅貴がそんな風に扱う女の姿を自分自身が作り出していたからかもしれない。思い至つたその考えに、実咲はぞくりと震えた。

もしかしたら、私が自分を作ったりせず、私の今まで雅貴に思いを寄せていたら、こんな風にちゃんと誠実に思いを返してくれていた……？

だとしたら、雅貴との関係をダメにしたのは、私自身のせいなんかかもしれない。

愕然と、そんな考えに思い至る。

実際そうしたところで、本当にそうなつたかどうかは分からぬ。ただ、そう思えた瞬間、胸の中がすつと軽くなつた。よかつた。

なぜか、そう思えた。

雅貴だけが、悪かつたんじゃない。

その事が、訳も分からず、なぜかうれしかつた。こだわっていた、雅貴への不信感がほどけるような気がした。

実咲はどこか晴れ晴れとした気持ちで泣き笑いになりながら、少しおかうような口調で質問を続ける。

「女と話してるだけで『何してたの？』って問いつめるかもしれないのよ。何にも疑われるような事してなくても、疑い続けるかもしれないのよ。そんなのをホントに我慢できるの？」

実咲の変化に気づいたのか、真剣なだけだった雅貴の表情が少し和らいた。

「……それは、自業自得だから、がんばって前向きに受け止めさせていただきます」

神妙に、けれど少し冗談めかした返事が返ってきた。

実咲はうなずいて、雅貴の瞳をじっと見つめた。

「私と付き合っている間は、絶対に他の女の子に手を出さないで。手をつなぐのも、肩を抱くのもダメ。髪に触れたり、指先に触れたり、女の子がその気になるようなことも、全部ダメ。私以外の子としたいのなら、私と別れてからにして」

「わかった」

もう、実咲の答えに雅貴も気づいていた。

「私を傷つけたくないとか、そんなの、言い訳にもならないから」念を押すと、神妙な顔をして雅貴が頷く。

「うん」

「絶対ね？」

「うん」

雅貴がほっとしたように微笑んだ。

「約束よ？」

「うん」

雅貴が優しく笑っている。

実咲の好きな、雅貴の笑顔だ。犬達に向けるときと同じぐらい優しい暖かい笑顔。自分に向けられるのを失ったときから、ずっと求め続けていた笑顔。

ああ、もう、好きだなあ。

悔しい。悔しいけど幸せでたまらない。

この笑顔をまた向けてもらえるのなら、傷ついても、それでもいいから、一緒にいたい。

そう思つた。

「いいわ、付き合つてあげる」

実咲は涙声で高飛車に言つてみせる。

泣きそうになりながら笑つて言つた実咲を、さつきまで微笑んでいた雅貴がくしゃっと泣きそうに顔をゆがめ「よかつた……」と震える声でささやいて、抱きしめた。まるで、すがりつくように、強

く。

「……実咲、実咲」

抱きしめられたまま、何度もささやかれる自分の名前。切なげに、大切そうに自分の名前が呼ばれるその幸せ。

それは、もう、何もかもがどうでもよくなるぐらい、幸せな瞬間だった。

信じられないこと、そう思つたことさえ遠くに感じじる。

結局、自分はこの男から離れられないのだ。

実咲はそんな自分をすつきりした気持ちで笑つ。

馬鹿なことをしている、と、心の片隅で訴える声がある。けれど、

実咲はそれを笑い飛ばす。

愚かでいい。馬鹿でもいい。

怖くて良い、不安で良い。

自信がなくても、未来が見えなくても。

信じられなくても、もし、未来、また泣くことになつても。

頭の片隅では先の分からない未来を思つて不安を感じている。

けれど、これから模索していくしかないのだと実咲は思う。

何度も傷つけられた。だから一の足を踏んでしまうのは仕方のないこと。ただ、彼から逃れると幸せになれる保証があるわけでもない。彼のそばにいると再び傷つくかもしない。けれど雅貴は言葉通り本当に実咲だけを思い続けるかもしれない。

未来は、何を選んだとしても、保証なんてないのだから。

だとすれば、実咲は雅貴のそばにいることを選ぶ方が幸せなのかもしれない。

いくら考えたところで、どの選択肢を選んでも結局どれも確証のあるものなどないのだ。ならば、もう一度傷つく覚悟で、今幸せと感じられる道を選ぶのもまた一つの選択肢だと思つ。

言い訳じみてる。

実咲は頭の片隅で自嘲した。

けれど、それでいい。

言い訳でいい。雅貴と一緒にいられるだけの理由になるのなら。
それで自分が納得がいくのなら。

実咲にしがみつくように抱きしめていた雅貴の腕がふとゆるむ。
顔を上げた実咲の目に雅貴の顔が映る。躊躇つたように実咲を見つ
めている。

「……キスしていい？ 今、実咲に、すごくキスしたい」

実咲は笑つて雅貴の背中に腕をまわした。キスひとつに躊躇う雅
貴が見えただけでも、この選択は正解だつたかも知れないと思つく
らいに、貴重な言葉だと思つた。

雅貴がコツンと、実咲の額に額を合わせる。

近すぎて顔がぼやけるのを、実咲はじつと見つめた。

「実咲が、好きだ」

囁く吐息が、実咲をそつとくすぐる。

「……会いたかった。ずっと、会いたかった。実咲と、言葉を交わ
したかつた。実咲に、触れたかつた」

震える声が吐息と共に漏れて、唇と唇が、かするように触れる。

「実咲」

切望するような声が聞こえる。それは歓喜となつて実咲の背筋を
駆け上るようにゾクゾクと体を震わせた。

「俺は、実咲が、好きだ」

絞り出すような囁きの後、深く、深く唇が重なる。
泣きたいほど幸せな雅貴とのキスが繰り返される。
幸せだった。

重なる唇の感触が、懐かしく、愛おしく、実咲の心を幸せで満た
す。

キスを交わしながら実咲は何もかもどうでもいい気分で思つ。今
は、少しの不安も未来も何も考えず、雅貴の側にいよつと。この幸
せに流されてしまおうと。

長いキスの後、離れた唇から溜息のような吐息が漏れる。息の上
がつた浅い呼吸をする実咲の体から、不意に雅貴の温もりが離れた。

雅貴はそのまま腕をほどく。

「ありがとう」

雅貴はささりと笑うと更に体を離した。

「え……？」

「思いがけない言葉と行動に、実咲は首をかしげた。

「その、今日は、帰るよ」

実咲は、後ずさるよう離れていく雅貴の顔をのぞき見る。貼り付けたようなその笑顔と離れた意味を考える。

雅貴らしくない。

平たく言つと、いたせるときには彼らしだ。今の行動の違和感は、その辺りにある。

逃げているように見えるのだが、まさかね、と実咲は雅貴を探るよつに見つめた。

「どうしたの？」

ぼそっと呟くと、雅貴がえつと顔を上げる。

「雅貴、なんか変」

歯切れの悪い雅貴に、実咲はからかうように雅貴に詰め寄つた。

「……何が？」

雅貴がぎこちなく皿をそらす。

「しないの？」

「……していいの？」

うなるような低い声で雅貴が確認してくる。

お預けをくらつた犬みたいだと実咲は思った。そうなると、おかしくて笑いがこみ上げてくる。

まさかとは思つたけど、やっぱり、そうかも知れない。

雅貴が、私に、遠慮してる。恋愛を関係に持ち込んでから、ずっと実咲は雅貴のすることに引っ張られっぱなしだった。慣れていな実咲からすると、最初の頃それはありがたかつたけれど、今思え

ば、対等ではなかつたのかもしれない。

なんだか、くすぐつたいようなうれしさがこみ上げる。

これからは、これまでとは違つ関係を築くのだと、信じられる気がした。

「そんな事、確認したことないくせに」

「……実咲に嫌われたくない」

雅貴がまるですねたよつに田を背けたまま低い声で呟く。

「今更」

実咲は笑いをこらえながらつゝこんだ。

以前はずつと主導権は雅貴にあつたような気がするが、少なくとも現時点では、主導権は自分にあるのかも知れないと、実咲は気付く。

「これは、面白いかも。

たじろいでいる雅貴を見ながら、実咲はほくそ笑んだ。

「これでも、反省しているんだ。その、俺の都合ばかり実咲に押しつけてきたのを」

「ようやく自覚したの？」

体を引きながらも「も」と言い訳する雅貴を、実咲はにやにや笑いながら見つめると、雅貴が少し開き直つたよつに実咲をみた。

「はい、すみませんでした」

「心がこもつてない」

実咲は笑つて雅貴の顔をのぞき込んで、そのままキスをした。

「……いよいよ」

実咲は呟いた。

「え？」

躊躇う雅貴の表情は見えない。けれど、実咲は雅貴の首に腕を絡めてもう一度キスをする。

「……いただきます」

耳元で囁いた雅貴の声が妙に神妙で、実咲は笑いながら雅貴を抱きしめる腕に力を込めた。

これなら意外と、やつて行けそうな気がした。

セックスの後も帰らずに、雅貴がすぐ隣にいる。

実咲は不思議な気分で隣に寄り添う男の存在を感じていた。いつもなら、こんなに遅い時間だと、犬たちのことがあるから、すぐに帰るのに。そう思つと、くすぐつたいような、うれしいような気持ちになる。

今日だけは、許してね。

雅貴の肌の感触に身をまかせながら、彼の帰りを待つていいだろう犬たちに心の中で謝る。

こうして一緒にいることは心地よかつた。

普段とは違う「近さ」が生まれる。何もかも、全部がどうでもいいような感覚。許しあえるような、セックスの後の特有の近さというか。いつもなら話せないことも話せるような、そんな近さ。

そうだ、今なら、聞けるかもしれない。

実咲は雰囲気にまかせて訊ねてみた。

「雅貴は、どうして女の子を見下したかつたの？」

唐突な問いかけだったが、雅貴は格別驚いた様子もなく、けれど少し困ったように眉間に皺を寄せると、目を閉じて実咲に甘えるよう抱き寄せた。

「……話した方がいい……？」

雅貴が少し嫌そうにつぶやくが、抱き寄せられていた実咲にはその表情をうかがう事ができない。

「あんまり話したくないような話？」

実咲の問いかけに少し考えていたのか、わずかな沈黙の後、彼の小さくうなずく動作が肌を通して伝わってくる。。

「……そうだな。今となつては、どうでもいいし、大したことないつて思えるけど……」

「じゃあ、いい」

無理に聞かなくてもいい、そう思つた実咲に、雅貴が間髪を入れず首を振つて否定する。

「……実咲には、聞く権利があるよ。聞いて気持ちのいい話じゃないと思うけど。ただ、たぶん、話したら、言い訳がましくなる。俺が、今でも許せずにいることだから。それでも良かつたら、話す」少し体を離し、まっすぐに見つめてきた雅貴の視線を受け止め、実咲は肯いた。

「聞きたい」

雅貴がわずかな沈黙の後、覚悟を決めたように頷く。

「高校生の頃だった。父親が再婚したんだ」

雅貴は、実咲を抱いたまま、ゆっくりと話し始めた。

「再婚相手は俺と年齢は十オぐらいしか離れてない人だつた。気分の良い物じやなかつたけど、母親が亡くなつてから五年経つていたしね、小学校から高校までの五年つていうと、ものすごく経つたような気持ちもあつたし。反対する理由もなかつたから、普通に一緒に暮らしていたよ。

十歳年上でもさ、結構美人だつたよ。それがやたらと話しかけてくる人で、義理の息子と仲よくなろうと必死にがんばつているんだと、最初は好意的に思つていた。

けどあの人は、俺が好意的に接していたらすぐに誘うように触つてくるようになつて、最後はとうとう押し倒された。

さすがに父親の嫁さんどんづらうなるのは気分悪いから逃げたけど。

そしたら、今度は脅された。なんとしてでも口止めをしておきたかったんだろうな。じゃあ最初つからするなよつて感じだけど、自分に自信があつたんだろうな。意外と、俺が逃げたことに腹が立つていたのかもなつて、今なら思つけど。

アレでなんか、思つたんだよ。

女つて、こんなもんなんだつて。

それからかな、言いよつてくる女の子達も、の人と同じように思つようになつていつたんだろうと思う。

たぶんね、あれで、俺の足場が崩れちゃつたんだと思う。
当時俺は、親に養われるしかない子供でさ。父親に見放されたら生きていけないわけで。それを盾に取つてきたあの人の言いなりになるしかなかつたのが悔しかつた。

俺は、あの人言いなりになりたくなかつた。

たぶん、俺は女の子をあの人替わりにしたんだと思う。女の子を見下すことで、あの人負けた自分のプライドを取り返したかつたんだと思う。

だからそれまでは、もっと、ちゃんと女の子とも付き合つていたんだけどね。

でも、その後は手当たり次第に付き合つていつたような気がする。相手が俺の見た目だけに寄つてきているのなら、適当で良いような気がしてたんだろうな。そしたら、本当に、誰と付き合つても、全部似たようなもんだつた。みんなあの人代わりに敵視できるような女の子ばかりだつた。そういう子を選んでいたんだからしかたないんだけど。

余計に、まじめに付き合つのがばからしくなつた。

結局俺に寄つてくる女の子は、俺の姿容が気に入つてているだけで、セックスして、隣歩いていたら満足なんだよ。

俺じゃなくても良いんだ。連れて歩けば自慢できるような男なら誰でも。

お互い、性欲満たして、見せびらかして、持ちつ持たれつって言うの？ そんな感じで。

結局、そんな付き合いしかしなかつたから悪循環つていうか。俺に近寄つてくる子は、どの子も似たようなもんだつたな

雅貴が、思い出すよつこ、にひくつと話す。

実咲は、時々うなずきながら、口を挟むことなく聞いていた。

雅貴が、ふっと息を吐くとすこし笑って、ぎゅっと実咲を抱きしめた。

「実咲だけが、違った。

実咲は、始めから他の女の子とは違っていた。俺がよれよれの格好で隣歩いても気にしないし、ファミレスで良いつて言うし、話しても面白いし、俺が犬ばつかかわいがつても、一緒に笑つて犬かわいがつてるし。

実咲は、最初から違つてたんだ。

そんなのは、最初から分かつていたことなのに。

初めてまともに話したとき……捨て犬を拾つたときのこと、覚えているか？あのとき俺は実咲のした事を否定したんだ。なのにおまえは笑つて『ありがとう』って言つたんだ。

あんな風な反応した女の子は、初めてだつた。

俺はずつと実咲のことが好きだつたよ。

実咲は、最初から他の女とは違つていたんだ。

どうして俺はおまえを試すような真似をしたんだろう？

雅貴は、ゆつくりと、話し終えると、小さく息をつく。

ごめん、実咲。

実咲を抱きしめながら雅貴がつぶやく。

実咲は何度も首を横に振つた。

かける言葉が見つからず、ただ首を横に振ることしかできなかつた。

実咲は雅貴の言葉にどうしようもない後悔を覚えていた。

私が、雅貴に試させるようなことをさせたんだ。

実咲の中にその思いが、間違いないこととして、胸の中に落ちて來た。

雅貴は、ちゃんと私を見ていた。なのに、私は自分から、雅貴が信用していないの方へと進んでいったのだ。雅貴にとつて信用が

出来ない女に、私は望んでなつてしまつた。

雅貴の話を聞いた実咲には、そう思えてならなくなつた。

雅貴のした事は、実咲にとつて許されることではない。いくら過去のことと流そうとしても、思い出せば胸が痛む。

それでも、雅貴だけが悪いわけではないのだと、雅貴がそんな行動に走るに至る原因を自分も少なからず持つていたのだと、そう思えたのだ。

そのことに気付き、実咲は自分自身の愚かさに動搖していた。そして、悔いる雅貴をわずかながらも冷静に受け止めることができるように気がした。

雅貴のことだけを悪いと思つていれば、きっとこの先付き合い続けることは難しかつたかもしれない。

自分に、何かできることがあつたんじやないのか。そう思えた瞬間から、今までのことは、雅貴だけの問題ではなかつたのかもしれないと思えた。雅貴の方が多分に悪いという気持ちは今でも少なからずある。けれど、それでもこれは雅貴一人の問題ではなく二人の問題だつたのだと思えた。

雅貴が変わるだけでは、きっと同じ事を繰り返すのだ。

きっと私にも悪いところはあつて。

そういうところに気付くことから、もしかしたら一人の関係は始まるのかもしねない。

きっと、今までとは違つ物に変えてゆける。

私も、雅貴と一緒にいたいのならば、彼と良い関係を作るためには変わらなければいけない。責めたり、求めるだけではきっと良い関係は築けない。

こつからをスタートにしよう。

雅貴に抱きしめられているのを感じながら、実咲はゆっくりと目を開ける。

実咲が身じろぐと、雅貴は彼女に視線を合わせて、穏やかに微笑んだ。

雅貴の表情と、腕の中の心地よさと、実咲の顔に自然と笑みが浮かぶ。

「……雅貴が好き」

いろんな気持ちが胸の中につけて、今はまだ、言葉にならない。気付いたこと、今生まれた後悔のこと、話したいことはたくさんある。

でも今は、もう少しだけ、この腕の心地よさに身をまかせていたかった。

次回、本編、最終話です。

後日、いろいろ分かつたことがある。

雅貴が引っ越し先を知っていたのは涼子が教えたのだと言つこと。
「そういえば、この前まで涼子と噂になつてたよね、あれは何？」

訊ねると、雅貴はこの上なくイヤそうに顔をゆがめた。

「ああ、佐藤さんね……。あの人のことは、何も話したくない」
口を割ろうとしない雅貴を「後ろめたいことがあるんでしょ」と

脅して実咲は無理矢理聞き出した。

それによると、実咲の引っ越し先や電話を聞き出さうとして、ようやく待ち合わせをして話をさせてもうえると思つたら、合コンの現場を見せつけられたりとか、結構いろいろな仕打ちをされたらしい。その上ようやく話を聞いてもらえるかと思えば、どうこうつもりか問い合わせただされて、納得のいく答えが返つてくるまで「そんなんじゃ会わせるわけないでしょ」とだめ出しを受けていたりとか、さんざんだつたと雅貴がぼやいた。

「俺は、最近、佐藤さんの顔を見ただけで、体がこわばるようになつたよ」

あながち冗談でもなさうなその重い声と表情に、実咲はぶつと吹き出す。

それを見て、雅貴も、仕方なさそうに笑つた。

「まあ、おかげで、見えたこともいっぱいあつたし、良かったとは思つけどな……」

不承不承といつた様子でそう締めくくつた。

持つべき物は、強者の親友である。

実咲の知る限りでは、雅貴と一度別れた後、涼子は本氣で雅貴を嫌つていたよう思つ。

それぐらい、実咲の気持ちを真剣に考えてくれているのが分かつた。

雅貴に合コン現場を見せつけたというのも、たぶん、「仕返し」の一環だろう。

それが一番きいたらしいので、涼子の作戦がちといふか、棚からぼた餅といふか、良い方向に転んだことを、心から感謝した。

特に、実咲を訪ねてきた夜のことは、かなり不満があつたらしく、涼子に対しての恨み辛みがこもつていた。

雅貴は、あの日、ようやく涼子から実咲の家の住所を聞いたらしい。そして、早めに仕事を切り上げていくと、仕事はとつぐに終わつているはずの実咲がいない。すると、涼子はわざわざ電話までかけてきて、「今日も合コン」と電話口でいったのだと。『丁寧に店の名前まで言つて迎えに行つて見ると、実咲が男と一緒に店から出でくるという場面に遭遇する羽目になつた。

「絶対、あれは俺に見せつけるために狙つてやつたことだ」憎々しげに呴く雅貴に、実咲は吹き出しそうになるのを必死でこらえる。

「佐藤さんだけじゃない。実咲は実咲で楽しそうにあの男と話しているし。家まであの男がくつついでいるたら、俺は間違いなくあの男に喧嘩を売つてたね」

「……そんな事を自信満々に言われても……」

実咲は笑うのをこらえながら、あの時を思い出す。

「そうね、でもまあ実際、楽しかつたしね？ 優しそうで、誠実そうで、感じいい人だつたし？」

実咲はからかいながらいやみつたらしく語尾を上げて雅貴の顔をうかがつた。

「すみませんねえ、感じ悪くて誠実さに欠けてて」

「少しだよに雅貴がぼやく。

「おかげでその後、声をかけられないまま後をつけるみたいになつて、変に考える時間が出来たもんだから、実咲の部屋に行くのにも勇気がいつたし、とにかく、電気が消える前に行こうつて、悶々と窓見てた。佐藤さんのせいですんざんだった」

わざとらしいぐらい嫌そうにため息をついた雅貴を見て実咲は笑う。

「なに、その、ストーカーつぶり」

「知らなかつたの？ 最近の俺の趣味、実咲のストーカーつて」

雅貴が笑つた。

実咲も一緒に笑う。

少しずつ、少しずつ、以前のような関係を取り戻していた。でも、一人で一緒にいるのが当たり前になつていて、友達だけの以前とは違うところ。

そして、少しだけ、雅貴が変わつた。

以前は割と、人の気持ちを優先して気がきく、人の手を煩わせない人だったのに、最近は、なんというか……、だらけているなーと実咲は思う。気が抜けているというか、わがままになつたというか、甘えているというか。

甘えてきて、こちらの様子を時々うかがつて、どこまで大丈夫か探つて、いる様な気がする。それを受け入れると、ほつとした様子で笑う雅貴がちょっと可愛いかも、とか思う。

以前はセックスの時以外あまり触れてこなかつたのに、今は何でもないときにつぶつと触れてきたり、べたべたとくつついてきては、ただ存在を確かめるようにしまりのない顔でほおずりをしてきたりする。たぶん反動もあるだろうから、そのうち落ち着くだろうけど、今のそういう雅貴の態度は素直にうれしいし安心するから、実咲は甘えてくる彼に身をまかせている。

いろいろと、女性に対して気が張つていたところが抜けたのかも知れない、などと、実咲は自分の都合の良いように解釈している。

女性関係は、雅貴ファンの同僚による噂によると、ずいぶんとストイックになつていてるらしい。実咲からすると、以前の方が人当たりは良かつたが隙がなく、ある意味ずっとストイックだつた気がするのだが。とはいえる、「アレは絶対に本命の彼女ができたんだよ！」とか言うのを聞くと、一体どうからそんな情報を仕入れてくるのか

と思いつつ、少しくすぐったいような、うれしこよつた気持ちになるのだ。

以前は気持ち悪いほどに出来過ぎだった雅貴が、些細なことでいふことと手がかかるようになり、何となく、思いも寄らない方向に変わったような気がするけど、その代わり、とても自然に一緒にいるようになったように感じている。

そして、なんでもない話をしながらいつものように手をつないで歩く。そんなんでもないことが小さな幸せ気分を運んでくる。これから先、どうなるかは分からぬ。でも、できれば、このまま一緒にいられればいいなと実咲は願つ。

……そして、いつか……。

実咲は純白のドレスをそつと想像する。

そんな日も来るかも知れない。

そう思えるようになった今を、心から嬉しく思つ。

ちらりと雅貴の顔を横目で見上げて、つないだ手の感触を確かめるように、握る手に少しだけ力を入れる。

実咲は、そんな小さな幸せを噛み締めながら微笑んだ。

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。
少しでも楽しんでいただけたのが幸いです。

まだ、雅貴視点がありますが、そひらま、ぼちぼちと、更新してい
きます。

来週辺りから、囚心の方を再開したいと思っています。

涼子さん大活躍で、最終話の涼子の仕打ちの内容が事細かに描かれ
ます。
フルボッコでへこたれる雅貴を見てやつてもいいわよつて方は、是
非。

引き続きアクセサリーを読んでいただけたらうれしく思います。
もつしまじりへ、ざいれ、お付き合によろしくお願いします。

彼女に背を向けて雅貴は服を着けていた。

「雅貴」

彼女の声がした。振り返るのが面倒だった。いつもそうだった。彼女を抱くのはいつもでも気持ちが良い。他の女性を抱くときは違う快感が胸をしめる。

けれど、抱いた後は不思議なくらい落ち着かなかつた。彼女の顔を見るのが見え不快になる。

嫌いなわけではない。むしろ大切に思つていて。けれど、彼女を抱いた後は、どうしても彼女の側にいるのが耐えられなかつた。なのに彼女を抱くのをやめられない。

「なに？」

彼女に答えた声が、どこか冷淡に響いた。けれどいらだちを押さえながら雅貴は願う。彼女が、この冷ややかさに気付かなければいい。決して、彼女を傷つけたいわけではなかつたから。

わざかな沈黙の後、彼女がつぶやいた。

「別れようつか」

一瞬、心臓が止まつたかと思つた。先ほど見せた自分でも理解できない冷たさが彼女を傷つけたのかと、だから突然そんな事を言われたのかと。

振り返ると、しづかな瞳で自分を見ている実咲がいた。

訳が分からなかつた。確かに、あまり良い態度ではなかつたかもしれないが、別れを切り出されるほどのこととも思えなかつた。彼女の真意が見えなかつた。

「なんで？」

理由を尋ねても、彼女はすぐには答えず、分からないことをおさげつた。

「どううね、雅貴は思い当たらぬかもね」

ゆがむように笑つた彼女は真つ直ぐに雅貴を見ていた。

「雅貴さ、昨日何してた？」

挑むような瞳で見つめてくる彼女が、今にも泣き出しそうに見えたのは気のせいか。

雅貴は、彼女の様子と、そしてその内容に動搖した。

答えることができなかつた。言つてしまえば、彼女が泣くのではないかと思うと怖かつた。

彼女は知つていたはずではないかと、雅貴は自分に問いかける。そう、彼女は知つているはずなのだ。自分が平行して、何人もの女性と遊ぶことを。

雅貴は何故今更彼女がそんな事を気にしているのか理解できなかつた。

彼女は自分の事を名田だけの彼女だと、そういうつて笑つた。

名田だけ。

違う。

雅貴は思つた。

むしろ、今までで唯一「彼女」らしく接してきたのが実咲だつた。雅貴の視線の先で彼女は笑つてゐる。その表情はとても冷静で、そしてあきらめているように見えた。なのに、今にも泣き出しそうだ、と雅貴は思つた。

「私さ、やつぱり理解できないし。わかつてたつもつだつたけど、ああゆうことやられるのはやつぱりイヤだし」

彼女が、思いがけないことを次々と言葉にしてゆくのを、雅貴は呆然と立ち尽くして聞いていた。

そんな感情を表に出すようなことはしないが、雅貴は少なからず動搖していた。彼女がそんな風に感じているとは、想像もしていなかつたのだ。

「雅貴、うつとうじいの、嫌いでしょ？」

彼女が確認するようにつぶやいた。小さく息を吐いて、彼女の視線が雅貴を突き刺す。挑まれているように思えた。

けして雅貴からの否定を求めていない瞳。

こんな言い回しをされれば、否定して欲しがっているのだろうと、雅貴は考える。「そんな事はない、おまえだけだ」とでも言わせたいのだろうと想いながら、「そうだな」と肯定するのだ。そうすれば大抵の女は終わらせられる。

けれど、彼女は違う。

これは確認でしかないのだ。

彼女は自分の肯定を得て、終わらせがつもつなのだ。雅貴の否定を望んでいなかつた。

その事が更に雅貴の動搖を誘つた。

彼女はどうしてそんなに簡単に終わらせられると思つてゐるのか、いつそのことの方が不思議だつた。

自分たちはうまくいっていた。

確かに、実咲を抱いた後の訳の分からぬいらだちを紛らわせるために、他の女性と関係を持つたことは何度かあつた。けれど、そのどれもが、その場限りでしかなく、実咲のことを適当に扱つたつもりは一度もなかつた。

こんなに大切にしているのに、それに気付いてない実咲に、思わず笑みがこぼれた。

「実咲なら、それでもいいけど？」

その言葉に、彼女の顔が複雑そうにゆがんだ。

彼女は自分の事が好きなのだと、その表情から改めて認識すると、自然と雅貴の表情はゆるんだ。

こんなに大切にしているのに、そんな些細な事を実咲が気にする必要はないのに。

そう思う反面、えもいえぬ興奮と快感が雅貴の中に、わずかに湧き上がる。

傷つき、逃げようとする実咲。

その彼女を再び手に入れ抱きしめるのを想像すると、いつものいだちが払拭されるようだつた。彼女を抱きしめるといつも理解で

きないいらだちにとらわれた。けれど今なら大切に抱きしめられる気がした。

彼女のことを手放す気は毛頭ない。雅貴は実咲のことを気に入っていた。

けれど、別れるつもりでいる彼女を引き留める言葉が見つからない。

もし相手が実咲でなければ、いくらでも引き留めるための言葉を言う事ができる。上つ面の、耳障りの良い言葉を。けれど、なんとしても引き留めたいこんな局面にもかかわらず、何故か彼女に対してだけは、当たり障りのない恋人らしい言葉を言う気にはなれなかつた。むしろ、不快だつたと言つてもいいほどに。彼女に、恋愛感情で縋つていると思われるのは、雅貴にとつて、絶対的に譲れないところだつた。理由などない。ただ、自分が彼女を好きなのだと、彼女にそう思われるのだけは避けたかつた。

雅貴は考えた。

「じゃあ、賭けるか？」

我ながらいいアイデアだと、雅貴は思つた。

彼女は自分の事を好きなのだ。彼女が賭に勝つても、負けても、彼女にとつて有利。これならば、自分の事を好きな彼女は思いとどまるかもしれない。

彼女はそんな雅貴に呆れた様子で、しかし、それでも賭けを拒まなかつた。

十分だつた。彼女が自分の側にとどまることが決まつた、そのことが雅貴には重要だつた。

彼女のことが好きだつた。恋人としての実咲である必要はない。友達としての関係で十分なのだ。むしろ、友人関係が続いていた方が良かつたのかもしれない。彼女と抱き合う心地よさは捨てがたいとはいえ、あの頃は意味不明のいらだちを彼女に感じることはなかつたのだから。

けれど彼女の性格を考えるに、別れたりすれば彼女はきっと雅貴

の元を去ってしまう。その後に友人関係としてつなぐことは難しいだろう。それだけは避けたかった。実咲を彼女としてでいいから、引き留めたかった。

とりあえず、それはうまくいった。実咲はまだ雅貴の手の届くところにいる。

「なあ、も一回しようか？」

彼女に被さると、それに応えてきたことに満足とした。

彼女に口づけ、抱きしめる。

彼女に触れるのは、ひどく気持ちが良い。それは、腹立たしいほどに。

賭を切り出して以来、ずっと続いていたいいらだちがおさまっていた。彼女にだけ感じる、不可解ないらだちが。あの賭の日以降、感じることがない。

大にしたいと思う気持ちのままに、彼女に優しくいられた。抱いた後も、かわいいと思う気持ちのままに抱きしめることができた。彼女が望んでいるだらう形の関係がそこにあった。

あの日以来、ほかの女性を抱きたいという衝動はなくなつた。彼女へのいらだちと運動しているかのように起つていたあの衝動。かわいい女の子と話すのは楽しい。特に、男慣れしたような女の子。

でも今は、全く興味すらわかない。彼女と一緒にいるのがただ心地よい。

少し素つ気なく突き放すように、けれど求めれば決して突き放すことはない彼女。躊躇うその動作一つに、彼女の好意を垣間見る。それがたまらなく心地よかつた。

実咲は俺のことが好きなんだ。

そう実感するほんの些細な一瞬に快感を覚える。そんな彼女がかわいくてたまらない。

かわいい実咲。いっぱい優しくしてあげよう。

優しくしてあげるから、以前のように、楽しい関係にしよう。雅貴は機嫌良く携帯を触る。電話をかける先は、もちろん実咲だ。彼女としての実咲も、意外と悪くないと思えるようになつた。元々、実咲から求められて始まつた関係だった。

「つきあつて」

と、あのとき言われた突然の言葉にひどく驚いたのを思い出す。彼女がそんなことを言うわけがないと、心のどこかで思つていた。

あのときは彼女から向けられる好意を、初めて重いと感じた。けれど、少なからず緊張した彼女の様子から、もし断れば、彼女は迷わず離れていくのではないかと思えた。つき合いを断つた後も、変わらず友達でいられるような器用な付き合い方が出来る女ではないだろう。きっと少しづつ距離を置くタイプだ。うなずく以外に、彼女を自分の元に引き留めるすべはないのではないかと思えた。

まあ、いいか。

そう思つてうなずいた。ぐだぐだ考へても仕方のないことだし、とりあえず実咲とのつきあいが切れなければいいのだ。

友達としての付き合いに、体の付き合いが加わるだけ、そんな感じになればいいと思つていた。幸いにもそう思えるぐらいに、実咲の雅貴に対する態度は変わらなかつた。特にべたべたしてくるわけでもなく、変に彼女ぶつて口出しをしてくるわけでもない。

彼女の傍は、以前と変わらず居心地が良かつた。趣味が似ていて、話が合う。友達でいた頃と変わらない彼女。

ただ、付き合い始める前から思つてのことだつたが、彼女は急激にきれいになつていつた。

興味を持つただけだと言つていたが、本当に興味がわいてきれいになつていつたのか、雅貴に見せる為になつたのかは分からぬが、とにかくきれいになつた。

雅貴の好みに合つた「いい女」に。

どうせ抱くのなら、好みの女の方が良い。元々の自然な感じの彼女も好ましく思つていたが、やはりあれでは友人としての感覚が強かつた。

人間として好ましく思つていていた実咲が、女らしい魅力を持つて、雅貴のそばに自然にいる。

友人としての実咲を失うぐらいなら、女としての実咲はいらない。けれど、両方ならばそれも悪くなかった。

けれど、結局、破綻したのだが、それでも何とか取り繕つた現状は、これはこれで悪くない。

電話をすると、少し堅い彼女の声がする。けれど、だんだんとほぐれて、聞こえる声の端々に、彼女の笑顔が思い浮かぶ。

そんな彼女の様子が想像でき、雅貴は軽く浮き立つ。

彼女と電話で話をするのは、こんなに楽しかつただろうか。電話だけではなかつた、彼女の気持ちを引き留めるつもりで連日会いに行つていただけだつたのに、しばらくすれば、単純に彼女といふことを楽しくなつていた。

そういえば、と雅貴は気付く。最近、こんな風に彼女と会話を交わしたことがなかつた。抱き合つ気持ちよさにばかり流され、訳の分からぬいらだちに、彼女と距離を置いていた。その時期をなんだつたんだろうと思ひ返す。

ずっと今みたいな関係でいられたら良かつたのに。距離を置こうとしながら、隠しきれないま雅貴に向けられる、彼女からの好意。

それに気付かないふりして、彼女をもつと楽しませてあげて、彼女に気付かせてやりたい。

どうやって「まかしても、俺のことが好きだ」という事に。

雅貴の表情が自然とゆるむ。

心配なんかしなくとも、実咲は特別なのに。

それに、あの賭がなくとも、今は他の女性に全く興味がわかなくなつていた。雅貴自身不思議なぐらい、全く。

それよりも、彼女がどんな反応をするか、彼女とどのよひにすゞすかの方に興味があつた。

彼女の警戒を解きたい。

彼女に関わることすべてが、楽しくて仕方がなかつた。

彼女は、手をつなぐのが好きだ。

雅貴は、自分から少し離れて歩く彼女をちらりと見る。

彼女と歩くときには手をつなぐようになったのは、ちょっとしたきっかけだった。

それはいつだったか。つきあい始めて間もない頃だったようだ。何かの拍子に手を差し出したとき、少しほにかんだ表情でうれしそうに彼女が手を重ねてきたのだ。

あのときの表情がかわいくて、もう一度見たくて、彼女と手をつなぐのがくせになつた。

腕を組んでも肩を抱き寄せてもそんなに表情が変わつたりしない。彼女が、手を差し出したときだけは、未だにやはり表情がゆるむ。手をつなぐくらいであんなにうれしそうな表情をするのならと、恥ずかしそうに顔を赤らめる実咲を期待して肩を抱いた事もあった。その結果、むしろ嫌そうな顔をされた。事もあるうに肩に置いた手をちらりと見て、仕方なさそうにため息をつかれたのだ。一度と肩を抱くものかと思った記憶がある。しかし、そのときは、意地でもこの手を離してやる物かと思った。

雅貴は手を絡めるつなぎ方も、肩を抱いた時と同じような反応をされた。そんなことがあって、手をつなぐという事を、意識的にするようになった。いつも冷静で落ち着いている彼女が見せる、手をつなぐ瞬間のゆるんだ表情が見たかった。

雅貴は手を差し出すと、ためらいがちにつながれた手を握り返し、なんでもないふりをして歩く。彼女の緊張した表情が、わずかにゆるんでいくのを、さりげなく確かめる。

肩を組んだり、腕を組んだり、指を絡めたり。以前はそういう触れ方の方が親密だと思っていた。けれど、どうやらそれは、誰にでも当たる物ではないらしい、と雅貴は思つ。

彼女にとつては、手をつなぐことの方が、親密なのだ。

慣れると、これも悪くない、と思えた。

普通にただ手をつないでいる状態で、肩を並べて歩く。離れすぎず、近づきすぎない、動きを邪魔されない、ほどよい距離感。つながっている感覚、触れている感触。少しほにかんだような彼女の表

情。

手をつなぎだ瞬間は特に、ゆっくりと柔らかく時間が過ぎてこるので感じた。

「どうかでメシ食つてく？」

声をかけた雅貴に、そつだね、と少しゆるんだ表情で彼女がうなずいた。

彼女と共に過ぎていく時間は心地よかつた。

賭など彼女をとどめるためのただの口実だった。

その結果、思つてもいなほど、心地よい関係が出来上がつていた。

雅貴は、そのことに満足する。

彼女が喜ぶのなら、このまま警戒を解いてくれるのなら、この状態をずっと維持してあげようと、心底思つた。

会社で打ち合わせをしながら雅貴は気付かれないように時計をちらりと見る。

思つた以上に遅くなつていた。

予定外の仕事が入り、実咲との約束に間に合ひそうになかつた。

もう既に約束の時間をわずかに過ぎている。

雅貴は合間を見て抜けだし、彼女に電話をかけた。

『もしもし?』

落ちついた彼女の声が響く。

「実咲? 『ごめん。仕事が入つて、今日は行けそうにない』

『そう。大変そうね』

少し気遣うように穏やかな声が返つてくる。電話の向こうで彼女がわずかに微笑んでいるのが想像できた。

『じゃあ、がんばってね』

このところ忙しく、雅貴がドタキヤンをしたのは、三度目だつた。約束をしたのは雅貴自身で、それをキャンセルするのも雅貴自身。なのに、彼女はただ静かに受け入れる。

ほつとする反面、彼女は腹が立たないのだろうかと思う。電話口や、会つたときの彼女の様子では全く気にした様子もないのだが。「誘つておいて、何度もごめん」

『良いよ。ちょうど行きたいところもあつたし』

時間が出来たよ、そう言って彼女が電話の向こうで笑つた。

『ありがとう。じゃあ、また、連絡する』

雅貴は電話を切り、小さく息を吐いた。

いつかの、訳の分からぬいうだちに似た感情が、わずかに、雅貴の胸に芽生えていた。

以前のいらだちと似ているようで、どこか違つ。

あのときはイライラすると彼女を見るのもいやだった。

けれど、今は、今すぐ、彼女に会いに行きたい。

仕事が終わると、訳の分からぬ感情につき動かされるまま、彼女の部屋に向かい、部屋に明かりがついているのを確認して、彼女の部屋のベルを鳴らした。

「……雅貴？」

夜遅くの訪問に驚いた表情の彼女が顔を出した。

寝る前の、すっぴんで色氣のないパジャマ。気の抜けたその感じが、意外とかわいくて動搖する。

「……最近、会つてなかつたから」

「会つてないって。何言つてるの？ ついこの前会つたのに」

あきれたような声と困つたような彼女の笑顔。けれどすぐに彼女はほほえみ、雅貴は部屋に招き入れられた。

雅貴は、その様子にふと考える。

もしかして、彼女は、俺の相手をするのが本当に煩わしいのではないだろうか。

距離を取ろうとしているのは、煩わしいから……？

なかなか会えずに、自分がイライラしている間、彼女は全く気にはせずに過ごしていたのだ。しばらく会つていないと感じる自分とは裏腹に、会えない時間は彼女にとって長くはなかつたのだ。

「これでも、ドタキヤン続きを読むの反省しているんだけど」

雅貴が会いたいと思うほどに、彼女はそうは思つていない、そのことがわずかに癪に障る。

「仕事なんだし。気にしなくて良いよ。私、専門バカだし、詳しいことはわかんないけど、営業つて、大変なんでしょう。そんな事で私に気を使わなくとも良いよ。待たせておいて連絡くれなかつたら腹も立つけど。ちゃんとくれてるし」

探る雅貴には気付く様子もなく、彼女は穏やかに答える。少し言葉を選びながら、ゆっくりと、雅貴が気を使わずにすむように。

彼女のその様子を見て、雅貴は力を抜くようにふつと息をつく。

雅貴の視線の先で、彼女がグラスにお茶を注いでいる。

「会えなくて寂しくない？」

雅貴がからかうと、彼女は笑った。

「今、会ってるし」

そう言いながら、ビードとグラスを渡される。

雅貴はそれを飲んで、ぶほっとむせこむ。

「何これ」

口の中に広がる苦みと、そして独特の臭い。

雅貴の動搖する姿を見て、彼女が楽しそうに笑つた。

「どくだみ茶。まずいでしょ。なんか、この前親がくれたんだけどね。あんまりますいから、早く消費しようかと思って」

「俺に飲ますなよ」

苦笑いする雅貴に、彼女がすまして答える。

「私一人で飲んだら、なかなかならないじやない」

彼女はそう言うと、からかうように雅貴を見た。その様子に雅貴もわざとらしくため息をついた。

「やっぱり、実は怒つてただろ」

「怒つてないって」

彼女は楽しそうに笑つている。

雅貴も笑つた。

楽しくて、居心地が良くて、それが胸の奥をわずかにちりちりと痛ませた。

楽しい気持ちの中に、なにか、小さなしこりのよつな物を感じていたが、雅貴は笑いながら見ぬふりをした。

グラスを置いて彼女にキスをする。

「どくだみ茶臭い」

そう言つて笑つた彼女の鼻をつまんで「誰のせいだよ」と笑顔を交わす。

笑いながらキスをして、彼女のパジャマの中に手を滑り込ませる。

「ここは居心地が良い。」のまま彼女との関係を続けていたい。

今は、まだ……。

雅貴はその日、久しぶりに落ち着いて実咲と会えた気がしていた。ようやく仕事が落ち着いた休日前の夜だつた。

隣に彼女がいる。それが心地よい。

「ねえ、どうして最近、こっちに呼ぶの？」

彼女の言葉に雅貴はちらりと田を向けると、彼女はソファーに座り子犬を抱いているのが見えた。伸ばした背筋、少し堅いその表情。雅貴はにやつと笑つて返事を返す。

「はあ？ 実咲、おまえ、俺に何してきたか覚えてないわけ？」

「……何よ」

虚を突かれたようでわずかに彼女がひるんだ。

「行くと連日どぐだみ茶出されて。おまえんち行くと、飲み物、どくだみ茶しか出でこないじやないか」

雅貴の言葉に彼女が笑つた。

「最近、飲み慣れたから気にしてなかつたよ」

少しづつ彼女の緊張が解けてゆくのが見て取れた。

その様子に雅貴は気分を良くする。

雅貴が自分の家に彼女を呼ぶようにしたのには理由が他にあつた。家に呼ぶと、わずかに彼女が緊張するのだ。少し強張り、少し動揺しているようにも見える。雅貴はその緊張をほぐすのを楽しんでいた。

まだわずかに緊張を残していた彼女が、犬たちに触れて、ふと表情がゆるむ。力の抜けたその表情に、訳もなく軽くいらだちを覚える。

ゆるんだ表情で、彼女が子犬にキスをした。

相手が違うだろう。

それが気にくわなくて、雅貴は子犬を取り上げると、彼女にキスをした。なぜか、たつたそれだけのことが、楽しかった気持ちに影響

を差す。雅貴は軽くイライラしていた。

緊張していたくせに。俺のことが好きななら、この部屋にいるのだから俺のことを考えていればいいのに。

そんないだちを隠し、けれど、その隠したいだちにまかせて、彼女をベッドに誘った。

すると、わずかに彼女の体がこわばり、再び緊張しているのが分かる。

イヤなのだろうかと一瞬考えるが、抱きしめると彼女の腕が背中に回ってくる。

雅貴の口元がゆるんだ。

そうだ、俺のことだけ、考えていればいい。キスをすると、彼女が舌を絡めて応えてくる。

満足して少し体を離し、彼女の様子を見る。どこか、遠くを見るような様子で何かを考えているように見えた。

胸がざわつく。腹の奥に沈んでいたしこりが、またざわざわと波紋を広げていく。

「……何考えてんの？」

ざわめく気持ちを隠して、雅貴はなんでもないふりをして彼女に尋ねた。

「ドアの向こうで、寂しがってる子がいるよ

彼女の言葉でドアの向こうで甘えた声を出す犬の存在に、初めて気付く。

犬の事なんて、どうでもいいだろう。

一瞬、そんな事を考えた自分に驚く。

雅貴は、なんでもない顔をして笑った。笑いながら彼女をからかう。

犬のことなら俺が考える。彼女は俺のことだけ見ていればいい。

雅貴はいだちを隠して、彼女を欲しいと思う欲求のままに彼女に覆い被さった。

俺のことだけ、考えていいのに。

週末、雅貴は初めて彼女を自宅に泊めた。

同性の友人以外にこの家に人を泊めたことはない。

雅貴はため息をついた。

なぜだろう。落ち着かない。

仕事は今週いっぱいが山だった。つまり、今週いっぱいは、彼女と会う時間はとれなかつた。

出来るだけ時間を取りつて彼女に会おうと決めていたのに、先週からはキャンセル続きで、まともに顔を合わせたのが週末だった。

それは、楽しい週末の筈だった。実咲の機嫌も悪くなく、雅貴の思い通りに過ぎた休日。

あの日の彼女は相変わらず少し距離を取りつつ、けれど、仕切り直した頃に比べれば笑顔も自然にこぼれるようになっていた。

それを望んでいたはずなのに、彼女との距離が縮まるほどに、雅貴は訳の分からぬいらだちを感じるようになっていた。

それは、仕切り直す前、実咲を抱いた後に感じていたいらだちと、よく似ていた。

週末、雅貴は初めて実咲を自宅に泊めた。同性の友人以外をこの家に泊めたことはない。

思い出して、雅貴はため息をついた。

なぜだろう。落ち着かない。

仕事は今週いっぱいが山だつた。つまり、今週いっぱいは、彼女と会う時間はとれなかつた。

出来るだけ時間を取つて彼女に会おうと決めていたのに、先週はキャンセル続きで、ようやくまともに顔を合わせたのが週末だつた。それは、楽しい週末だつた筈だつた。実咲の機嫌も悪くなく、雅貴の思い通りに過ぎた休日。

あの日の彼女は相変わらず少し距離を取りつつ、けれど、仕切り直した頃に比べれば笑顔も自然にこぼれるようになつていて。

それを望んでいたはずなのに、彼女との距離が縮まるほどに、雅貴は訳の分からぬ苛立ちを感じるようになつていて。

それは、仕切り直す前、実咲を抱いた後に感じていた苛立ちと、よく似ていた。

また持て余し始めた苛立ちに、ふと、雅貴は想像する。

それは、ほんのいたずら心だつた。

少しずつ実咲に対して大きくなつていてる苛立ち。雅貴の中での実咲の存在は大きくなつていて、彼女が悪いわけではないのは十分に分かっていた。彼女のことがかわいくて、愛しくてたまらないとすら感じているのに、それでも募る苛立ちがあつた。

一度離れかけた彼女が、側にいることを実感したくて、毎日電話をかけていた。彼女の声はいつでも心地良く、彼女が自分の彼女で

あることに、ただ安堵していた。

なのに、その思いに反して募つていいく、理解できない苛立ち。彼女と一緒にいるときに時折感じるどうしようもない焦燥感。それは雅貴の中でしこりとなり、腹の底をずんと重くする。そして、一人になると、腹の底からどうしようもない苛立ちがわき上がってきた。

会うたびに、じわりじわりと重くなつていいく腹の底にあるしこり。会うたびに大きくなつて、波紋を広げ、苛立ちを増していく。そんなときに不意に思つのだ。

「彼女を傷つけてみたい」

と。

どうしようもなく、感情のままに彼女の心を踏みにじつてみたいという欲求が胸の中を渦巻いた。

けれど、想像はしても、実際にはそんな事をするつもりはなかつた。一緒にいればそんな気持ちよりも、大切にしたい想いが勝る。彼女が笑顔でいられる状態を作りたいと感じる。

けれど、間違いなく雅貴の中で広がつていいく、苛立ちという名の波紋。

少しだけ。

雅貴は想像した。

そうだ、少しだけ、小さないたずらをしてみよう。少しだけ、彼女が傷ついたずらを。その思いが止められなくなつた。

自分のせいで傷つく彼女を見たかつた。どうしようもなく彼女を傷つけたくなつた。

その考えは、想像だけでたまらなく楽しく雅貴の心をくすぐる。

傷ついた彼女を見てみたい。そして、傷ついた彼女に、なんて声をかけようか。

何をすれば、彼女は傷つくだろう。

手放したくない想いと、傷つけたい想いとが、雅貴の中では何の軋轢を生じることなく同時に存在していた。彼の中では矛盾することなく、当然のようだった。

雅貴はかつてセフレとして関係を持ったことのある女性を呼び出した。

実咲と付き合いを仕切り直して以降は、全く顔を合わせることもなかつた女性だが、今の彼女をちょっとからかいたいんだ、という雅貴の言葉に彼女は楽しそうにうなずいた。

行動範囲が似ていた為に、別れてからも時折顔を合わす機会があり、今でも言葉を交わすぐらいには親しい仲だつた。しかし、体の関係はあっても、それ以上の関係ではない。

もうすぐ待ち合わせの時間だつた。

実咲は、どんな反応をするだろう。

想像して、雅貴は口元がゆるむ。

それは、たわいもないいたずら心でしかなかつた。

怒るだろうか。悲しむだろうか。それともなんでもないふりをするだろうか。

そういえば、と、賭のことを思い出す。

雅貴が浮気をすれば「何でも言う事を一つ聞く」そういう賭だつた。キス程度で浮気になるかどうかが微妙だとは思つたが、セックスまでする気にはならなかつた。

今は、実咲以外を抱きたいとは思えない。実咲だけで良い。

だから、ちょっとだけ傷つけて、彼女が望むのなら本当にこれっきりにしよう、彼女を思い浮かべながら、雅貴は想像する。

思いついた悪戯は考えるほどに楽しかった。

とはいって、悪戯でした、では彼女も納得はしないだらう。そう思つて、何をすれば許してもらえるかも考えておく。消去するのが面倒で携帯に残つていい女性達のメモリーも全部消せば納得でもしてくれるだらうか。

そういう考えているうちに彼女が来た。

それを確認して、実咲が自分たちに気付く頃合いを見て、女性とキスをした。キスをしながら、ちらりと彼女を見る。

実咲が驚いた様子で固まっているのが見えた。

もう一押ししておいた方が良いだらうか。

雅貴は、もう一度見せつけるようにキスをする。

彼女のこわばつた顔から、表情が消えたのが見えた。

しまつた、やり過ぎた。

たかがキスと思つていたが、実咲にとつてはそうでもなかつたのだろうか。

雅貴はとつさに女性から身を離すが、既に実咲は背を向けてその場を去ろうとしていた。

慌てて女性に別れを告げると、実咲を追いかけた。あの様子では、かなり彼女を怒らせたらしい。女性の文句を言う声が聞こえたが、それにはまつていてる暇はなかつた。

「実咲！」

駆けより彼女を呼び止める。

けれど、どんなに謝つても、彼女の態度は軟化することはなかつた。それどころか、賭の話を持ち出すとより怒りを増した様子で、静かに雅貴を切り捨てた。

「一度と私の前に顔を見せないで

背中を向けたまま、彼女が冷たく言い捨てる。

血の気が引くような言葉に、雅貴は息をのんだ。腹の底にあるしこりが、いつものようにごずしんと重くなる。けれど広がる波紋はいつも苛立ちではなく、どうしようもない焦りだった。

「悪かった、ホントに悪かったから！ そんなに怒らないでくれ」必死になつて言いつのると、彼女が冷めた目で雅貴を振り返る。振り返つた彼女にほつとしたが、それはつかの間の安堵となつた。雅貴が必死で彼女の気持ちを和らげようと思つても、彼女の表情は硬くなるばかりで、それどころか時折あざけるように雅貴を見つめている。

実咲のそんな視線をうけたのは初めてだつた。

違う、俺の望んだことは、こんな事じやない。

雅貴の胸の中がざわめく。息苦しかつた。

「俺のこと、好きじやないの？」

雅貴はその事実にすがつた。

だから怒つているんだろ？ そう、彼女の気持ちを探つた。

やり直そうという雅貴の言葉に、嫌悪感すら浮かべて彼女は嘲笑する。

「あんた、何したか分かつてないわけ？ 人傷つけて、それが簡単に許されるとでも思つてんの？」

言われてみればその通りだと思つた。けれど、違うのだと雅貴は訴えたい衝動に駆られる。

確かに彼女を傷つけたいと思つていた。けれど、ほんのいたずらに過ぎなかつたのだ。そこまで彼女が怒るとは思つてもいなかつた。こんなに怒るほどに傷つけるとは思つていなかつた。賭を持ち出してわびればすむと思つていた。

ほんの少しだけ傷つけて、彼女を抱きしめたかつただけだつた。

けれど、言い訳をする雅貴を、彼女は怒りもあらわに切り捨てた。

「所詮あんたはゲームみたいに遊んでいるだけでしょ？」

彼女の言葉は嘲りを伴つて、斬りつけるように雅貴を襲つ。怒りの中に彼女の苦しみが見え隠れする。それはそのまま彼女の言葉の重さとなつて雅貴に突き刺さつた。

けれど実咲は更に雅貴を斬りつける言葉をたたきつけてくる。

「本気でもないあんたをみて、何を喜べって？」

彼女の言葉に、雅貴は動搖していた。そんな風に思わせていたとは思つてもいなかつた。返す言葉がない。自分がやって來たことは、つまりそういうことだとようやく知る。

けれど、それだけじゃない。

雅貴は実咲との思いのすれ違いに動搖しながら、どう言えれば分かってもらえるだろうと考える。

雅貴の中に彼女を思う気持ちは確かにあつたのだ。やり方は良くなかつたかもしれない。けれど、彼女だけと付き合つつもりだったのは本気だった。それは分かつてもらいたくて雅貴は言葉を詰まらせながらその気持ちを訴えた。

けれど、雅貴の必死の言い訳を聞いたとたん、彼女の顔がゆがんだ。

その表情の変化がどういう意味なのかは、雅貴には分からなかつた。ただ、その言葉で、決定的に彼女が雅貴の存在を切り捨てたのが分かつた。

何がいけなかつたのか雅貴には分からなかつた。

実咲が望むのなら、彼女とだけ付き合つつもりだと、本気だと訴えたというのに。

彼女は何も言わなかつた。ゆがんだ彼女の顔は、嘲笑しているようにも、怒つているようにも、悲しんでいるようにも見えた。だがすぐにその表情さえも消え、彼女は雅貴に背を向けた。

「バイバイ

去り際に聞こえてきた素つ氣ない彼女の声。

雅貴は呆然と彼女の背中を見送つた。

なにが、いけなかつたのだろう。

彼女の背中を見ながらぼんやりと彼は考える。

ちょっとしたいたずらのつもりだった。
けれど、それは最悪の判断だったのだと、この時になつてようやく気が付いた。

途中まで、あんなつまべつめていたの……。
……俺は、どこで聞えたんだらつ……。

遠ざかっていく彼女の背中が、どこまでも冷淡に、雅貴を拒絕していった。

携帯電話を手に取り、液晶画面を見ながら、いつもの操作をする。発信履歴が表示された。

後は、発信ボタンを押すだけだった、が、押しかけて、雅貴はふと力を抜くように息を吐くと、やめた。

携帯をぽんとソファーの上に投げる。

何を言えばいいのか分からなかつた。彼女があれほどまでに怒つた理由さえ、雅貴には分からなかつた。分かつていいのは、ただ、取り返しのつかないことをしたのだと、それだけだ。

電話をかけても、きっと彼女は取つてはくれない。

その確信がある。彼女は、あの瞬間雅貴を拒絶したのだから、あの様子だとそう簡単に許してもらえないだろう。そう思うと、また雅貴から一つ溜息がこぼれる。

そんなつもりはなかつた。

そう、心の中で、言い訳を繰り返す。

ほんの少し。ほんの少しだけ、彼女を傷つけたかっただけだった。

それが、こんな結果につながるとは思いもせずに。ほんの少しくてよかつたのに。

雅貴は思いも寄らない結果を後悔して溜息をつく。

いや、そもそも、どうして俺は実咲を傷つけたかっただろう。

雅貴は、初めてそのことを考えた。確かに彼女に對して苛立つていた。だから、傷つけて、たぶん「冗談だよ」と抱きしめたかったのだろうと思つた。

その考えに至り、雅貴は自分が何も考えていなかつたのだと氣付く。

溜息が出た。

雅貴は自分が彼女がどんな気持ちでいるのか、彼女がどう感じる

かとか、全く考えていなかつた事を、今になつて知る。

ただ、自分に都合良く彼女を動かそうとしていた。彼女の気持ちをすべて分かつてゐる氣分になつて。

やりきれなさを抱えながら、雅貴はソファーの背もたれに体を深くあずける。沈み込んでいく感触は、自分の今の気持ちのようにも感じた。

俺は、実咲の何に苛立ちを感じていたのだろう。自分の中に答えを探るが、何一つ彼女に悪いところはなく、いくら考えても分からなかつた。

しばらく時間をおこす。

雅貴はベッドに潜り込むと目をつぶる。

お互い、もう少し頭が冷えてきた頃に連絡を取ればいい。今は、雅貴自身、どうすればいいのか分からなかつた。

実咲に別れを突きつけられてから数日が経つていて。雅貴は、会社の玄関を前に立ち止まる、覚悟を決めるように息を吸い込む。その日は、実咲のいる研究室への納品日だった。

彼女と話す機会があるかと少し緊張しながら雅貴は研究室の前に立ち改めて深呼吸をすると、そのドアを開け、いつものように声をかけながら室内を見渡す。

実咲はデスクワーク中のようで、一番雅貴の近くにいた。彼女が声に反応して振り返ると雅貴を見た。

ほつとして声をかけようとした雅貴は絶句する。実咲が、雅貴を見た瞬間に不快そうに顔を歪ませたのだ。

まだ、怒つてゐる。

当然だと思う理性とは裏腹に、腹立たしくなつた。あれは、ただのいたずらだった。そこまで嫌悪されるようなことをしたつもりはなかつた。

苛立ちを押さえながらも彼女にどう声をかけるか、迷つてゐる間

に、他の女の子がやつてきた。内心そのことに不快感を覚えながら、雅貴は営業らしくにこやかに商品を受け渡しする。そして研究室を後にしながら、雅貴はちらりと実咲の背中に目をやつた。

雅貴に視線を向けることなく仕事を続いている彼女に、まだ、怒りは解けてないことを感じ取る。

もう少し、様子を見よう。

雅貴は自分を落ち着けるように、そう心の中で呟く。悪いのは自身であることは分かつてはいたが、それでも実咲の態度が腹立たしくもあつた。かといって、彼女が許してくれないからと、諦めるつもりもない。

それでも今は、互いに時間が必要である「と思われた。
どう謝れば、彼女は怒りを解いてくれるだろう。

雅貴は鬱々とした気分で考える。対応一つ間違えば、確實に彼女は離れていく。慎重に事を進めなければいけないのだと、雅貴は先日の失敗を思いだし、自分に言い聞かせる。

苛立ちに振り回されて対応を誤つたらおしまいだ。
必ず、もう一度実咲を手に入れる。

それだけは諦めるつもりはない。焦つてたら仕損じる。
雅貴は深く息を吐き、感情を抑え込む。
もう少し、時間をおこつ。

雅貴は、焦る気持ちを抑えつけて、行動を起こすのを堪えた。
それが間違いだと気付いたのは、彼女に振られてから一週間以上が過ぎてからだった。

「どう」とく、俺は実咲に対しては読み違いをするらしい。

雅貴は携帯を握りしめて重い息を吐いた。

電話がつながらない。

電話番号が変わっているらしい。

動搖して携帯を持つ手が震えた。

実咲に拒絶されたのが、これほどまでにきついとは思わなかつ

た。たかだか電話ができなくなつた程度だというのに。

彼女は、本氣で自分をたち切ろうとしているのだと突きつけられた。

対応を間違えずに、真剣に気持ちを伝えれば彼女は許してくれるはずだと高をくくつていた自分に気付いた。

もつと早くに謝りに行くべきだったのだ。

握りしめた携帯をじっと見つめる。胸の辺りがずんと重く、いくら息を吐いても軽くはならない。

わざわざ離れていた女に執着する必要はないだろうと、頭の片隅で考えたりもした。けれど、すぐにその考えは打ち消す。実咲と今までの付き合つた女とは、雅貴にとって全く価値が違うのだ。代わりのきく人間だと、もとより思ったことがない。女に執着しているんじゃない、実咲だから関係を取り返したいのだ。そもそも、雅貴は一度たりとて彼女との関係を壊したいなどとは思つていなかつたのだから。

実咲のことはずっと大切にしてきた。してきたのだ。今まで一度も適当に扱つたことはない。何故それが分からぬ。何故そんなに簡単に俺を切り捨てる。途切れた電話を持つて彼女への怒りにも似た思ひがこみ上がる。

イライラする。こんなにも大切に思つてゐるのに、分かろうとしなかつた彼女が腹立たしい。

雅貴は少し浅くなつた呼吸を整えながら、あふれそうになつた苛立ちを押さえる。

違う、傷ついたのは実咲だ。怒つて良いのは、俺じゃない。

雅貴はそう自分に言い聞かせる。

とりあえず家に行つてみよう。

雅貴は立ち上がりつた。が、時計を見て諦める。今から彼女の家に向かえば十一時を過ぎる。ただでさえ怒つてゐる相手に、こんな時間に行つても顔を出してもらえると思えなかつた。

明日、会いに行こう。

もう一度息を深く吐き、今すぐ行動に移したい衝動を抑えた。毎日、溜め息ばかりが増えていく気がした。

行き慣れた道だった。

実咲の車が駐車場にない事にもすぐに気が付いた。どこか、買い物にでも出かけているのか。

雅貴は部屋の前で待とうと、実咲の部屋に向かった。通路を進みながら、彼女の部屋のドアを見て、びっくりと体が震えた。

まさか。

いくら何でも、と、自分の考えを否定する。きっと、チラシか何かだろうと。

けれど、ドアの前にたどり着いて、そのまさかが、まさかだったのだと知った。

入居者に向けた書類だった。

つまり、この部屋は、空き部屋という事だ。

実咲は引っ越ししたのだ。引っ越しをするほど、自分は拒絶されているのだ。

「……そこまで……」

自分でも信じられないほどの衝撃を受け、雅貴は思わず口に出して呟いた。

俺は、実咲に、そこまでさせる、何をしたのだろう。

果然と、空き部屋になつたドアを見る。

なぜ、そこまで拒絶されなければならないのか、雅貴には分からなかつた。

ほんのいたずらだと実咲には言つたのに。

彼女が怒るのは当然だ。それはさすがに一応は理解した。だが、電話番号を変え、引っ越しをし、雅貴からの連絡が取れなくさせるほどのことかと問われると、とてもそうは思えなかつた。

ただのキス一つ、浮氣と言つても些細な物なのに。最初に実咲に

別れを切り出されてから、あのいたずらでしたキスまで、あんなにうまくいっていたのに。そこまで拒絶される意味が分からなかつた。確かに、その辺りの倫理観に、少々隔たりがあるのは雅貴にも分かるが、それはいつても、たかが冗談のキス一つなのだ。

何度も自分で繰り返したか分からぬ言い訳を、雅貴は今日もまた繰り返す。

後悔と苛立ちと、どうしようもない苦しさと、絶望感、表現しようのない怒りが雅貴の中をせめぎ合つていた。

実咲の会社とは研究室からの注文と、事務から受けたオフィス用品の注文がほとんどだ。

実咲のいる研究室は消耗品であるシャーレの回転によりけり、一、二週間に一度納品に行く程度。

雅貴は、事務室に向かいながら、ちらりと研究室に向かう通路を見つめる。用もないのに押しかけたり、他の研究員のいるところで声をかけたりというのも、何度も考えた。雅貴自身は、そんな事は全く気にならない。

しかし実咲は、自分と付き合っていることを知られるのを極端に嫌っていた。

雅貴のファンが多いから居心地悪くなるようなことは絶対にやめてと、とことんまで念を押された。もし今、人前で実咲になれなれしく声をかけよう物なら、修復不可能になりかねない。ただでさえ何度も打つ手を間違えているのに、これ以上失敗をするわけにもいかないのだ。

研究室に向かいたい気持ちを抑えて、雅貴は事務室のドアを開けた。

そこで、あれ？ と一人の事務員に目がとまる。

そういうえば、佐藤さんは実咲の友達だつたな……。

雅貴は彼女に目をやりながら、ただ一人、この会社で雅貴と実咲が付き合っている人間がいたことを思い出した。

「佐藤さん？ ちょっと良いかな」

雅貴はっこりと笑って、彼女に声をかけた。

何なんだ、あの女……。

雅貴は、仕事を終えて家に帰つてから、ソファーに横たわった。

犬たちがわらわらとよってきて雅貴を歓迎する。

「ああ、ホント、お前らは優しいよな……」

犬たちを撫でながらため息をつく。

実咲が親友と言っていた涼子に声をかけて、ちょっと電話番号を教えてもらおうと思つていただけなのに、ものすごいボディーブローをいただいて帰る羽目になつた。しかも、何の収穫もない。あれで、本当に実咲の友達かよ……。

雅貴はげんなりとしながら思い返す。実咲は割と物をはつきり言うとはいえ、基本的に穏やかで優しい女だ。

ところが電話番号を聞いた雅貴に、涼子はにっこりと華やかに笑うと、人気のないところに連れて行かれ、ものすごい棘のある言葉でぐさりとやられた。

「井上くんさあ、私がそんな事教えると思つてるんだ」

クスクスと楽しそうに笑つたその目が、ものすごい怒氣をはらんで睨み付けてきた。

「信頼できない人に、教えるわけないでしょ」

全く笑つていらない目つきで、けれど、口元と声は楽しげに彼女は言つた。

「それは、佐藤さんが決めることではないんじやない？」

雅貴が不快感を覚えながら、言い返すと、彼女はにっこりと笑つて肯いた。

「その通りね。実咲があなたに会いたくないんだから、私は絶対に教えないわよって言つた方が良い？ 勘違いも甚だしいわよ、井上くん。私さえも説き伏せられないような人が、実咲の信頼を取り戻せるとと思うの？ 実咲の恋心につけ込んでも、また実咲を傷つけて終わるがオチよ。だいたい、本人の許可もないのに教えたりなんかしたら、プライバシー保護法で訴えられちゃうじゃない？ 他の人に聞こうなんて気は起こさないでね？ そんな事したら、実咲、会社自体をやめかねないから。井上くん、そこまで実咲を追い詰めた

つて、……分かつてないでしょ？」

雅貴が探るように涼子の目を見ると、彼女はひるむことなく、嘲るよう視線を返してきた。

「分かつてたら、こんなに軽々しく私に電話番号を聞けるはずがないしね。もう少し、自分のしたことがどうこう事なのか、よく考えてから出直して頂戴」

言いたいことだけ言つと、涼子はひらひらと手を振り、さつさと雅貴を残して事務室に帰つていった。雅貴は彼女の怒気に押され、口を挟むことさえ出来なかつた。

思い出しただけで腹が立つ。ちょっと電話番号を聞いただけなのに。なぜあそこまで言われなければいけないのか。彼女には全く関係のない問題なのに。

そう思い返して、雅貴は盛大にため息をつく。

だが、変な詮索をされることなく実咲との連絡を取る手段は、思いつく限り彼女しかいなさうだつた。

他に共通の知り合いで、自分と実咲が付き合つていたことを知る実咲と親しい友人はいない。

雅貴は、苦々しい気持ちでため息をつく。

急がば回るしかなさそつだ。まずは涼子を説き伏せることからになりそつだつた。

それから、雅貴と涼子の攻防が始つた。

思つた以上に涼子は手強かつた。雅貴が何も手を出せないことをいい事に牽制と暴言とで、精神的にたたきのめされている気分だつた。彼女が、絶対に実咲に手を出させないという決意をしていることは明らかだつた。少なくとも、今の雅貴のままで。

そう、彼女は「絶対に」教えないとはいわないのだ。「今の井上くんには」教えないと言つのだ。

雅貴は、涼子への対応に困り果てていた。

実咲にしたことが褒められたことではないのは分かっているし、実咲を傷つけたことをこれ以上ないほど後悔していたし、もう一度とする気もなかった。ちゃんと謝って、実咲を説得して、やりなおしたいと思つていた。

しかし何度も反省していることを説明しても、本気だと訴えても、涼子は「そんなんじや、同じ事繰り返すわよ」と繰り返す。なぜかと尋ねても「ちゃんと考えて。自分の考えが正しい、私がいぢやもんつけてると思ってるからわかんないのよ」と言つばかりで、答えようとはしなかった。

何度も田のトライだつただろうか。苛立ちを隠しながらの雅貴の貌願に、とうとう涼子から違う言葉が返ってきた。

「今度、駅前のファーストフードの店内で九時頃待つてもらえる？ 見つけやすいよ、窓際に座つておいてね」

そんな時間にどうこうつもりかと思ったが、雅貴は言われた通りに指定された店内の窓際で涼子を待つた。けれど、時間を過ぎてもなかなか彼女は現れない。

いいかげんに帰ろうかと思つたところで、歩道を歩く集団の中に涼子を見つけた。

男女入り交じつて楽しそうに話しながら歩いている。

合コンの後かよ。

ため息をつくと、涼子と田があつた。彼女は、にんまり笑うと、雅貴に手を振る。

それが、隣の女性から隠れて手を振つてゐるようすで、ふと、後ろ姿になつている女性に田を向ける。

実咲だつた。

あの女……！

雅貴は、涼子を睨むと立ち上がつた。とたんに、笑つていた涼子の顔が豹変した。憎しみでもこもつてゐるかのようないで雅貴をにらみつけ、来るなと牽制する。

雅貴は我に返り、拳をぐつと握りしめもう一度椅子に座つた。今、

あそこに行つてしまえば、実咲の反応がどう返つてくるのか分から
ない。今、あそこに行くのは、おそらく自分にとつて不利だ。

椅子に座つて睨み付ける雅貴を満足そつて見つめて、涼子はこつ
こつと笑うと手を振り去つていった。

雅貴は今にも噴き出しそうな怒りを抑えながら、それを見つめる。
どういうつもりなんだ。

怒りに駆られながら見つめる視線の先に、実咲の後ろ姿がある。
笑いながら隣の男と話していた。

腹立たしかつた。他の男と話す実咲への怒りなのか、実咲と話す
男への怒りなのか、わざわざそれを見せつけてきた涼子への怒りな
のか、雅貴は自分でも判別付かなかつた。

ただ、今はこらえるしかない怒りが胸に渦巻いているのを、必死
で抑えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2856t/>

アクセサリー

2011年10月8日03時23分発行